
ツイートピア

・」

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツイートピア

【Zコード】

Z49870

【作者名】

・

【あらすじ】

時は西暦2100年。人間の体内にツイッターを組み込むシステム「バイオツイッター」が実用化された時代のお話。主人公の「ノルコ」は、ごく平均的な家庭に育つた女の子。彼女を中心として過ぎてゆく日常は、一見ありふれたもの。が、バイオツイッターによる相互監視が当たり前になっていたり、お金を必要としない経済システムが確立していたりと、よくわからないことになっている。しかしそんなことはノルコにはどうでも良いことで、以下の課題は「良いお嫁さんになる!」ということだった……。（ワンシーン）

40文字以内
(

ツイートマーク (記書き)

【用語】

ツイート：何気ないつぶやき。会話とはちょっと違つたりする。
TL：タイムライン。ツイートを新しいものから順に並べたもの。
リプライ：特定の人向けたツイート。

(1) ジリリリ、ジリリリ　田覚まし時計を止め、ベッドから起き上がりた少女。彼女の名前はイズミ・ノルコ、小学五年生だ。寝癖がピンピンとはねた頭をポリポリしつつ、「おはよー」とつぶやいた。ここはツイートピア。こつしか世界はツイート(つぶやき)で結ばれるようになったのだ。

(2) ノルコは鼻歌をつぶやきながら服を着る。そしてランドセルを持って一階のリビングに駆け下りた。朝ごはんの仕度が出来ていた。ノリコ「めだまやきた!」母「今日はお米を買ってこなきや」父「また田高かー」弟「ウエエーイ」みんな好き勝手につぶやいてばかり。だつてここはツイートピア。

(3) ノルコは玉焼きの黄身とご飯を混ぜて、醤油をちょっととかけて「チ卵」はんを作つて食べるのが好き。イズミ家は父母とノルコと弟の四人家族。弟の名前はイズミ・セルゲイビッチロマーノフ(自称)なんだけど、長いから弟でいいよね。弟「ウイイイ?」

(4) 朝食を食べたノルコと弟のワク(本名)は、集団登校のために玄関の前でみんなを待つ。ノルコ「あうつ、寝癖が」何度もクシを入れてみるが、てっぺんの毛が手ごわいのだ。そのうち皆がやってきた。「アホ毛」「アホ毛だ」「アホアホ!」「アホモー」ノルコ「つむへえ」

(5)

ノルコ達、眩音つぶやね小学校の一団は、朝日が照らす小奇麗な街角を歩いていく。集団登校するのは治安が悪いからではなく、その方が楽しいからだ。「ノルコの一人ソ、シマシマでいいね!」「うわー、犬のウンコー!」「大丈夫にゃ問題にゃい」通学路を元気やかなリプレイが飛びかう。

(6)

校門付近に変な人が立っていたので、一行はリプレイをいつたん止めた。男「ビヴァーチュ! ついにここににたどり着いた! 素晴らしい!」男は一人ツイートを繰り返しながら歩き去つていった。少し不思議な人であるらしい。ノルコは「一人ツイートって楽しいのかな?」と思つた。

(7)

教室に入ると自動的に全クラスメートと相互フォローになる。レイタ「ちつ、今日の授業つまんねーの! 体育も音楽もねーじゃん! 楽しみ給食しかねーじゃん!」ジエネ・レイタ君がいつも通り咳きまくっている。彼は金髪シンシン頭の自称イケメンだ。ノルコは正直ウザイなといつも思う。

(8)

ノルコ「算数だつておもしろいよ?」レイタは「へっ!」つといて机の上に飛び乗り、くるくる回つてからビシッヒノルコを指差しつぶやいた。レイタ「算数が好きな女つて変だな!」女子「そんなことない!」×15リツイート。少年は朝から全女子を敵にまわしてしまつたようだ。

(9)

レイタ「割り切つてやるぜ! 7÷3でも9÷2でも、俺なら割

り切つてみせるぜ!」一同が全員ため息をついた時、予鈴がなつて先生がやつてきた。先生「そつか、じゃあまずキミから割り切つてあげようね」先生はそう言ってレイタの両耳をつまむと、思いつきり引っ張った。レイタ「ア”ツー！」

(10)

レイタ「体罰反対」午前の授業中、彼はずつとそういう咳していた。おかげで午前中のタイムラインは「体罰反対」と「レイタうるさい」で8割埋め尽くされてしまった。給食の時間、彼は先生と目が合つや否や「たいばつ……」とうとうクラス全員にリムーブされたようだ。

(11)

お昼休みのあと授業はお昼寝の時間と決まっている。しかも科目は「つぶやき史」で、先生は癒しのウイスパーボイスの持ち主、ツブヤ・クオ先生だ。クオ「じゃあ今日は教科書11ページから始めるんだお」もう既に3人寝た。

(12)

クオ先生はメロンを片手に持ちながらつぶやき始めた。クオ「今から一世紀くらい昔に、世界中でインターネットというものが流行つたんだお。ちょうどこのメロンの表面の模様みたいに、地球上に通信ケーブルが張り巡らされてたんだお」そしてまた6人ほど寝た。

(13)

クオ「このメロンはあとで先生が美味しいただくんだお」そういうつてクオ先生は教え子達の反応を待つ。どうやらウケを狙つたらしい。「ニニニ……×3リツイート」クオ先生はにっこり微笑むとメロンを教壇に置いた。クオ「じゃあ、続きを話すんだおつ

(14)

クオ「インターネットが普及してしばらくたつたある日、頭のいい人たちがツイッターっていうソフトを開発したんだお。それをみんな、パソコンという極めて原始的な情報端末で操作して楽しんだんだお。それなりに面白くて便利なものだつたんだお」

(15)

クオ「パソコンはやがてモバイルに、モバイルはブレイン・インプラントに、ブレイン・インプラントはナノ・インサートにどんどん進化していつたんだお」自称「けなげな美少女」のノルコも、横文字がいっぱい並んだために我慢できず、気絶するようにして寝てしまった。

(16)

クオ「パソコンと呼ばれていた装置は、今はみんなの体に組み込まれてるんだお。耳たぶをクリックするとT-L画面が出るのもそういう仕組みだお。何か質問あるお?」しかし起きているものは誰もいない。それを見て先生はニッコリ微笑む。クオ「じゃ今日はこれで終わりだお」

(17)

チャイムとともにノルコは目を覚ます。ノルコ「あうう、今日も耐えられなかつたか」そして自分の耳たぶクリックし、クオ先生の授業T-Lを呼び出した。ノルコ「うわあ」先生はくねくねと身振り手振りを駆使し、わかりやすい説明に心を碎いていたのだ。ノルコ「いい先生だなあ」

(18)

ノルコはクオ先生のT-Lを閉じ、前の席のレイタを見た。レイタ

「…………うおおつ、ひつまぶしい」 どつやらいい夢を見てい
るようだ。腹立たしい。ノルコはレイタの椅子をボコンと蹴っ飛ば
した。レイタ「敵襲？！…………」 ノルコは次の授業の準備を
しつつ、家族のことを考えることにした。

つづく

ツイートピア 19~40（前書き）

【登場人物】

ノルコ：小学5年生の女の子。自称「けなげな美少女」

ワク：ノルコの弟。横文字大好きな西洋かぶれ。

アフレル：ノルコの父。研究所で働いている。いつもポワーッとしてる。

ヨコ：ノルコ母。美人でたまに学生と間違われる。

【用語説明】

ファボる：ツイートをお気に入りに登録すること。

DM：ダイレクトメール。送った人と送られた人しか見れない。

耳たぶクリック：視界に画面が表示され、その場所のT-Lを確認できる。

つぶやね市：ノルコ達の住んでる街。海に面したけつこう大きい街。

(19)

ノルコが午後の授業をつけていた。母のイズミ・田口はスーパーに買い物に来ていた。リプライが飛んできた。店長「奥さん相変わらず若々しいね! お子さんがいるとは思えねえや!」 水色ワンピース姿の田口。よく学生と間違われ、ナンパされる。田口は返信する。田口「うふふ、当然なのよ店長」

(20)

田口は野菜と肉をカゴに入れ、お米売り場に向かう。田口「5kgと10kgどうひじにしましょ?」 田口は耳たぶクリックでお米売り場のドレを開く。「まあ、お向かいをとつたら5kgと5kg……欲張りねえ」 そして5kgのお米をよいしょと抱きそのままスーパーを出た。

(21)

店長「奥さんちゅうとー!」 店長が必死の形相で追いかけてきた。田口「あらなにかしら?」 店長「奥さん、今日はシユウマイが5割引なんですよ! 買つてこつてくださいよ!」 といつてシユウマイを田口に渡していく。店長「まつたく、奥さん欲がないんだからっ!」

(22)

田口は車に乗り、行き先を自宅に設定して発進させた。そしてシユウマイが5割引きであるとの意味を考えた。田口「つまり、いつも感覚より2倍多く買つてもひんしゃくを買わないよね。買つても買わない、うふふ」 これはシードニア。ドレで全てが管理されてるので、お金はこらないので。

(23)

つぶやね市は太平洋に面しており、年間を通してカラツとした気候。ノルコの父、イズミ・アフレルは臨海地区にある企業の研究所で働いている。家から車で30分のところにある。アフレル「うわっ！」「試験管が絵に描いたように爆発した。ネバネバした液体が飛び散る。アフレル「やっちまつたか」

(24)

アフレルは服や髪やメガネについたネバネバを溶剤でふき取る。何作ってるんです？ アフレル「口に入れても大丈夫な糊を作ります」「へえ、糊ですか。地味だけど重要な製品ですよね。ところでアフレルさんは絶倫なんですか？」アフレル「いたって普通ですが？」

(25)

アフレルさんはなぜ化学製品に関わるうと？ アフレル「本当は僕、『火星』開発に行きたかったんですよ。でも学力が足りなくてダメでした」なるほど化学製品の『化製』と『火星』をかけてるんですね。ダジャレがお上手ですね、アフレルさん。アフレル「いや……そういうわけじゃ」

(26)

アフレル「私がここで働いているのは、たんに私がこの仕事をこなせるからです。私にできる仕事の中で緊急性が高かつた仕事、それが『食べられる粘着剤の開発』だった訳です。平凡な理由ですよ」なるほど。ところで一人ツイートの多いアフレルさんを見て、同僚の方が心配そうな顔をしていますよー。

(27)

実験を終えたアフレルはデスクに戻った。夕日が海に沈もうとしていた。デスク上の電子フォトに家族の笑顔が写っている。アフレル「ふう、今日も良く働いたなー」アフレルが火星を目指したのは事実なのだ。そして彼は、火星に行けたら幼なじみのヨコに告白するつもりでいたのだ。

(28)

妻のヨコは昔からよくモテた。アフレルは自分と彼女では釣り合はないと思っていた。だがある日、アフレルは意を決してこうつぶやいたのだ。アフレル「もし僕が火星に行けたら、そこからヨコにプロポーズの手紙を送るよ」と。笑って流された。しかしヨコは密かにそのツイートをファボっていたのだ。

(29)

アフレルは一心不乱に勉強した。理系大学に進学し、修士課程まで進んだ。資格を得るために職務をこなしつつ、夜遅くまで勉強を続けた。しかし彼が第5次火星開発選抜に合格することはなかつた。次の選抜は10年後。彼はあの約束は忘れてくれと、ヨコにDMを送つた。

(30)

ヨコ『じゃあ私も一緒に連れてってくれるのね、火星に!』それがヨコから届いた返事だつた。あれから月日が流れ、二人の子供が生まれ、今に至る。アフレル「そろそろ帰るか」外に出ると空に星がまたたいていた。アフレル「ちゃんと約束守らないとね」彼はそう呟きつつ家路についた。

(31)

ノルコ「おなかすいたよ!……」学校から帰宅したノルコは自室でそうつぶやいた。今日はいつもの「おやつ」が置いてなかつた

のだ。弟に聞いてみたところ。ワク「ヴェイ？ シュウマイなんて知らナッシン！」とのことだった。（今夜の食事はきっと荒れるなあ・・・）ノルコは率直にそう思った。

(32)

アフレル「ただいまー」 父のその声が夕飯の合図だった。ノルコはダイニングに飛んでいく。テーブルの上にたくあんが一切れだけのつたご飯が置いてあり、その前で弟がグズっていた。「ワク「わへやばれたし」 ヨコ「みんなわかっちゃうんだから、ワクは悪い子ね」

(33)

弟のワク（セルゲイ・ピッヂ・ロマーノフ）は友だちとの交友で悪いことを覚え始めた。食卓でシユウマイを食べると、食卓下にその記録が残つてバレるけど、自室でコツソリ食べれば大丈夫だろうと思つたのだ。ヨコ「レンジでチンした時間が、ノルコが帰つてきた時より20分も早かつたのよ？」

(34)

アフレル「ダメじゃないかワク。ほら、ちゃんと謝つて」 しかしワクは、たくあんご飯を持って部屋に閉じこもつてしまつた。きっと泣いている所を見られたくないのだろうと、そうノルコは思つた。部屋の下は人に見られないように、部屋主の権限でロックをかけられるのだ。

(35)

ノルコは夕食中、姉としてなんとか弟を更生させねばと思つていた。そこで弟に対してもMを送ることにした。Mは二人の間にしか聞こえない、言わば心の声である。ノルコ《意地はつてもいいことないよ？ 母さん、目が本気なんだから》 しかし返事はな

かつた。

(36)

その「」もまた、密かにワクにDMを送っていた。『『今の中、悪いことをするとなんでもすぐにバレちゃうの。でも良いことするとすぐに褒めもらえるの。だからお母さんはワクに良い子になつて欲しいの』』しかし返事はなかつた。

(37)

父のアフレルもまた、ワクにDMを送つていた。アフレル『ふほほおー、やっぱり母さんの作る料理はうまいなあー。この生姜焼きさいーー！ ふほつふ。ワクー、早く戻つてこーい。みんな待つてるぞお？』しかし返事はなかつた。

(38)

三人ともDMに集中しているので、食卓は異様なまでに静かだつた。一方、ワクは部屋の机につづふしたままDMを受信していた。ワク（ショウガ焼き……ウウイイ）しみ上げる食欲に負け、ワクはすじすじと食卓に向かつた。どうやらアフレルのへんてこなDMが、一番効果的だつたようだ。

(39)

ダイニングにやつてきたワクに、三つの視線が注がれていた。ワク「ソーリイ……」と黙つてモジモジ。『『「もつとちゃんと謝るの」ワク「あ、アイムソーリーなんだゾー！」三人は互いに視線を交わし、そしてワクの方を見て、同時に言つた。「日本語で！」

(40)

ワク「おやつ食べちゃつてごめんなさー……」『『「いいわ」そう言って『』はワクのショウガ焼きを暖めなおした。その田ワ

クは！」飯を2回おかわりした。育ち盛りなのだ。田口はおやつを増やさなきゃと思った。ノルコ「ところでシユウマイ美味しかった？」
ワク「オフコース！」

つづく

ツイート♪ア41～61（前書き）

【登場人物】

ノルコ：主人公。小学五年生の女の子。自称けなげな美少女。
ルイ：ノルコの友だち。少し男の子っぽいしゃべり方をする。
レイタ：クラスで一番ツイート数の多い男の子。
謎の男：近ごろノルコの学校に出没する不審者。

【用語説明】

よるぼー：「夜」とふくらひつの鳴き声「ぼー」をあわせた言葉。
5秒ルール：お菓子とか、床に落として5秒以内なら菌がつかない
らしい。

BOT：プログラムに従つてフォロワーのツイートの真似をしたり
する。
RT：リツイート。ツイートをおつむ返しする」と。

(41)

ノルコはお風呂に入つてパジャマに着替え、自室のベッドで「口
ゴロしていた。 ルイ「ノルの明日のアホ毛はね、きつと3本！」
ノルコ「そのアホ毛というのをやめなさい……」 時々クラスメー
トからリプレイが飛んでくる。 レイタ「おまー クソ長……」 即
効ブロック。

(42)

ピヨッター「今日のシユウマイのうほほ」 机の上のひよこ型B
OTのピヨッターがわけの分からないことをツイート。 ノルコ「今
日はとんだシユウマイだつたぜ」 ピヨッター「とんだアフレルの
爆発糊」 ノルコはプツとふき出してしまつた。 ノルコ「はしたな
いわつ」

(43)

ノルコは部屋T-Sを操作して三日分巻き戻した。 三日前、友だち
がノルの部屋に遊びに来たときの光景が再現される。 ノルコ「あつ」
友だちのルイが床に落としたボッキーを、みんなに見られないよ
うに「コツソリ口に運んでいた。 ノルコ「5秒ルール?!」

(44)

ルイ「だつて、もつたいないじやないか……」 ノルコ「ちゃん
と毎日掃除してるんだから。 汚くなんかないんだから！」 ルイ「
え！？ そういう理由で怒ってるのか？」 ルイを小一時間問い合わせ
めた後、ノルコは「口コロで丹念に床を掃除した。 ノルコ「10秒
だつて1分だつて大丈夫なんだから…」

(45)

いい加減じゅうたんがむしれてきた。母からロムが来た。曰く『よるほー』ノルコ「あつ！」そしてあわてて時計を見た。10時を回りうとしている。ノルコ「ねなきや！」ノルコはベッドに飛び込むと、地球のみんなに向かって「おやすみー」とつぶやき田を閉じた。

(46)

ペペペペペペペペ。朝の田覚まし時計がなる。ノルコはパツチリ目を開いて起き上がる。ノルコ「おはよ……う？」自分の頭をさわってみたら、今日は寝癖がついていなくシットリしていた。窓の外からシットシットと雨音がきこえてくる。ノルコ「今日は雨なんかー」

(47)

ノルコは朝ごはんを食べる前にトイレに行く派だ。ノルコ「丁度がないことを確認……と」そういうつて耳たぶをつまむ。トイレ内に丁度を置くことは法律で禁止されているのだ。ノルコは確認を終えると便座に座つた。ちなみに、けなげな美少女はウ〇コなんてしません。

(48)

食卓にて。ワク「マアム、ソイソースブリーズ！」アフレル「おつ、ちょっと円安になつたぞ！」ノルコは厚焼き卵をご飯に埋めてギュウギュウ固めて、なんちゃつて卵おにぎりにして食べるのが好き。ノルコ「うーん」天気が悪いと何となく家の中が陰鬱だな、とノルコは思った。

(49)

ノルコは玄関の前でみんなを待つ。花柄傘クルクル。ワク「袈裟

斬り！ 裂殺斬り！」 弟は自分の傘（別名、聖剣シッツシユバルト）で雨を切ろうと頑張るもズブ濡れだつた。ルイ「のーるー」友だちがやつてきた。ルイ「ノーアホ毛か」 ノルコはルイにチヨツプした。

(50)
ノルコ「あつ、またあの怪しい人！」 校門の近くに真っ黒なレインコートを着た謎の男が立つていた。一同はリプライどころが足まで止めてしまつた。男「雨……レイン……今日は重大なことが起きそうだぞ？ ビバーチエ！」 そういうて男はスキップしながら去つていつた。ノルコ「なんなのかー？」

(51)
ノルコ「はつくしゅ！」 算数の授業中くしゃみをしてしまつた。ノルコ「ティッシュがないなう」 RT「ティッシュ」 RT「ティッシュ誰か RT「ていしゅー」 RT「ていしゅを誰に？」 RT「亭主をノルに RT「ノルの亭主？」 RT「どういうことなの？」

(52)
レイタ「なあ、なんで俺がノルの亭主なん？」 ノルコは問答無用でこぶしをみぞおちに叩き込んだ。レイタ「うふぐう！」 そして隣りのリンちゃんがくれたティッシュを受け取り「ありがとう、みんな！」 と言って鼻をかんだ。あくまでもおしとやかに。ノルコ「ちーん」

(53)
次の授業はみんな大好き体育だ。みんなで跳び箱とマットをヨイショヨイショと用意する。ノルコ（なんか頭がボーッとするな……）ルイ「ノルコ顔赤いよ？ 風邪ひいたんじゃないかな？」 ノルコ「しかし体育は休みたくないなう」 体育館の屋根を叩く、雨の音

が響いている。

(54)

飛び箱が得意な子のグループは、台上前転の練習をしていた。レイタ「俺、兄ちゃんからすつげえ技教わったんだぜー！」といつてレイタは台上宙返りをやってのけた。「うおお」体育館中がその大技にどよめいた。ノルコはそれを見て、ムツとしてしまった。勝手なことをしては危険が危ないじゃないか。

(55)

ノルコ「先生やつていいって言つてないじゃない、怒られるよ？」
レイタ「なんだー？ ひがみかー？」ノルコ「違うもん！ あ
のくらい私にも出来るし！」レイタ「じゃ、やってみるよー」
ノルコ「やらないよ！」そう言い捨てて、ノルコは飛び箱に向か
う。

(56)

ノルコ（宙返りくらい、出来るよ……）ノルコは助走の途中、
ふとそう思つてしまつた。ノルコ（ロイタ板を強くけつて、体が浮
いてから手を突けばいいだけなの）しかし、そんなことをする気
はさらさらなかつた。ノルコはただ台上前転をするだけのつもりだ
つた。しかし……。

(57)

飛び箱が間近に迫つていた。ノルコはいつも通り飛ぼうと板に踏
み込む。その時だつた。ノルコ（んん？！）頭の中がムズつとし
た。そして気がつけば板をかなり強く蹴つてしまつていた。体が予
想以上に高く舞い上がる。ノルコ「うそ！」あぶない！ その場
の誰もがそう思つた。

(58)

ノルコは前転とも前方宙返りともいえぬ、中途半端な姿勢で跳び箱に突っ込んだ。「キャアアアアアー！」ツイートではない本物の悲鳴がその場の空氣をつんざいた。頭から突っ込んだノルコは台上でバウンドし、そのままマットに向かつて放りだされた。誰もが唖然とし、凍りついた。

(59)

そしてノルコは氣絶した。目を覚ました場所は保健室だった。保健医のリジェ先生がそばにいた。ノルコ（ううん……）リジェ「気がついたのね」先生は身を起こそうとしたノルコを制しつつ。リジェ「頭を強く打つて氣を失ったのよ、まだ横になっていた方がいいわ」ノルコは小さく頷いた。

(60)

リジェネ「どこか痛むところは？」ノルコは首を横にふる。特にどこも痛くなかった。リジェネ「そう、今は大丈夫でも後から症状が出るかもしれないから。あとで病院で検査するからね」ノルコは再び、ただ黙つて頷いた。その様子を見て、先生が不審げに首を傾けた。

(61)

ノルコはけして大人しい子ではない。先生もそれを知っている。そのノルコがまだ一言もツイートしていないのだ。リジェネ「もしかして……ちょっと、何かつぶやいてみてくれない？」ノルコ「つ……う……」二人はみるみる青ざめた。ノルコは つぶやけなくなつたのだ。

つづく

(62) 医者「ファイルが壊れている」 医者は出し抜けにそう言った。
 ヨコ「えええ！？」 ノルコは今、母の付き添いで病院に来ている
 のだった。『壊てる』という単語にノルコしたたかビビッたわけ
 だが、何せ呟くことが出来ないのだった。ノルコ（どうなつっちゃう
 んだひ……）

(63) ヨコ「な、治るんです？」 医者「再インストールすれば良い」
 やう言つて医者は、棚から小瓶を取り出した。そして中身をスプ
 ーンですくい。群青色のいかにも毒々しい液体だった。医者「はい、
 あーんして」 ノルコは小刻みに首を振った。どう見ても、マズそ
 う。

(64) 医者「注射にする？」 ノルコは速攻で口を開けた。注射は古代
 における拷問の一種である。もつての他だ。医者「じゃ、あーん」
 ノルコ（？～～@￥～！） なんとも例えようのない味がし
 た。強いて言つなら、水色のビー玉を溶かしたような味？

(65) 「ぎょくりい」 ノルコはその怪しげな液体を一思いに飲み込
 だ。横で母のヨコがおろおろしていた。医者「よしよし」 ヨコ「
 え、もう終わりです？」 医者「はい、10日ほどでファイルは修
 復されます……いや、2週間くらいだったかな？」 ノルコはとて
 も心配だった。

(66)

つぶやけなくなつたノルコ。風邪で熱も出つた。けな氣で可哀想な薄幸の美少女となつたノルコは、浴室のベッドに埋まつていた。ノルコ（うーん、うーん……）「うなされ声すらTに残らない。噂によると、人は100日つぶやかないと死んでしまうらしい……ガクガクブルブル。

(67)

ルイ《ノル、無理しちゃだめだからね。明日はちゃんと休むんだよ？ ノートは私がとつとくからわ》 友だちのルイからお見舞いDMが飛んできた。ノルコ（ありがとうルイちゃん、ついでに給食のミルメークも……）と返信しようとしたが出来なかつた。ノルコ（歯がゆいわ！）

(68)

《えっ、ほんとにツイートできなくなつたの？》 《レイタのあんぽんたんが悪い！》 《ノルちゃんかわいそり……》 《100日もからないつて絶対！》 《つぶやけなくとも元気だして！》 次々飛んでくるDM。しかし返信できない。たん的に言つてノルコは切なかつた。

(69)

ノルコは何が何でもツイートを返したくなつた。「ふあ？」でも「うえい！」でも良いからとにかく返したかった。ひとまず踏ん張つてみた。ノルコ（んー！ んんー！ いえやああーー）ノルコ「つとむ%：1：び」 変なのが出た！ みんな「無理しちゃだめーーー」×22リツイート。

(70)

熱がさらば出てきたようだ。ノルコは「」を閉じた。「けふつ、

けふつ」 咳は出る。しかしツイートにはならない。ノルコ（咳をしても……）ノーツイート） 滅多に泣かないノルコも流石にちょちょ切れそうになった。これが100日も続いたら、ホントに死んじゃうかもしない。

(71)

トントン ノックが鳴る。アフレル「はいのぞおー、卵がゆだぞおー」 ワクも父の側にいて心配そうにしていた。アフレル「あーんしてやるか？」 ノルコは首を横に振つてお椀とレンゲを受け取つた。アフレル「大丈夫だぞ、すぐに良くなる」 そう言って父は娘の頭を撫でてやつた。

(72)

アフレル「父さんなあ、もう少ししたら仕事がひと段落つくんだよ。それでな、ノルコの病気がよくなつたらな、みんなで旅行でもしようと思つてるんだ。どこがいいかノルコも考えておいてくれよ？」 そう言って再びノルコの頭を撫でて、父はサッと部屋を後にしたのだった。

(73)

ノルコが『旅どんとこ』を調べていると、突然リプライが来た。レイタ「知つてるか？ コーヒーはカフェインで牛乳はセロトニンだから、コーヒー牛乳飲みすぎるとオーバーデーズ起こすんだぜ？」 別名ゲリだぜ？」 なんのこいつぢや？ ノルコは普通にスルーした。

(74)

しかし何か気になつて、ノルコはレイタのTを訪問してみた。案の定、叩かれまくつていた。「お前何言つてんだ！」 「諸悪の根源！」 「お前のがあちゃんズンダモチ！」 もしかしてレイタなり

の贖罪なのか？ レイタ「ひょつ、最後のヒカル...」 そんなわけ
ないか、寝よう寝よ。

へづく

(75)

チヨンチヨンというズズメの鳴き声とともにノルコは目を覚ました。「おはようー」と咳こいうとするが、やはり出来ない。今日は大事をとつて学校を休むことになつていて。ノルコ（何して過ご）（うかがな？）そんなことを考えながらノルコは一階へと降りて行つた。

(76)

食卓では父のアフレルがコーヒーを飲みながら新聞を読んでいた。アフレル「おつ？」しかしアフレルはそれ以上なにも言わない、咳けなくなつた娘に対し、どう向き合えばいいのか計りかねているようだ。ノルコはそのままキッチンへ向かう。ヨコがパンを切つていふところだった。

(77)

ヨコ「あら、早いのね。もつと寝ていいのよ?」そう言つてヨコはノルコの耳たぶをつまむ。「36・8度。まだちょっと熱があるわね、休んでいた方がいいわ」しかしノルコは首を振つて否定した。必要以上に心配されるのはもう嫌だなと思つたから。

(78)

ノルコは卵とフライパンを用意して、自分好みの完璧な半熟加減の玉焼きを4人分作り、食卓に持つていく。お宿坊さんの弟ワクが田をこすりながら降りてきた。ワク「は、はうどゅーゆーどう？」心配そうに他人行儀な挨拶をしてきたワクに向かつて、ノルコは親指をグツ！と立ててみせた。

(79)

ノルコはトーストに田玉焼きを乗せて食べたら負けと思っている。アフレルはとても急いでいるようで、ワクと同時に食卓を立つた。アフレル「今日は仕事の最終報告があるんだ」 呟けないノルコはケチャップでトーストに字を書いてみた。【いてらー】アフレル「ふほつ」 ワク「イエア！」

(80)

ワクは家を出るとすぐ学校に向けてダッシュした。ワク（トウディは姉ちゃんがイナッシュン、アンビリーバボー） そんなミステリアスなフリーダムを感じながら走っていると、後ろから黒い影が迫ってきた。謎の男「ヒーハハー、ユーアー」機嫌ボーカル！ ビバーチェ！

(81)

ワク「ホワッツ！？」 ワクは思わず走りながら身構えた。ワク「フーアーゴー！？」 謎の男「ふふふ、僕かい？ 僕はね、見ての通りのストレンジャーさ！」 そういって男は腰をクネクネさせながら、さらにワクに迫ってきた。ワク「ヴェイイ？！ ゴーアウエイ！」

(82)

ワクはもう一度と一人では通学しまいと思った。こんなに怖い思いをしたのは初めてだ。あれから200mばかり男は追いかけてきて、ワクに聞いてきた。男「お姉ちゃんは咳けなくなつたんだな？ だな？」 ワク「ホワイゴーノウ！？」 男「HahaHa！ 僕は世界の全てを知つていいのさ！」

(83)

ワクは速攻で職員室に駆け込み、そして先生に報告した。先生は青筋たてて驚いて、ただちに眩音市ツイッター・ポリスに連絡した。不審者はシステムによって3秒以内に発見される仕組みだ。これで一安心だ。……しかし、その男は何故か捕まらない。2日後にワクはそれを知ることになる。

(84)

その頃職場にいたアフレルは、ワクから連絡を受けてビックリしたもの、ひとまず仕事をやつづけることにした。研究テーマである「食べられる粘着剤」の最終報告をまとめてデータベースに登録する。アフレル「ふう、これでまた一つ、この世の中の富が増えたぞ」アフレルは意気揚々としていた。

(85)

お昼休み、アフレルが妻の特製弁当を頬張っていると、取締役の人に呼び出された。アフレル「なんでしょう?」取締役「はいお疲れさん、これ辞令ね」アフレルは自分のデスクに戻り、その辞令の中身を読んだ。そこにはこう書かれていた。【価値ある研究をしてくれてありがとう、お疲れ様でした】

(86)

アフレルは昼から1時間ばかりかけて荷物を整理した。そして休息所の窓から海を眺めつつ、しばしボーとしていた。同僚が声をかけてきた。同僚「よう、やつたじゃないか! 次はどこにいくんだ?」アフレル「うーん、そうだな……何しようかな」同僚「おいおい、しつかりしろよ!」

(87)

アフレルは研究テーマを消化したのでリストラされた。働く必要がなければ働かなくてもよい、ごく当たり前のことだ。アフレルは

3時前に早々と帰宅した。アフレル「なんだか不思議な感じだなあ」「そんなことを呴きつつ、アフレルはしばしほんやりする。アフレル「……自由だ」

(88)

アフレルは仕事を達成したことへの感慨をひとしきり逡巡したのち、気を取り直して新たな職を探すことにした。耳たぶをクリックしてT-Sを表示し、就業に関するページを次々と開いていく。求人側と求職側が相互にフォローを投げ掛け合い、ベストなマッチングを模索していくのだ。

(89)

しばらぐしてヨコが買い物から帰ってきた。今夜はハンバーグのようだ。キッチンに向かう途中ヨコは、職探しに没頭して口が半開きになつているアフレルを発見した。ヨコ「まあ、あなた！」ヨコは驚きのあまり、買い物袋を落としてしまった。ヨコ「リスト引されたのね！」

(90)

ノルコ（宇宙の果てみたいな退屈さだよ……）寝るのに疲れ果てたノルコが一階に降りてみると、そこには口を半開きにした父アフレルがいた。おまけに目の中もあつていなかつた。ノルコ（な、なにじと？）そしてキッチンの方からは……。ヨコ「シクシク……シクシク……」

ツイートピア（91）

ノルコがキッチンに入ると、そこには濡れタオルで顔をおおつて泣いている母のヨコがいた。心配になつたノルコは、ヨコのエプロンをギュッと強く握つてしまつた。テーブルの上には合挽き肉、まな板の上に玉ねぎのみじん切り……これが。ヨコ「ノルコ、お父さ

んがね……リストラされたのよー。」

(92)

それからノルコは母とハンバーグのタネを作つた。あとは夜になつたら焼くだけだ。そうして部屋に戻ろうとした時ワクが帰ってきた。そしてやはり口が半開きの父を、怪訝な目つきでしばらく眺めていた。なんだか大変そうなお父さん。咳けないノルコは心の中でこう呟く。（がんばれお父さん）と。

つづく

(93)

朝。今日は金曜日で、明日はお休み。ノルコは「もう一日休んだら?」と言われたんだけど、退屈なので学校に行くことにした。ノルコ（つぶやけないからますます退屈なの）昨日はワクが不審者に追いかけられたということ、ちゃんとみんなを待ってからの登校だ。ノルコ（るるるん）

(94)

ミニスカート姿のルイがやつてきた。くしくもノルコと同じ服装だ。目が合うと同時に火花が散った。ルイ「ノル! 無事だつたんだね!」 恍惚の笑みで駆け寄つてくるルイだが……。ノルコ（みきつた!） ルイ「なにい!?」 ルイの手はノルコのスカートを狙つていたのだ!

(95)

ノルコは自身の股間に迫り来る手を手刀で切り払つと、そのままルイに抱きついた。そして膝の先でそつとルイのスカートをまくりあげた。ルイ「ひやう!」 秘儀『スカートめくり返し』だ。ルイ「私の負けだと?」 そしてルイはぐず折れた。スカートめくり。最近女の子の間で流行つてゐるらしい。

(96)

ルイ「どうやら……心配する」とは何もないみたいだね」 ノルコはウンウンとうなずいてから、親指をグツ。ルイ「熱は下がつたんだ?」 ウンウンうなずいてグツ。ルイ「今日の給食は五日おこわだぞ?」 ウンウン、グツ。ルイ「本当につぶやけないんだね……」 うグツ!

(97)

いつもの穏やかな通学路だった。近所のおじいさんが道端を掃除している。プラーとクラクションを鳴らしながら「ミリ」収集車が走っていく。オートカーが等間隔を保つて道路を進んでゆき、空ではカラスがカアカアいいながら、コンビニの窓を拭くお兄さんを見張っている。今日も世界はいつもだ。

(98)

昨日のバラエティ番組のこと。今日の宿題のこと。いつの昔のだからわからないギャグ。ワク「ゲツツ、ゲツツ」友達「ゲラゲラ」下の学年の子の会話もいつも通り。でもノルコのクラスメートは。リン「私もなんか風邪ぎみかも、あつ」エリ「あのアイドルは無口なところが、おつ」

(99)

ルイ「そんでもせー、うちのオヤジの会社がすっぽくなっちゃってさー」ノルコはウンウンと相槌をつつ。ルイ「そういうやノルコんといのお父さんって……あ」ノルコ（？）ルイ「ごめん、答えようがないよね、駄目ないんだし」気にしないでと伝えるために、ノルコは精一杯の笑みを浮かべてみた。

(100)

3時限目はつぶやき史だ。いつもは寝る気まんまんの子達も、今はしつかりクオ先生を見ている。ノルコがつぶやけなくなつたことが、少なからず影響しているようだ。つぶやきの秘密を知りたいという、好奇心の目が先生に注がれている。クオ（こ、これはこれでやりすらいいんだお……！）

(101)

ノル口の顔をチラと見て、その空氣を読んだクオ先生は核心となることから説明することにした。つまり体内ツイッターの仕組みについてだ。クオ「昔パソコンと呼ばれていた機械が、今は僕らの体の中に入ってるって話は前回した通りだお。今日はそのところを詳しくやつていいくんだお」

(102)

クオ「人間の体はたくさん要素で成り立つてゐるお。赤血球とか白血球とかミトコンドリアとか細胞とかのことだお。それと同じようにして、ナノインサーティード・コレクタ・デバイスというものが入つてゐるんだお（だ、誰か寝るかな……？）」みんな「ジー」「クオ「だ、だお」

(103)

クオ「略してNED。これは顕微鏡じゃないと見られないくらい小さな電子部品で、僕らの体に大体3～5兆個入つてゐるといわれてゐる。この部品がお互いに連携しあつて、僕らの中に一つのコンピューターを作り上げてるんだお」みんな「ふむふむ」クオ（き）、緊張するお……）

(104)

クオ「NEDも一種の機械だから、衝撃とかでたまに壊れるんだお。たとえば過去に、カミナリに撃たれて全身のNEDがショートしちゃつた人がいたんだお。でも『リゲインスト』という薬を飲むことでちゃんと回復したんだお」そういうて先生はニッコリ微笑んだ。

(105)

だからちゃんとノル口の病気もあるんだ、ということを理解して安心した何人かがバタバタと眠りについた。クオ（なんだかこつ

ちもホッとしたんだお） ノルコ（リゲインストってあの青いドロつとしたやつのことかな？） そしてノルコは、その味を思い出して鳥肌をたててしまつた。

（106）

クオ「そのリゲインストって薬のほかに、『インスト』っていう薬があるんだお。これはNEDを持たない人がNEDを導入するために飲む薬なんだお。でもきっとみんな、そんな薬は一度も飲んだことがないと思うんだお。何故だと思うお？ それには深い歴史的理由があるんだお」

（107）

クオ「インスト薬は、実は人間が作った薬じやないんだお。ビックリなことに機械が作った薬なんだお。量子コンピューターという物凄い計算機を使って、最も便利な通信機器とは何かという問題を計算させた人が昔いたんだお。そしてそれは、どういうわけかドロつとした液体だつたんだお」

（108）

クオ「その液体が、体内にコンピューターを作つてしまつものだとわかつて、みんな困惑したんだお。そして何年にもわたる物議を醸した末に、爆発的に普及したんだお。NEDを使うかどうかは個人個人で判断すればいいってことになつて、だんだんNED無しではいられない世の中になつていつたんだお」

（109）

クオ「そして事件は起つたお。NEDはなんと遺伝するものだつたんだお。NEDを持つ親から生まれた子供は、みんな体内にNEDを持っていたんだお。気づいても後の祭りだお。半世紀もしないうちに、人類の99%がNEDを持つよになつたんだお」

(110)

クオ「そしてNED化された人間社会は、政治・経済・文化、あらゆる分野において変貌をとげて、そして今の世の中が形づくられていつたんだお……」そこでチャイムが鳴り響いた。教え子は全員の眠りの底におちていた。クオ「じゃあ今日はここまでだお。ちゃんと復習するお」

(111)

ノルコ（う、うう……今日も寝てしまったか）そして耳たぶクリニックで授業ト」を開いた。インスト薬がなんたら、というところまでは記憶がある。ノルコ（ふむふむ……なるほど）そして驚愕の事実に打ちのめされた。ノルコ（スペクタクルだな……現実感がないわ！）ルイ「ん、ノル？」

(112)

ルイ「寝ぼけてるのか？」ノルコはじっと自分の手のひらを見つめ、そして見比べるようにルイの顔を見上げた。ノルコ（私達の中には私達の良く知らないものがいっぱい詰まっているんだ……）そしてルイの手をギュッと握った。ルイ「えつ、なに？」ノルコ（人類恐るべし！）

(113)

今日の給食は五目おこわ。ちょっと珍しい。ノルコ（もぐもぐもぐもぐ）ノルコは赤飯とかおこわとか、ずっと噛んでたらお餅になるかなって思っちゃうタイプ。ノルコ（もぐもぐもぐもぐ）でもみんなは、ノルコが咳けないから、その代わりにやたらモグモグしてるんだと思っちゃった。

(114)

ノルコのクラスでは5~6人で席を作り給食をとる。ノルコの島はカズノリ、レイタ、ルイ、リン、ヤマオの6人。委員長キャラのカズノリに絡みまくるレイタに女子らが冷えた突っ込みを入れるのが定番。そして少し不思議な少年のヤマオなのだが……いや少しごころじゃない。

(115)

ヤマオはなんと生まれてから6回しか咳いたことがない。これは世界的なレアケースだ。その内容は「おきやあ」「うにゅる」「でもいうかと」「右の上」「暑いと?」「それがいいと」特に4つ田の「右の上」は学術的研究にも取り上げられたりする。何かと注目されているのだ。

(116)

そんなヤマオが今、五目おこわをもぐもぐし続けるノルコをジッと見つめてるではないか! 7度目の咳きな予感が、教室中、いや世界中に吹き抜けた。ノルコ「もぐもぐもぐ」ヤマオ「ジー」ノルコ「もぐもぐもぐもぐ」ヤマオ「ジー」ノルコ「もぐもぐ

もぐ「しかし何もおこりなかつた。

(117)

レイタ「グアツテム!!」痺れを切らしたレイタがヤマオを羽交い絞めにし、そのふくよかなアゴの肉をタブタブ。そして挾みたくなるほど豊かな福耳をビーン。カズノリ「や、やめなよレイタ君……せ、世界を敵にまわすよ!」レイタ「てめー! 今日といつ今田は絶対つぶやかす!」

(118)

ヤマオに加えてノルコまで咳かないので、ノルコ達の島はやけに静かだ。人一倍つぶやくレイタも今日は空回ることが多く、ついに黙ってしまった。ルイ「リン、髪伸びてきたね」リン「うん、肩にかかるきちゃつたの」ぽつぽつと咳く一人だが……。レイタ「つまんねーの」

(119)

ルイ「レイタ! あんたね!」ルイがバーンと立ち上がった。ルイ「誰のせいでノルが咳けなくなつたと思ってるんだ! まだあんた謝つてもないでしょ?!!」ノルコがあわててルイの袖を引くが。レイタ「しらねーよ! こいつが勝手に俺の真似してコケたんだろ!?」

(120)

ルイ「真似じゃない、うつたんだ! 周りのやつに引っ張られてそうなっちゃうことあるって、ウイキにも書いてあるんだからな!」この年頃の男子が口げんかで女子に勝つのは難しい。レイタ「……んだよ、咳けないからってなんだよ!」そつ言つて走つて出て行つてしまつた。

(121)

ルイ「食器片付けやがれバーカ！」 ノル口はまじからかと言えば困っていた。ルイの肩を抑えつつ首をぶんぶん振る。そして気づけばクラスのみんなに対し頭を下げていた。ルイ「なんで謝ってんのさー もつ……」 その気持ちをどう説明すればよいかわからないノル口。出来たとしても呴けないのだ。

(122)

ひとまずノル口は座った。ルイ「ごめん、ついカッとなつて」 ルイは悪くない。そしてみんなが言つほどレイタも悪くない。跳び箱の件では、実はノル口にも非があった。レイタを見返したい気持ちが少しあつたのだ。ノル口（ひづり）すっかり冷えこんでしまった教室の空気、どうしよう。

(123)

ヤマオ「おこわうまい」 ノル口（ー？） ルイ「え！ なに？」 「クラス中「シャベツタアアアアアアアア！」 全世界「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」 ヤマオが……しゃべつた！ こんな時に！ 七番目の呴きはなんと、「おこわうまい」 だつた！

(124)

ヤマオの機転（？）によつて給食時間のピンチを乗り切つたノル口は、午後の授業をつつがなく済ませて家路へとついた。あの後クラスの話題はヤマオの7度目のツイートで持ちきりで、海外の研究者からも詳しい状況を知りたいという問い合わせが殺到するほどだつた。

(125)

たぶん今も教室で、ヤマオのツイートに関するリプライが飛び交

つていて、ノルコもそれに加わりたかったのだが、なにぶん咳けない身だ。ノルコ（つぶやけないって、つまんない！） そうノルコがため息をついたその時。 謎の男「フフフ……ビバー・チエ」ノルコはゾッとした。

(126)

目の下に濃いクマのある怪しげな青年がそこに立っていた。ウネウネした黒髪で顔が半分隠れている。そして襟の高い黒のコートで全身を包んでいる。ノルコ（この人、昨日ワクを追いかけた人だ！）特徴が一致していたのですぐにわかつた。 謎の男「ふふふ、そんなんに警戒しないでくれよ」

(127)

謎の男「ああ、君はまるで鳴声を失った小鳥のようだね」 ノルコ（なんで知ってるの？！） 謎の男「僕は何でも知っている。そう僕は知りすぎた男なのさビバーチエ！」 男はまるでノルコの心を読んだようにそう呟き……いや。 ノルコ（この人、つぶやいてない！） なんと彼の言葉はTに映らない！

(128)

この世界の人は言葉を口にすればそれがツイートになる。逆にツイート能力を失えば言葉を口に出来なくなる。今のノルコがその状態だ。しかしこの青年はツイートすることなく言葉を口にしている。それはつまり。 ノルコ（ネイティブ？） そう、それは生まれつき体内ツイッターを持たぬ者のことだ。

(129)

謎の青年「ふふ、それはちよつと違う」 青年は指をチッチとり、おもむろに髪をかき上げた。ノルコ（！？） なんと青年には耳が無かった。あれでは耳たぶクリックが出来ない。 謎の青年「

僕はね、昔々とある事情でツイートを失つたんだ 事情はわかつたが……しかし。ノルコ（私に何の用？）

(130)

謎の青年「何の用事があるのかと君は思つてゐるね？」ノルコ（だから何？）通報してしまおうと、ノルコが耳タブに手をあてる。謎の青年「君は僕を通報しない。その代わり僕についてくるノルコ（なにゆえ？）謎の青年「僕が君の病気の治し方を知つてゐるからさ！」

(131)

ノルコは知らない人について行くほどお尻は軽くない。ふんつとそっぽを向いてその場を後にした。ノルコ（しかし、何か気になる）特にあの失われた両耳が。そして何もかもを見通したような、あの言動が。振り返えってみると、男はちょうど曲がり角に消えていくところだった。

(132)

ノルコ（ちょっとだけ……）ノルコはいったん道を引き返し、近くのマンションの植え込みに隠れて、あの青年の動向をうかがつた。謎の男「トゥールットゥ～、ルーララ～ やあ！」男はクルクル周りながら通りを歩き抜け、時々通行人に唐突な挨拶をして驚かせていた。ノルコ（風変わりだわ！）

(133)

ノルコ（ただの変わった人なのかな？ 本当に悪い人ならとっくに捕まってるだろうし）体内ツイッターによる監視網が徹底された今は、歩きタバコ犯でさえ一瞬で捕まってしまう世の中だ。ノルコは男が角を曲がったのを見計らうと、小走りでその後を追いかけた。ノルコ（どこに行くんだろう？）

(134)

男は太い通りから、徐々に入り組んだ住宅地へと進んで行つた。体内PCのナビがあるので迷子になることはないが、追跡がだんだん難しくなっていく。ノルコは男の後ろ10mくらいを歩き、一戸建ての塀や植え込みに隠れながら尾行をつづけた。しかしどうと

見失つてしまつた。

(135)

ノルコ（あれれ？）あちこちキヨロキヨロしてみるも、ビルに
も居ない。そしてハッと氣づく。君は僕について来る、という青年
の言葉通りのことをしてしまつた。ノルコ（口惜しいわ……）
そして諦めて引き返そうとしたとき。「ビバーーチュ！」ノルコは
飛び上がつた。

(136)

謎の男「ほうらやつぱりついて來た！ 僕んちすぐそこだよ、力
モーン！」そういうつて青年はノルコを抱き上げた。ノルコ（！
！つ～～～）謎の男「ハハハ～！」男はそのまま100mほど
ダッシュ。その先にあつたのはなんと……ツイッター互助協会の施
設だつた。謎の男「ただいまー！」

(137)

教会ではなく協会だ。ふつう十字架とが立つてそな場所に鳥
の姿をしたモニメントが飾つてある。ツイート鳥だ。ノルコ（あ
わわ……）男は建物の中に入るとロビーのソファーにノルコを下
ろした。謎の男「君はここでちょっと待つ。おばさんが紅茶を運ん
でくる」

(138)

男はの奥へと消えていった。どうやら何人かの人気がここで共同生
活をしているようだ。ノルコがどうしたものかと思案していると、
お茶のポットを持ったおばさんが、たまたま通りがかつた。おば
さん「あら？」ノルコがあわてて立ち去るつとすると。おばさん
「お待ちなさい！」

(139)

おばさん「そこに座つて、お茶でも飲みながらお話しましょ？何か事情があつて来たんでしょ？」ノルコ（困ったなあ……）話そつにも咳けないし、来たというより連れてこられたのだ。おばさん「まあ、もしかして咳けない？何かあつたのね。ともかくいつたん落ち着きましょうね」

(140)

おばさんは茶器とスコーンを持ってきてノルコにふるまつた。お茶はハーブティーのようだ。本当は別の所に持つていぐものだつたのだろう。ノルコはまるで自分が、迷える子羊になつてしまつたような気がして、ぶるぶると恐縮してしまつた。おばさん「遠慮しないでいいのよ、じつぞ召し上がって」

(141)

ノルコはそう言われてお茶を一口。ノルコ（おいしゃー）おばさん「ここはツイッター互助協会。世間では『ツイートピア』なんて呼ばれているわね。ツイート社会になじめない人や、問題を抱えた人達の相談にのつたり、保護をしたりしているの。あなた小学生？」ノルコは「ククク」とうなずく。

(142)

おばさん「下校してすぐここに来たのね。何か帰れない事情があるのかしら？ときどき家出して行き場がない子がたずねてくることもあるのよ、ここは」ノルコはぶんぶんと首を振つた。そして建物の奥の通路を眺めた。あの男の人はどうに行つてしまつたんだわ？

(143)

おばさん「無理して咳かなくてもいいのよ。落ち着いたら少しす

「教えてくれればね」　その時、あの男が戻ってきた。黒コートを脱いで、白のカツターシャツ姿になっていた。謎の男「おばさん！　その子啞けない病気なんだよ！　僕の言ひとおりにへつづいてきたから、そのまま連れてきちゃつた！」

(144) おばさん「またお前が連れてきたのかい？ これで何人目か……まあ仕方ないわね」 ノルコ（また？） 謎の男「それよりおばさん！ またコウタがふさぎ込んじゃってるよ！」 おばさん「そうだよ、いま昼のおやつにしようと思つてたんだけどね」 謎の男「よし、じゃあみんなでお茶しよう。」

(145)

謎の男「ああああー！」「ちーちー！」男はノルマの手を引っつかむとグイグイ引っ張つていぐ。謎の男「おばさんお茶とお菓子もつてきてね！」おばさん「ちょ、ちょっとお前！　お待ちなさい！」男は通路の奥の部屋を開けて中に飛び込んだ。謎の男「友達を連れてきたよ！」

(146)

部屋の中にはワクと同じくらいの歳の少年がいた。床の上に座りこんで、うつむいている。視線の先には2体のBOTが置いてある。猫型BOTと大型BOTだ。一人が入ってきても少年は微動だしない。遅れておばさんが来た。　おばさん「やれやれ、まつたくこの子は……」

(1 4 7)

おばさん「『めんねお嬢ちゃん、』の人も『この職員なんだけど、ちょっと変わったところがあつてね……』男は少年の側にしゃがみ込んで話しかけた。謎の男「さあ、BOTばかりみてないで、

僕らとお話しするんだ！」 少年は静かに首をふり、そしてつぶやく。コウタ「リッちゃんが咳かないよ」

(148)

ノル口（リッちゃん？） 犬型BOT「イタイノ？ クルシイノ？」 ダイジヨウブダヨ……」 猫型BOT「……」 犬型BOT「ヨシヨシ、ココロガイタイノ、ヨシヨシ」 猫型BOT「……」 リッちゃんとは猫のBOTのことなのだろうか？ ノル口はなぜだか胸が苦しくなってきた。

(149)

ノル口はおばさんの顔を見た。おばさん「まあ、色々とねえ……」 どうやら複雑な事情があるようだ。おばさん「それよりホウ、このお嬢ちゃんことを教えて欲しいんだけどね」 ホウとは謎の青年の名前であるらしい。ノル口も早く帰りたいのでそうして欲しかった。だが、ホウ「待つて」

(150)

犬型BOT「オトモダチ、キタノ？ シャベルノ？」 猫型BOT「……」 犬型BOT「……」 猫型BOT「……」 犬型BOT「……」 猫型BOT「……」 犬型BOT「……」 ヨウタ「……リッちゃん！」 猫型BOTが呟いた。そして犬型BOTの名前はユー君。つまりコウタ君の分身なのだ。

(151)

猫型BOT「ユー君」 犬型BOT「リッチャン、ヨシヨシ」 猫型BOT「ユー君」 犬型BOT「モウイタクナイノ？」 ヨシヨシ「猫型BOT「ユー君、ユー君、ユー君」 突如、少年の瞳に涙があふれた。コウタ「うつ、うわあつ、うわああああああああああ！」

(152)

コウタ「ああああああああ！」 ホウ「コウタ君！」 ホウは咄嗟にコウタを抱きしめた。そして一緒にになってオイオイ泣き始めた。ノルコとおばさんは、わけも分からず立ち廻っていた。やがて。ホウ「ちょっと待ってるんだ！ すぐ樂にするよ！」 そういうてホウは部屋を飛び出していった。

(153)

ホウはすぐに戻ってきた。なにやら田舎の薄型ディスプレイを抱えてきて、コウタの前にドンと置いた。おばさん「あんたそれは！」 ホウ「今こそこれを見せる時なんだ！」 見せるつていつたい何を？ ノルコはだんだん怖くなってきて、足がすくんできた。少年の慟哭がただ事じやなかつたから。

(154)

ホウ「ノルコ。君はいま僕に説明を求めている」 ノルコ（だから何なの！） ホウはディスプレイの電源を入れた。そこに表示されていたのはTLのようだった。しかし見たことも無いほどの超高速でTLが流れている。ホウ「これは、グローバルタイムライン、GTLだ」

(155)

ホウ「GTL。この世の全てのツイートが流れるタイムラインだよ！」 ノルコはその名前は知っていたが、見るのは初めてだった。そして少年は泣き続けていた。ホウ「さらにこれがパーソナルタイムライン、PTLだ」 そういうてスイッチを押す。すると今度は、訳のわからない暗号の羅列が表示された。

(156)

P T L? そんなものは聞いたことがない。ホウ「P T L」は通常、その存在が公開されていない。個人情報を多分に含むもの、というより個人そのものだから、ホウはノルコの顔をキッと見つめて言った。ホウ「そしてさらにその上位T Lが存在する。それが……グロスオブP T Lだ！」

(157)

グロスオブP T L、何だそれは？ ノルコはもうわけがわからな。そしてふと気がつく。ユウタが泣き止んでいる。そしておそらくユウタ自身のP T Lが表示されるのであろうディスプレイを、ボーッと覗き込んでいるのだった。ホウ「グロスオブP T L。それはつまり、神のT Lだ！」

(158)

ホウ「神のT Lは全ての苦しみを癒す。全ての孤独を埋める。そして、この世の全てを見るものに教える！」 そういったホウはスイッチに指をかけた。おばさん「やめなホウ！ それを見せたらその子もお前みたく……！」 ホウ「だけど今この子に必要なのはこれなんだ！ ノルコ、君も見るかい？」

(159)

ノルコは直感的に理解した。このグロスオブP T Lこそが、ホウがノルコの病気を治せると言った理由なのだろうと。ノルコはディスプレイを見つめた。呪文のように暗号化されたT Lだ。ホウがスイッチを押せば、そこに全世界の人間の意志が、暗号化されて表示されるのだ。

(160)

ノルコは咄嗟に両目を手で押さえた。見ない、絶対に見てはいけない。咳けない病は早く治したいけど見ちゃいけない。戻れなくな

る。そんな気がする。ホウ「フフフ……そうだね、それで良いんだ、君は」カチッとスイッチが押される音がした。数秒してもう一度カチッと音が鳴った。

(161)

ホウ「もう目を開けて大丈夫だよ。お茶にしよう!」ノルコが恐る恐る目を開けると、少年ユウタの表情が見違えるほどに明るくなっていた。ユウタ「リツちゃん……いつでも一緒になんだね……もう痛くないんだね!」その代わりにおばさんが顔を抑えてシクシクと泣いていた。

(162)

ユウタは驚くほど元気になり、お腹がすいたと言つてお菓子をねだつてきた。4人はロビーに戻つてスコーンを食べ、紅茶を飲みながらお話をした。ノルコは聞いているだけだったけど、ユウタが幼馴染みのリツちゃんの事をあまりに楽しそうに話すので、ついつい顔がほころんでしまつた。

(163)

ノルコの事情を理解したおばさんは「このバカモンが!」といつてホウの頭を叩いた。ホウは「すべてはGPT-Lの思し召し!」といつてとぼけた。なぜホウがGPT-Lを見れるのか、ユウタの幼馴染みに何があつたのか、それをノルコは聞かないでおくことにする。もう帰らなきやいけない。

(164)

ユウタ「また遊びに来てね、お姉ちゃん!」ノルコは3人に手を振りその場を後にした。そして家路を歩みつつ色々と反省する。今日起きたことをお父さんが知つたらきっと酷く怒られる。お父さんは普段はアレだけど、怒ると本当に怖いのだ。ノルコは想像して

ブルブル震えた。

(165)

道路を横断するため歩道橋を渡るノルコ。眩音市の光景が目の前いっぱいに広がる。手を繋いで買物に行く親子。道路を行き交う自動車の流れ。マンションの影からちょこんと覗く、あの協会のツイート鳥。いつもと同じ景色のはずなのに、いつもと違つ景色に見える。ふとノルコは思う。

(166)

不意に、ノルコの瞳に一筋の雲が伝つた。ビックリして思わず袖で拭う。ノルコ（今日の私、なんだか変……）帰ろう。ノルコは強くそう思う。暖かいご飯と優しい家族が待つての自分の家へ。ノルコはキツと前を見て、静かな微笑みに満ちる街角を、一旦散に駆けていった。

ツイートニア（番外編）（前書き）

震災に向けて。

ツイートペア（番外編）

(1-i) 話は3年前に飛ぶ。21世紀も終わろうとしていたある日、東京湾の沖合い200kmの地点でマグニチュード8の地震が起きた。太平洋岸に位置するノルコが住む亥音市は、激しい横揺れの後に大津波に襲われたのだ。

(2-i) ノルコが学校から帰宅した直後だつた。ノルコは母のヨコと、当時まだ保育所に通つっていたワクと身をよせあつて地震に耐えた。直後にアフレルからツイートが来た。アフレル「大丈夫か！」 そうして安否確認を済ませると、ノルコ達は歩いて避難場所の学校に向かつた。

(3-i) 父アフレルの職場は太平洋岸に位置する研究所だつた。鉄筋コンクリート造の研究所は、津波が来た際の避難場所に指定された。アフレル達職員は屋上に上がり、一切のツイートを伏せて退避困難者の声を探つた。

(4-i)

研究所から500mほどの個人住宅に住むお年寄りが、徒歩で避難していることがわかつた。津波到達まであと15分という速報が緊急ツイートされていた。間に合わないかもしない。警察も消防も間に合いそうに無い。アフレル達は直ちに救出作戦を立てた。

(5-i)

大至急、車を回すようオートカーコントロールに申請してみるも、パニック状態だった。そこで自衛隊の予備役だった研究員の一人が、自ら車を運転して現場に向かうことになった。その間アフレル達は、津波の状況を調べて知らせるために全力を挙げることになった。

(6-i)

沖合いに出ていた漁船は、全て波に対して船を立てていたが、漁港付近にいた1隻が波を乗り越えられず転覆した。数名が波に飲まれて見えなくなつた。連絡を受けていたレスキュー隊がスクランブル出動し、ヘリコプターによる決死の救助を開始した。

(7-i)

出発した研究員がお年寄りの元にたどり着き、連れて戻つてきてまもなく、津波の第一波が到来した。研究所1階のガラスを突き破り、2階の上まで水が押し寄せた。高さ4mの大津波だつた。アフレル達は身を寄せ合い、海へと去つて行く引き潮をい眺めながら、いま生きていることに感謝したのだつた。

(8-i)

津波が完全に引くころには、全ての人の安否状況が確認された。犠牲者が波に飲まれる際のラストツイートは丁寧にフィルタリングされたが、間に合わず見てしまつた人が数人いて、後にカウンセリングを受けることになつた。ノルコ達は避難場所の体育館からアフレルと連絡を取り、互いの無事に安堵した。

(9-i)

体内ツイッターの普及により、自然災害による被害は最小限に抑えることが可能になつた。しかし、今なお救いきれない命は存在する。時代がどんなに豊かになつても、技術がどんなに進展しても、人々の生きるために戦いは終わらないのだろう。

(10-i)

翌日の昼には亥音市は平常通りの活動にもどつた。ノルコのクラスでは地震に関する臨時講習が開かれ、そこでノルコは父の職場の人達が、逃げ遅れたお年寄りを救つたことを知つた。ワクはその日一日、父親自慢ツイートをして不謹慎だと母のヨコに怒られたりした。

(11-i)

その夜ノルコは犠牲になつた人のために何が出来るのかを考えた。でも答えなどあるわけがなかつた。そんなノルコに父はいつた。「祈るしかない」と。祈ることで何が救えるのか、今はまだわからぬい。でもノルコは祈ることにした。大きな明るい月の夜空に向けて。未来のために。

(167)

ノルコは家につくと、静かにドアを開けてソーッと中に入った。いま父に見つかってたらきつと「殺すぞ!」と言われてしまう。ソーッと、あくまでもソーッと。アフレル「おかえり、ノルコ」居間からノッソリと父が現れた。ノルコはゾーっとした。

(168)

アフレル「遅かったね」そう言つて父はノルコの肩を掴んだ。以前、ノルコが黙つて門限をやぶつた時、父アフレルはこう言つたのだ。アフレル「誰かにノルコを殺されるくらいなら、いま父さんが殺してやるぞ!」と。どんなに心配したんだね。

(169)

帰宅が遅れた言い訳をしようにも、ノルコはつぶやけないのだった。小刻みに顔を振つてオロオロしていると、父は出し抜けにこう言つた。アフレル「ヤマオ君がしゃべったんだってね!」ノルコは一転して顔を縦にウンウン振つた。ヤマオ君は本当に偉大だ。

(170)

どうやらヤマオ君が七度目のツイートをしたことは、父アフレルが仕事探しを中断してしまうくらいの衝撃をもつていたらしい。ノルコの帰宅が遅れた理由もそれだと、すっかりアフレルは信じ込んでいて、変な人について行つたとは微塵も思つてないようだ。

(171)

部屋に入つてすぐヤマオ君のT「」を開く。相当なりプライがヤマオ君宛てにあつたはずだが、それでもツイート数は七つのままだっ

た。『おこわうまい』 ヤマオ君はこのツイートでノル口を助けて
ようしてくれたのかな? ノル口はそう聞いてみたかったけど、
残念ながら呟けないのだった。

(172)
そのころ、耳のない青年ホウ（本名キナシ・ホウジ）は協会の詰め所で液晶ディスプレイをいじっていた。調子が悪いようだ。ホウ「画質がとつてもバルラッチョ」 おばさん「そりや何年前の代物だね」 17インチの極薄LCD。さつと半世紀前の代物だ。

(173)
ホウは体内ツイッターを持つていない。そのため、こうして旧式のディスプレイに電子回路を組み込むという古典的手法でもつてツイッターを使用しているのだ。今日やっと協会の口ネで増設メモリーを入れて組み込んだところだ。ホウ「ビバーチュ！」

ツイートピア（174）

ホウは設定を終えると、GPTLグロス・オブ・パーソナル・タイム・ラインを表示させた。全世界の人間の心の声が、おびただしい速度で流れしていく。その様子はまるでナイアガラの激流のようだが、それでも前よりスクロールが滑らかになった感じがする。

(175)

ホウ「クルミナーレ！」 イタリア語で絶頂を意味する言葉を発したのち、ホウは癲癇の発作を起こして気絶した。おばさん「もう、いわんこっちゃない」 おばさんは慣れた様子で、ホウの足を引っ張つて部屋まで運んで布団をかけた。ホウはその布団の中で、ヌクヌクと眠りについた。

(176)

おばさん「まあ頑張りなよ、われらが英雄さん」そう言つておばさんは、耳のないホウの頭を撫でて退室する。ホウはムニヤムニヤ言いながら、まるで子供のような寝顔で眠つてゐる。そして事実、彼はいま子供の頃の夢を見ていたのだった。

(177)

ホウは捨て子だった。ホウを育てあぐねた両親は彼にツイッター削除の薬アンインストを打ち、万が一にも耳たぶクリックが作動しないようにと耳まで切り落とし、そして道端に捨てたのだった。彼は運良く協会に拾われたが、ツイッター能力は元に戻らなかつた。

(178)

子供の頃のホウは、ツイッターを失つていたためか、まったく他人と交流しなかつた。ありとあらゆる「ミニコニケーションを拒絶し、部屋にこもつて本を読むばかりだった。そしてある日、思いついたように古典電子技術の勉強を始めたのだ。

(179)

おばさん（当時はお姉さんだった）をはじめ、協会の人たちはホウの変わりように困惑した。彼は彼が学ぶために必要なあらゆるツールを要求してきた。そしてやがてその意図がわかつた。彼は彼なりの手段でツイッターを取り戻そうとしていたのだ。

(180)

彼が古典式タッチパネルでのツイートを取り戻したのは11歳の時だつた。体内ツイッターのバイオロジーネットワークと、古典的ワールドワイドウェブの接続を確立することは、専門家でも難しいことだ。しかし彼は自力でそれを成し遂げたのだった。そして彼はさらに独自の研究を続ける。

(181)

一人一人の人間をノードとして自然生成されているバイオロジーネットワークだが、ホウはその中にコアとなる領域を見つけた。すべてのツイートが必ずその場所を通るというポイントだ。彼はその場所を「世界の中心」と名づけ、そこに接続するための専用機器を作った。

(182)

その過程でホウはパーソナルタイムラインを発見し、そしてまた神のT-Sでも言つべきGPT-Lを発見した。そしてそのストリームを眼にした瞬間、彼の世界の全てが昇華した。光が弾け飛び、鐘の音が鳴り響き、限りない幸福感と万能感に包まれたのだ。

(183)

ビバー・チエ イタリア語で「快活」を意味するその言葉が、ホウの口癖になつたのはそれからである。その後ホウは、自分で開発したGPT-Lディスプレイを使って、心に傷を持った多くの人を救つてきたのだ。あたかも奇跡の人のように。それが彼が「英雄さん」と呼ばれる所以である。

(184)

ホウ「ううん……」 ホウは30分ほどで眼を覚ました。起き上がりつて軽く腕を回す。首をひねる。立ち上がって屈伸運動をする。ホウ「オウイエイ」 どうやら調子が良いようだ。そして彼は、本来彼が知るはずもないその言葉を、最大限の確信をもつて口ずさんだのだった。ホウ「おこわうまい」と。

(185)

ノルコはカレーライスをぐちやぐちやにする人とだけは結婚したくない主義。ワク「チエーンジ!」ワクはもう2杯目のおかわり。そして父アフレルは落ち着かない様子でキヨロキヨロ。ヨコ「どうしたのあなた?」アフレル「いやーその」ワク「チエーンジ!」アフレル「食つのは早いなあワク」

(186)

アフレル「えーとだ、父さん思つたより早く暇になつちやつて、明日あたりどつか遊び行こうかなつて」そしてノルコをチラと見る。まだノルコのツイートは治つていないので。アフレル「どこか行きたいところある?..」するとノルコはすかさず手をあげた!ノルコ「\$あ・・・」そしておろした。

(187)

アフレル「ノルコ?」ノルコは「へへ」と頭を叩くと、メモ用紙をとりだした。そこには「東京のおうち」と書かれていた。アフレル「東京?」ヨコ「あんな田舎に?」ワク「チエーンジ!」そこでノルコはテーブルの上に手をおき、カタカタと何かを打つしぐさをする。アフレル「あつ、そうか!」

(188)

ヨコ「何かわかつたの?」アフレル「ノルコは頭がいいな、その手があつたな」と言つてノルコに向かつてグツ!ノルコもグツ!ヨコ「??」アフレル「いけばわかるさ。ということで明日は東京の爺さん婆さんに会いに行くぞ!」ワク「チエーンジ!

「げふつ」 ヲコ「ワク、食べすぎよー。」

(189)

翌日、一家はアフレルの実家がある東京に向かった。東京は喧音市から車で1時間ほどの場所にある大田舎だ。かつて日本経済の中核だった街は、超高層だんだん畑と首都高速水田、大地下トンネル促成栽培場からなる食料基地になつていて。ヲコ「いつ見てもすごい街」 誰がこうなることを想像しただらう。

(190)

アフレルの両親、ノルコにとつては祖父母にあたるイズミ・クメゾウじいとウメナばあ。名前から察する通りあまり仲はよくないんだけど、トヨスの造成地に住んでいて、かぼちゃとかとうもろこしとかを作つていて、ときどきモンゼンナ力に繰り出してオールしたりするハイカラな人達なのだ。

(191)

青々と風になびく稻草の海を抜けて車は走る。巨大なドーム型集光屋根をくぐり、色とりどりの果実がゆれる高層だんだん畑を見送る。やがて潮の香がかすかに漂つ、見晴らしの良い畑作地にたどり着く。見渡す限りの畑のなかに民家が点々と建つそのなかに、アフレルの実家はあるのだ。

(192)

クメゾウ「おーい、うおーい！」 遠くで手を振つているのはクメゾウお爺さんだ。農作業の途中で抜け出してきたらしい。迷彩柄のニッカポッカに麦藁帽子、トレーデマークのサングラス。アロハシャツから伸びるじつじつした腕も、シワのよつた顔も真っ黒に日焼けしている。クメゾウ「よおーきたのーー！」

(193)

ノルコとワクは車を飛び降りると、まっしづらにクメゾウおじいちゃんの元に駆けていった。クメゾウ「いよう！ チビっこども！」ワク「イエア！ グランパ！」といつて飛びつくワクをおじいちゃんは軽々と持ち上げる。力仕事でこぶ立った手、老いてますます盛んなのだつた。

(194)

クメゾウおじいちゃんは、ノルコ達の知らない遊びをたくさん知つていて。まるで歩く玩具箱のような人なので、ノルコもワクもおじいちゃんが大好きだ。本当はノルコも「ヘイ！ ジーじ！」と言つて飛び込んだかったのだが、つぶやけないことの気後れが少しあつたりして。

(195)

クメゾウ「んん？ なんじゃノルコ？ サッサと来んかい！」

そういうつてホレホレとワクを担いでない方の腕を差し出す。ノルコは“うん！”とうなずくと、その腕に飛びついた。おじいちゃんはノルコの体を持ちあげて、あつという間に肩の上に担いでしまつた。

(196)

アフレル「父さんただいま」近くの空き地に車をとめたアフレルがやつてきた。クメゾウ「おー、よく来たな！ 仕事は見つかつたか？」アフレル「いや、それがまだ」クメゾウ「なんだ、お前まだ二ートなのか！」アフレル「に、二ート？ 父さんそれいつの言葉？」

(197)

クメゾウ「はつはつは、まあ今では遠い昔の言葉だな！」ヨコ「うふふ、昔の方は何かと大変だつたんですねー」クメゾウ「

うんむ、やうなじやモー。ワク、ノルゴ。ヨコさんは相変わらずベッピンさんだのー、うちのヒキニーーにはまつたいないわー！」 アフレル「ひ、ひどおー！」

(198)

ヨコ「うふふ、私のヨコ那はヒキニーー。うふふふ。ところで、お義母さんはお庭に？」 クメゾウ「ああ、かぼちゃ畠の雑草抜いとるわい、いつて手伝つてやつてくれるかのー。さあチビども！ 今日はなにして遊ぶかな！ H a H a H a !」 そういつて二人を担いだまま家中に入つてしまつた。

(199)

ヨコが家の裏のカボチャ畠にいくと、ウメナがせつせと除草をしていた。紫色のレギンスにシルクの長袖シャツ。ひさしの長いピンク色のバイザーをかぶり、首の日焼けを防ぐためのスカーフがなんともお洒落。そのシャンとした姿を見るたびにヨコは「あんな歳のとり方をしたいもだわ」と思うのだ。

(200)

ヨコ「お義母さん、来ました」 ウメナ「よお嫁か。じこさんはどこに行つたい？」 ヨコはさりげなく手袋をはめつつ。ヨコ「お家へ」 ウメナ「あんのくそじじい！ 野良仕事を嫁にまかせて孫と遊ぶジるんかい、ダタワケ！」 と言いつつカマを手に取り立ち上がる。 ヨコ「こつものことですねー！」

(201)

ウメナ「いつかキンタマ刈り取つてやるわー」 と言いつつカマをぶんぶん振るウメナさん。ウメナ「ところで用意はしてくるんだね？」 ヨコ「はいもちろん」 手袋の上に腕抜きをはめているヨコの装いは、もつぱっちり農作業仕様になつていた。ウメナ「ふ

んつ、イビリがいがないね！」

(202)

太陽の下、草をむしりて汗流す。薬剤は使わないポリシーだ。大変だが一つ一つこだわりのこもった野菜が出来る。田口「実も大きくなつて」ウメナ「そろそろ収穫できるね」田口「毎年楽しみなんですよ、お義母さんのカボチャ」ウメナ「世辞はいいから手を動かし」口は悪いが本音では喜んでいたり。

(203)

ウメナ「ノルコの調子はどうなんだい？」田口「まだ治る気配は……。お医者さまが言つには有機パラメトリの再結合がなんたら……」ウメナ「細かいことはログを読んだからいいよ、友達とあまりつてないとが無いんだね？」田口「それはありがたいことに、みんな良い子たちで」ウメナ「つむ」

(204)

ウメナ「しかしあの歳の頃が咳けないなんてのは、しんどいだろうねえ」田口「ええ、時々無理やり咳こうとしたり。いつちも何とか察して代弁してあげるんですけど……歯がゆいです」ウメナ「ノルコはむつと歯がゆい思いをしてるねさぞ」田口「ええ」ウメナ「早く治るといいんだけどねえ」

(205)

田口「もういえば、ノルコが何かを思いついたみたいで」ウメナ「あ？」田口「咳けなくても咳ける方法とか。でも教えてくれないんですよ、アフレルさんは気づいたらしくですけど」ウメナ「咳けなくても咳ける？ なんだいそれは？」禪問答のようなその問いかに、一人はそろつて首をかしげた。

(206)

クメゾウ「ゲンじいさんのパソコンなら仏間に押入れじゃ」ノルコはアフレルとともに仏間にいた。アフレル「まずは仏様を拝もう」そして仏壇のろうそくを点け、遺影をとりだす。先祖代々の写真の中からアフレルは、二つを選んで仏壇に立てた。アフレル「お爺さんお婆さん、遊びにきたよ」

(207)

羽織袴のいかめつらしい表情をした人はアフレルの祖父で、ノルコにどうては曾祖父にあたる「イズミ・ゲン」お爺さんだ。そしてその隣、白いワンピースに麦藁帽子姿の若い女のは「イズミ・ミチコ」ノルコの曾祖母にあたるが、若くして亡くなつたためアフレルも会つたことが無いのだという。

(208)

チーンと仏鈴をならし、二人は手を合わせた。アフレル「よしじゃあ探そうか」仏間の押入れを開けると、いつの昔のものかわからぬ電気機器がホコリをかぶつた状態で詰まっていた。このキラキラした丸いのはDVDと言つらしく。ノルコ「? ?」アフレル「それはノルコにはまだ早いな」

(209)

ややしばらくして、押入れの奥から一台のノートパソコンが出てきた。二人ともホコリまみれ。クメゾウ「だがパスワードがかかっているぞい。ほれ王手!」どうやらワクと将棋をして遊んでるらしい。ワク「サンドゥイッチ! リバース!」クメゾウ「それは

オセロじゅー

(210)

誰も知らないゲン爺さんのパスワード。でもノルコは覚えていたのだ。4つか5つのころ、ノルコはお爺ちゃんの膝の上で、PCを起動させるところを見ていたのだ。ノルコはゲンお爺さんにこう聞いた。ノルコ「これなんてよむのー?」 ゲン爺さんは言った。ゲン「ツイート、ワイズ、プレイビー」

(211)

ノルコ「ぶれびー?」 幼い頃のノルコに、その意味がわかるはずがなかつた。しかし今ならわかる。そしてノルコ自身の名前と生年月日、それがゲン爺さんのPCを開くパスワードだ。「twee
t-with-bravery-505noruko」ノルコはたどたどしい手つきで入力し、そしてリターンキーを叩いた。「ウエルカムWINDOWS」

(212)

ウインドウズXYZが起動され、背景画面に3人の赤ちゃんが写し出された。ゲンお爺さんの3人の孫の写真だ。つまりそのうちの一人はアフレルということになる。とぼけた口元が特徴的だ。ノルコ（お父さんかわいい!） お父さんに言つたらどんな顔するかな? ふとノルコはそう思つたり。

(213)

アフレル「この赤ん坊はいつたい誰なんだろ?」 とかやつぱつとぼけつつ。アフレル「ノルコのお皿当てはこれだろ?」 そういう言つてさざ波のような形をしたアイコンを指差す。ノルコ（ツイーブ……これだ!） そしてアイコンをダブルクリック、ついクセで耳たぶクリックしそうになる。

(214)

ツイーブvre12·4 これは当時最先端のツイッター用ブラウザだ。フォロワー同士のネットワークを図式化したり、自分のツイートがどう波及していくかを解析する機能があり、かつ直感的に使いやすい構成。体内ツイッターの普及によりその役目を終えたが、今でもご高齢の方が使用していたりする。

(215)

ツイープの最終ヴァージョンである1·2·4は、体内ツイッターとの接続をサポートしている。よつてこのブラウザを使えば、咳けない病気にかかったノルコでもツイッターが出来るのである。しかし、その設定方法は古の彼方に忘却されてしまい、知る者は少ない。

(216)

ひとまずノルコは適当に何かツイートしてみることにした。ゲン「あーあー」当然だが、ゲンお爺さんの名前で咳かれてしまう。ノルコ（ルイちゃんに手伝つてもらおう）そしてアフレルの助言も得ながら、何とかしてルイのプロフィールを検索し、そしてフォローした。

(217)

ノルコはルイに何か話しかけようと、たどたどしくキーボードを手にかける。アフレル「じー」アフレルが覗き込んでいる。ノルコ（うーん）書いている途中の文章を見られるのって何だか恥ずかしい。アフレル「ん?」どうやら気づいたようだ。アフレル「お父さん烟を手伝つてくれるよー。」

(218)

空氣を読める父をもつたノルコは幸せ者だ、そう思いつつ文章作

成にとりかかる。ゲン「ルイちゃん。わたしノルコ」しかし反応がない。ルイのステータスは読書中になっている。たぶん自室でマンガを読んでいる。しばらくして。ルイ「ビ、ビ、どうぞまでで?！」明らかに困惑している。

(219)

ノルコが状況を説明しようと文章をつづっていると今度は。カイザワ「ふ、ふおおお……」ヨシシゲ「ビ、ゲンじいさんが……」ギンジ「黄泉帰りよつたあああああ！」なんだか大変なことになってきたぞ。ノルコはだんだん焦ってきて、おでこには冷や汗までにじんできた。

(220)

ゲン「えと、私ゲンおじいさんお口かりてます！」必死に事情を説明するも埒が明かない、お父さんを呼ぼうと思つたその時。ルイ「ノルコなの？お爺ちゃんの口からツイートしてるので?！」ノルコはそのリプライをすぐさまツイートした。ありがとうルイちゃん。

(221)

ノルコ「ゲンおじいさんお口かりてます！」必死に事情を説明するも埒が明かない、お父さんを呼ぼうと思つたその時。ルイ「ノルコなの？お爺ちゃんの口からツイートしてるので?！」ノルコはそのリプライをすぐさまツイートした。ありがとうルイちゃん。

(222)

カイザワ「おおー、そうじーとかー！」ヨシシゲ「ゲンさんのお孫さんとなー！」ギンジ「どううゲンさんがお迎えにきたのかと思つたわwww」ノルコはホッと胸をなでおろす。ルイ「いき

なり95歳のお爺ちゃんから咳かれて何事がと思つたよー。」

(223)

ゲン「めん」「めん」^{mn} ルイ「いや、別にいいんだけどね。とにかく咳けるようになつたわけだ」 ゲン「でもmんどいの、キー打つの、へんかんも」 ルイ「え?」 カイザワ「キーボードなんぞよく打つの一、わしらでもよう使わん昔の機械なのに」 ルイ「ええ?」

(224)

ルイ「いめん、ちょっとググるわ」 キーボードなんて古代の代物は、最近では殆ど知られていなかつた。ゲン「お爺ちゃんの膝の上でめてたから」 ヨシシゲ「賢いのうー、5つかそこいらだつたろうに」 ギンジ「ゲンさん」に似たのだろうな、あの人も切れ者であつたし」

(225)

ルイ「ノル……君は1世紀も昔の機械を使つてゐるのかね」 ゲン「うぬ」ⁿ ルイ「? ?」 ゲン「まちがい、うんうん」 ルイ「そ、そつ……。まあ大変そうだけど頑張つて」 ゲン「んは」を一回押すと出る」 ルイ「へええー、なんか大変そうだと画面田やうでもあるね」

(226)

ゲン「ゲンお爺さんはこれでしゃべるより早くしゃべつてた」 ヨシシゲ「まあ、昔の人はみんなそうだつたのう。ブラインドタッチといつてな、手元を見ないでキーを打つんじや」 ノル「は試しに、キーを見ないで打つてみた。ゲン「あwせひーfたgとふじこ」 想像を絶する技術だつた!

(227)

ゲン「むーソだー」　三シシゲ「まあの、今はもう失われし古代の技である」ノル口は画面の前でフウと一息ついで、そして何を呴ひかかると考える。ノル口（初対面のおじいちゃん達と何を話せば良いのか？）そのとき。ウメナ「お、お義父さん！」三口「どうして呴かれてるんです？！」

(228)

ノル口（あわわ……やつぱりお爺ちゃんの名前で呴くとみんなを驚かせちゃう……）ノル口はこの作戦はやつぱりあきらめようと思った。知らない人に迷惑をかけてしまう。「私はゲンお爺ちゃんのひ孫のノル口です、みんなを驚かせるのでやつぱり呴るのはやめます」そうツイートしようとした、その時。

(229)

アシオ「ゲン爺さんが生き返ったと聞いてやつてきましたー」
サトコ「ああ？ ゲンさんがよみがえったって？ ウメナとつづ
イカレたかい？」 イシゾエ「いやあ、どうやらゲンさんのお孫さ
んのようだあ」 ヨネクラ「え？ ゲンさんの孫さんって男ばつか
じやなかつたけ？」

(230)

ルイ「ゲンを・・・じやなかつたノル口！ 私の呴きリツイート
して！ みんな混乱してる！」 アフレル「ノル口、お父さんのツ
イートもだ」 三口「ああ、なんだノル口だったの」 ウメナ「へ
え、うまいこと考えたもんだね、義父さんのPまだ生きてたんだ
ね」

ツイートピア（231）

ステイーブン「おー！ ミスター・ゲン！ ナツカシイ！」 101

チヨウン「わー、何だか懐かしいクラスタが沸騰してきてるね！」

ケンイチ「ゲンさんって確か、ちょっとしたツブヤキストだったよね。まとめウイキないかな」ジブ「何だ何だ！ 祭りか！」

アゲオ「よくわからんがめでたい、酒だ！」

(232)

ノル口の意思とは関係なく、ゲンお爺さんと付き合いがあつた人や、当時の世相を知っている人たちが勝手に集まってきた盛り上がりてしまつてる。まもなく「#FUKKASTU_GENZ」というハッシュショウが立ち上がり、飲めや歌えやの大騒ぎになつてしまつた。ノル口（うーん何だかもう、どうでもいいや…）

(233)

どんちゃん騒ぎを横目に見つつ、ノル口はゲンお爺さんのプロフィールを見る。フォロー数750に対し、フォロワー数は4000人程度。ノル口の感覚としては少な目な方だ。故人とはいえ、お年寄を召した方ならフォロー数が数万に達していてもおかしくないのだ。

(234)

ノル口（本当に大事な相手しかフォローしない人だつたんだ）当然、その550人の中にもノル口も含まれている。最後にフォローした相手から10番目にはワクが登録されていた。P C版のツイッターなので、使用者が亡くなつてからもT字はどんどん進行していくわけだ。

(235)

ゲンお爺さんのT字を流れるどんちゃん騒ぎを眺めていると、ノル口は何だか、まだゲンお爺ちゃんが生きているような気がしてきた。まだ小さなノル口を膝の上にのせ、シワシワの手でマウスを操

作するお爺ちゃんが、今ここにいるのかな、そんな気が。ノル口（お爺ちゃん……元気にしてるかな~）

(236)

ゲンお爺さんの最後のツイートは家族も知人もみんな知ってる。もちろんノルコも知ってる。ゲン「喜びは光、すべてに感謝」「麻酔でぼんやりとした意識の中、お爺さんは最後の力を振り絞つてそう呟いた。そして翌朝、静かに息をひきとったのだ。

(237)

ノルコはゲンお爺さんのTシャツを眺つていぐ。お爺さんがツイッターを始めたのが12歳の時。それ以来のツイートが全て詰まっているので、どんなに頑張つてもその一部しか見ることが出来ない。よほど根気よくTシャツを眺らぬといけない。だからお爺さんの若い頃のことは、誰にもわからないのだ。

(238)

ノルコが聞いた限りでは、ゲンお爺さんはちょっとした論客だったそうだ。昔から社会問題に強い興味をもつていたお爺ちゃんは、体内ツイッター移行期の混乱の中で精力的な活動を行つた一人だ。ノルコ（昔は体内ツイッターなんてなかつたんだ！）ノルコはその時代をうまく想像できなかつた。

(239)

時は2030年代。体内ツイッターは海外の一部でひそかなブームを起こしているだけのものだった。しかし、時の3大国、アメリカ、中国、インドにおいて本格的な普及が始まると、世界の情勢は大きく変わり始める。

(240)

当初、日本やEU諸国では導入反対の声が大勢を占めていた。人が、従来の人としての形を失ってしまう。そんな危機感が強かつたのだ。しかし経済活動に体内ツイッターが用いられるようになると、たとえ反対論を唱える人であっても、それを使わざるを得ない状況が生じてきた。

(241)

体内ツイッターを導入するか否か。その問い合わせに対するゲンの答えはこうだった。ゲン「導入は不可避な流れだ。だから賛成とか反対とか言つてないで、導入に向けたガイドラインを考えるべし」 そしてこうつけ加えた。 ゲン「しかし私自身は決して体内ツイッターを使用しない」と。

(242)

体内ツイッターはコンピューターによつて開発された装置だ。大規模量子演算機が膨大な計算の末に導き出した究極の「ミニユケーションツール。その機能には未解明な部分が多くあつた。ゲン「体内ツイッターは遺伝するかもしれない」 当初は一笑に伏されたその発言は、後に的中することとなる。

(243)

『このままでは世界は、全ての人間が監視しあう究極の監視社会、ディストピアになつてしまふ!』 過激な反対勢力が活動をはじめ、世界のあちこちで血生臭い事件がおきた。それに対しゲンはこう反論した。ゲン「ツイッターには監視能力はない、一人になりたい時はいつでも一人になれるのだから」

ツイートピア (244)

また、それと正反対の主張もあつた。『体内ツイッターを使って

全ての人間の行動を把握すれば、犯罪も事故も自殺も無くなる、活用すべきだ!』 それに対するゲンは、ゲン「監視には抜け穴が常に存在する。強い監視はより深い抜け穴を作るだけで意味が無い。それよりも私は、人の善性を信じたい」

(245)

自由で透明感のある意思疎通は、人の心を正しく明るい方向へと導くだろう。そんな性善説のような考え方から、ゲンは体内ツイッターの価値を認めていた。しかし、その副作用を十分知らないうちに見切り発車をするのは良くないという理由で、ゲン自身は使用を拒んでいたのだ。

(246)

しかし実際に「遺伝する」という体内ツイッターの副作用が知られるのは、普及してしばらくたつてからのことだった。後から知つて深く後悔する者は後をたたなかつたし、ゲン自身も深く反省したものだ。もつとしつかり反対すべきだったのではないかと。

(247)

ゲンとミチコの間に生まれたクメゾウは、体内ツイッターを持ったぬ者として生まれた。ゲンはクメゾウが12歳になるまで体内ツイッターの使用を認めず、12歳の誕生日に決断させた。クメゾウはその日のうちにインスト薬を打つた。もうバイオツイッターなしには成り立たない世の中だったのだ。

(248)

クメゾウお爺さんからアフレルお父さんが生まれ、そしてノルコとワクが生まれた。ツイッターを体内に宿す者として。ノルコ（ゲンお爺ちゃんのつぶやきは、どれくらい今の歴史に影響しているんだろう?）ふとそんなことを考えたりするノルコだった。

(249)

一般庶民のつぶやきが、世界の歴史を左右すると考へるのは難しい。しかし時にはほんのささやかな咳きが、多くの人のリサイートによつて増幅され、無視できないほど大きな力をもつこともある。ゲンのツイートの中にもそんなツイートがあつたのかもしれない。可能性は誰にも否定できないのだ。

(250)

t w e e t — w i t h — b r a v e r y 勇気をもつてつぶやく。そんなゲンお爺さんの言葉が、ノルコは少しだけわかつた気がした。ノルコ（せつこー） ビクつとなつて振り返ると、ノルコの後ろにお父さんやお母さん、ワクもクメゾウお爺ちゃんもウメナおばあちゃんもいて、みんなでヨコを覗き込んでいた。

(251)

クメゾウ「パスワード覚えとつたんかい！」 ノルコ「こんな古い機械がよく動くわね」 アフレル「どうだい、友達とはしゃべれた？」 ワク「イエア！ イッソクール！」 ノルコはなんだか恥ずかしくなつてしまつて、首筋をぽりぽりとやつた。ウメナ「そ、ぼちまち切り上げな。もうお昼だよ」

(252)

将来は良妻賢母になるんだとノルコは心に決めていた。一度PCを終了させて台所に向かう。煙で採れたカボチャをウメナお姉さん（そう呼ぶように言われている）と一緒に料理するのだ。ウメナ「ちょっと若いカボチャだからお団子にしようか」ノルコは注意深くカボチャを切ってレンジにかけた。

(253)

ウメナ「友達とはちゃんと喋れたかい？」レンジの中をジーフと覗き込んでいるとウメナがそう聞いてきた。ノルコはちょっと首をかしげ、そういうやそれどころじやなかつたなど思い起こす。ウメナ「別のこと夢中になつてたつてかい？」ノルコはウンウンとうなずく。

(254)

ウメナ「ゲン爺さんのフォロワーさん、まだあんなにいたんだねえ。何か発見はあつたか？」ノルコはちょっと考えて、そして首を横にふつた。ウメナ「そりや残念だ」ノルコはその言葉に首を傾げる。ウメナ「ゲン爺さんについては私に良くわからないんだ、口数の少ない人だつたからね」

(255)

ウメナ「ちよつとは名の知れた弁論家だつたらしいけど、ミチコ義母さんが亡くなつてからとんと喋らなくなつちまつた」ノルコの表情が無意識のうちに真剣になる。それをウメナは見逃さなかつた。ウメナ「ミチコお義母さんのこと、聞きたいのかい？」ノル

「はウソと強くうなづいた。

(256)

ウメナ「ミチ「義母さんと会った事は3回しかないんだ」　ウメナは食事の準備をしながら続ける。「家に遊びに行つたのが2回、残り1回が入院してからのお見舞いでだ」　ノルコはウメナお婆ちゃんとクメゾウお爺さんが中学校以来の仲であることを知つていた。

(257)

ウメナ「体が弱いわけじゃなかつたのにね、うちの畑を作つたのもミチ「義母さんだつたんだよ。本当に、ガンつていうのは嫌な病気だね」　そしてウメナは遠い目をする。　ウメナ「綺麗な人だつたよ、遺影もそうだけど、あんな麦わら帽子が似合つ人はそういういやね」

(258)

ウメナ「ノルコ、自分から咳けない以外に支障はないんだね?」
ノルコはうなずく。ウメナ「ミチ「義母さんの若い頃の写真があるよ、少ないけどね」　それは是非見てみたい!　ノルコは思わずジャンプしてしまつた。それを見てウメナはニッと笑う。そして二人の間に数枚の画像が投影された。

(259)

野菜畑を背景にしたゲンとミチのツーショット。一人とも宇宙服を思わせるデザインの「東京都公式農作業服」を着ている。すらつとした体形で長い髪を後ろに束ねていて、こうして見ると病氣で亡くなつたのが嘘のようだ。ウメナ「入植した時の記念写真だね」ノルコはまじまじと画像を見据えた。

(260)

イズミ・ミチコは第二次緑園都市計画における東京入植者の一人だ。南東北州の高校の園芸科を卒業している。いつどこでゲンお爺さんと知り合ったのか、それはウメナお姉さんも知らないらしい。ウメナ「こっちの写真は私がとったんだよ」それは台所で料理をしているHプロン姿のミチコだった。

(261)

ウメナ「ミチコ義母さんの作るかぼちゃ団子があまりに美味しかったんでね、教えてもらつたんだよ」写真の中のミチコは、もうもうと湯気の上がるカボチャを、片栗粉と一緒にボウルでこねていた。ノルコ（！？）ノルコはしたたか驚いた。なんと素手でこねていたのだ。

(262)

ウメナ「こねる時に一さじのサラダ油を加える。それがイズミ家に伝わるカボチャ団子の作り方だ。でもやっぱりこねる時の手の感覺なんだね、あの美味しさを生んでいたのはさ。私が何回作つてもあの味にはならないんだ、不思議なことにね」ノルコは思わずうなつてしまつた。

(263)

その時ちょうどレンジがチンと鳴つた。カボチャを取り出して火の通りを確認する。ウメナ「どうだい？」スーっと箸が通つた。ノルコはOKサインを出す。そしてボウルの中にカボチャと片栗粉をいれ、一さじのサラダ油を加えた。ウメナ「やってみるかい？」ノルコは“おーっ”と手を上げた。

(264)

もぐもぐと湯気を立てる熱々のカボチャ。ノルコはぐつと息を飲む。ミチコおかあさんはやつていた。そして私はそのひ孫。やつて

出来ないわけが無い！ そう意を決して手を突っ込んだ。ノルコ（－－）熱くて飛び上りそうになった。片栗粉をうまくからめて混ぜないと確実にやけどする。

(265)

ウメナ「……ほつ、やるじゃないか」 ノルコの眉間にびしびしシワがよる。熱くて熱くてたまらない。でも我慢してかき回していく。指先は真っ赤だ。ウメナ「あんまし無理するんじゃないよ？」でもやる、最後までやりとおす。なぜならばノルコは、健気で勇敢な、お料理上手な美少女なのだから。

(266)

なんだかんだでノルコは最後まで混ぜきってしまった。すぐに流水で手を冷やす。しばらくヒリヒリしそうだ。ウメナ「よくやったノルコ」これでお前さんも立派なイズミ家の女だね」 さあ、あとは焼くだけだ。やがて台所にたちこめる香ばしい匂い。ノルコは胸がいっぱいになつた。

(267)

そのころちようじ、食卓の長机でクメゾウとアフレルがビールを一杯やつていた。クメゾウ「くーつ、仕事のあのビールはやつぱうめえな！」 アフレル「父さん、さつきまでワクと遊んでなかつた？」 クメゾウ「こまけーことはいいんだよー」 アフレル「まあ、それもそうだね！」

(268)

ワク「ふはーつ、ヒック！」 ヲコ「麦茶で酔つ払つてるの？ ワク「クメゾウ「なあー、アフレル。仕事ねえなら紹介するぞ？」 このはいくらだつて人手がいるんだ、ブラブラしてねーで一つやってみたらどうだ？」 アフレル「いやあ、大丈夫だから」 ワ

ク「ホワッ、一ート、イズイット？」

(269)

クメゾウ「一ート(HEET)つてのはな、当時最先端つていわれた職業のことよ。ニード(NEED)から点々とつて一ート。つまり何か重要なもんが欠けてても特に問題はねえ、必要じやなくなることたあねえってことだ！」ワク「インタレスティン…」アフレル「父さん意味がわからぬ」

(270)

クメゾウ「親父がよくぼやいてたんだがな、昔は働かない奴はメシ食つちゃいけなかつたんだ。大変な時代だつたるーな」ヨコ「ええ、それだといつも誰かが飢え死にしなきやいけなくなつちやうアフレル「全員分の仕事をいつも用意するなんて不可能だからねワク「アンビリーバボー！」

(271)

クメゾウ「だからつて、いつまでも無職でいいわけじゃねえんだぞ？」アフレル「わかつてるよ、ちゃんと探してるつて」クメゾウ「ま、変な仕事が好きなお前のことだ、時間はかかるのかもしれねえ。でもいい加減妥協しろよ？」アフレル「うん、でももうすぐ見つかりそうな気がしてるだ」

(272)

ヨコ「ねえねえあなた。いつたいどんな路線で探してるの？」アフレル「うん、まあ、やっぱあれだね」ヨコ「あれ？」ワク「ホワッ、ザット？」アフレル「夢のある……感じのかな！」そういうてアフレルは照れくさそうにアゴをさすった。何だかみんな、ため息が出てしまった。

(273)

クメゾウ「まあ……夢もいいが、夢だけじゃ食えねえぞ!」ヨコ「うふふ、そうですね。ところでさつきからいがするんだけど、何を作っているのかしら」ノルコがウメナと一緒に料理を作っている、他のみんなは待っていてと言い残して。みんな、それとなくそわそわしているのだった。

(280)

まもなくウメナが皿を持ってやつてきた。ウメナ「お前ら! 今日はノルコの手作りだ! ありがたくいただけー!」ドーンと置かれた皿の上で、焼きたてカボチャ団子が湯気を立てている。ヨコ「あら美味しそう!」クメゾウ「ほつ、これはなかなかクメゾウはさつそく箸を伸ばした。

(281)

ウメナ「たわけー!」一瞬で叩き落とされる箸。クメゾウ「なにすんじやー! 热いうちに食つたうがと思つたに!」ウメナ「先にやることがあるんだよ!」すると台所から、小皿を手にしたノルコが歩み出ってきた。ヨコ「ノルコ?」小皿にはもちろんカボチャ団子が乗つている。

(282)

ノルコはそのまま仏間に進むと、ゲンとミチコの遺影の前に小皿を置いた。そして正座し、仏鈴を鳴らし、厳かに手を合わせて瞑目した。クメゾウ「フム」アフレル「ああ、なるほど」ヨコ「……ノルコ」ワク「オーマイガッ」何となくみんな、そつちを向いて手を合わせてしまった。

(283)

ノルコは戻つてくると、さあ食べて食べてと手をバタバタさせた。

三口「ノルコもこの味を伝授されたのね！」 クメゾウ「じゃあ食うぞ！ 腹が減つて減つてたまらんのだ！」 クメゾウに続いて、みんなも次々と手を伸ばし始めた。ウメナ「ふふん、じゃあ他の食いもんもぱちぱち出すかね」

(284)

ウメナの手によつて次から次へと食事は出され、いつしか食卓は料理でびっしりに。ノルコが作ったのはカボチャ団子だけだったので、ノルコはまだまだ修行が必要だなと思った。でもみんな喜んで食べてくれたので、ひとまず満足することに。ノルコ（少しでもミニ「お姉さんの味に近づけたかな？）

(285)

お茶を飲んで一服して、落ち着いたといひで帰ることになった。クメゾウ「これ持つてけい！ ノルコ」 そう言ってクメゾウはノルコに例のPCを手渡した。クメゾウ「ここにあっても仕方がないしな」 ノルコはウンと頭を下げた。そして帰りの車の中ずっと膝の上に抱えて、大切に持ち帰った。

(286)

ホウ「ベアトリー・ヒー！」　なにやら人名のよつた言葉を叫んでホウはぶつ倒れた。おばさん「またかい」　ホウ「おお……マイスリー！……マイディア」　おばさん「？？」　ホウは顔を赤らめ、両手で胸を押されて高揚しているようだ。おばさん「もしや……恋！？」　しかし一体誰に？

(287)

ヨコ（あら……何だか寒気がするわ）　ヨコが街角で背筋を振るさせていた。彼女は今「古着パッチワーク英会話教室」の帰りである。ヨコ（今夜はおでんにでもしようかしら？　暑いからって冷たいものばかり食べてちぢやいけないわ）　せつやくヨコはアフレルにリプライを飛ばした。

(288)

アフレル「おでん？！　いいね！　ガンモドキいっぱい入れてね！」　アフレルは面接先から即効リプライを返してきた。ヨコ「決まりね」　ヨコはそそくさといつものスーパーに入つて行く。ところで奥さん、旦那のことニートとか言つておきながら無職なんですか？　ヨコ「主婦は立派な職業よ！」

(289)

ヨコは大根を取り、商品T-を確認した。ヨコ「あら、これクメゾウお義父さんのところの『UNI』　どんな商品にもマイクロサイズの電子タグが取り付けられており、全てツイッターと連動している。生産者はもちろん、種まき時期から使われた肥料の情報、果ては運

搬車両のナンバーまで調べられる。

(290)

クメゾウお義父さんが作ったのなら安心と、三口はその大根を力口に入れた。三口「あら」隣にキャベツを手にしたまま直立不動になつてゐる男性がいる。三口（何をそんなに調べているのかしら？）品物の情報は芋づる式に際限なく調べられるので、気付いたらどんな情報まで調べてたりつてことか。

(291)

三口もこつだつたが、板チョコの情報を芋づる式に調べていって、気づいたら南米の地質学に詳しい人と話し込んでしまつていてことがあつた。三口（ほゞほゞにしないとねえ……）そして三口はほゞほゞに買い物を済ますと、やつぱりレジを通りまくして店を出た。

(292)

三口「あっ！」三口せハッとした氣づいて立ち止まつた。三口（ガンモドキを忘れたわ！）ああしまつた、亭主の大好きなガンモドキ、早くもどつて買い物足さなければ。店長さんに笑われてしまふかもしれないけど。そして三口が踵を返したその時だつた。ホウ「その美しいお姉様、お忘れものはこれですね？」

(293)

イタリア風のシックな縦縞スーツに身を包んだホウが、手にガンモドキの入つた袋を持つて立つてゐた。三口「ええ！？」ホウ「あなたがガンモドキを忘れるだらつことを予感していたので。きつとお困りになると思いましたので」三口は激しく困惑した。確かにガンモドキなのだけど。

(294)

ヨコ「あ、あの、ありがたいのですけど、知らない方から頂くわけには！」 そう言つてヨコは逃げるよにその場を立ち去つた。

ホウ「ああ……なんてエレガントな人なんだ……ビヴァーチェ！」

ホウはガンモドキを強く胸に抱きしめる。そして堪えきれぬ喜びの発露として、小刻みに震えた。

(295)

ヨコ（いつたい何だつたのかしら……どうして私がガンモドキを買い忘れたことを？） ヨコは不審に思いながらも、心の奥ではドキドキしていた。色んな男の人々に声をかけられてきたが、あんな風にアプローチされたのは初めてだ。ヨコ（いけないわヨコ。私は子も夫もある身よー）

(296)

ヨコは始終落ち着きなく、ガンモドキを買つだけのために店内を3週ほどグルグルしてしまつた。店長「お、奥さん？」 ヨコ「え？、ああ、ちょっと買い忘れをね。うふふ」 そうして店内をうろついていると大変恥ずかしいことに、お化粧直しに行きたくなつてしまつた。ヨコ（いやだわもう……）

(297)

たかがトイレ、それどトイレ。トイレには人の世の全てが流れていると書く。そんなトイレだが、世の中に数少ない「非ツイッターフィeld」である。誰にも見られることのない秘密の空間であり、同時に誰の庇護も受けられない孤独な密室でもある。ヨコ（スーパーのトイレを使うのは億劫だわー）

(298)

たとえ情報共有化時代であつても、トイレの秘密などはちゃんと守られるのがツイートピアである。しかし同時に、トイレで何か事

件が起きた時、誰の助けも求められないのだ。しかし背に腹は変えられないで、**三**「**四**はよくよく注意してスーパーのトイレに入り、お化粧を直すこととした。

(299)

ホウ「ビヴァーチュ」**三**「ひこつー」トイレの中からわきほどの男が現れた……よつた気がした。**三**「……せつ」極度の緊張でいるわけの無い人まで見えてしまったのだ。**三**（ドキドキするわ……）**三**は恥ずかしいやら恐ろしこやらで、ひどく落ち着かなかつた。

(300)

三は家に帰る道中、ずっと先ほどの男のことを考えていた。**三**（リプレイをみられていたのかしら……？）でも、私とアフレルさんの共通フォロワー、あんな方いたかしら……）**三**はさんざん首をひねつて見るが良くわからない。そういうひじれのつまひに着いてしまつた。

(301)

三「ああ！」ガンモドキを買つていなかつた。**三**はその場にぐず折れた。**三**「もういやだわ」仕方ない、ガンモドキは何かで代用しよう。そのため息をつきつつ玄関を開けようとした**三**の目の前に。**三**「これは……」そこにには袋いっぱいのガンモドキが。そして一刺しの赤いバラが。

(302)

三はしばし放心状態のまま、その場に立ち尽くした。**三**（このガンモドキは……捨てましょつ）そう思いつつ赤いバラを抜き取つて、草むらに捨てようと手を上げるが。**三**（……いえ、この花に罪はないわ！）そして結局家の中に持ち込んで、キッチン

の窓際に生けたのだつた。

(303)

少し落ち着いたヨコは、赤いバラの商品「」を開いた。何の変哲もない赤バラのようだ。購入者はトキワ・チカラ（43歳）近所にあるツイッター互助会の管理人さんだつた。ヨコ「どうゆうことなかしら」 そうポシリつぶやくヨコ。ヨコ「あつ、ノルコ」いつのまにかノルコが近くに来ていた。

(304)

ヨコ「えと……」これはね、そこで拾つたのよ。綺麗でしょ？」ノルコはぴーんと背伸びをして、赤いバラの花をしげしげと見つめ、うんつと一つうなずいた。そしてテーブルの上においてある食材に気づく。ガンモドキがいっぱいある。お父さんの大好きなガンモドキ。ノルコ（今夜はおでんだ！）

(305)

ヨコは困つたなと思う。これでガンモドキを捨てるに捨てられなくなつた。そして気づく。もしガンモドキの商品「」をノルコが調べてしまつたら……。ヨコ「ねえノルコ、お願いがあるんだけど」ノルコはうんつとうなずく。ヨコ「お風呂を掃除しといってくれない？ お母さん少し疲れちゃつて」

(306)

暇で暇でしかたが無かつたノルコはダッシュでお風呂に向かつていつた。ホッとしたヨコは、ガンモドキの商品「」を調べた。こちらの購入者もツイッター互助会の管理人さんだつた。しかしそこからの譲渡情報がまったく無い。紛失物と同じ扱いになつているのだ。ヨコ（やっぱり氣味が悪いわね……）

(307)

ヨコは購入者のチカコさんに直接問い合わせることにした。ヨコ「かくかくしかじか」チカコ「あらら、それは申し訳ありませんでした。うちのホウの仕業です」ヨコはチカコから詳しい説明を受け、例の男がツイッター能力喪失者であることを理解した。ヨコ「そういうことでしたか」

(308)

事情を理解したヨコは、まるで喉に刺さった骨がとれたような気持ちになった。そして鼻歌まじりで晩御飯の仕度を開始したのだった。ノルコ（じー）ヨコ「はつ」疲れているように見えない母を、ノルコが訝しげに見つめていた。ヨコ「あ、ありがとうノルコ、おかげでお母さん元気になつたわ！」

(309)

その夜の夕食、アフレルは大好物のガンモドキをモシャクシャとほお張りながらビールを飲んでいた。アフレル「こんなにたくさん入れてくれるとは思わなかつたよ！」 喜びいっぱいの表情のアフレル。ヨコ「え？ それほどでもないわよ？」 微妙な微笑のヨコ。ノルコ（お母さん何かあつた？）

(310)

ヨコ「そういえばあなた。今日の面接はどこに行つたの？」 アフレル「牛を見に行つてたんだ」 牛？ みんなそう思つた。アフレル「父さんの紹介でね、見てくるだけでもいいからつてさ」 ヨコ「牧場の仕事を見学してきたの」 アフレル「うん。あと、ちよつとカウボーイ的なことをね」

(311)

そう言つとアフレルは、動画ファイルを起動して食卓の上に投影した。ワク「カウボーイ？」 ヨコ「あらホント」 のどかな牧場の光景だつた。動画の中でアフレルは、手綱を引いて牛を引っ張り出しているところだつた。アフレル「これが結構大変なんだ。なかなか言つことを聞いてくれなくて」

(312)

牛を引っ張るというより、引っ張られているアフレル。それを見て牧場主さんがゲラゲラ笑つてゐる。ヨコ「これじゃどつちが牛だからわからないわ」 アフレル「そう？」 ヨコ「それで面接は受けたの？」 アフレル「来てもいいって言われたけど断つた。思つ

た以上に大変な仕事だつてわかつたから

(313)

ヨコ「わあ……」夫がカウボーイというのも悪くないかと思つていたヨコは、少し残念に思つた。アフレル「あつ！」なんと動画の中で、1頭の牛が放尿を始めてしまつた。アフレルが飲んでいるビールと同じような色をしている。お食事中にこれはいけない。アフレル「うわー、あー」

(314)

ワク「ライク・ア・ビアー！」アフレル「ワク、それは言つちやいけない……。「ごめんよみんな」そう言つて動画を消すアフレル。ヨコがポツリと一言。ヨコ「牛さんはいいわねえ、どこでもおトイレできて」ノルコ（ん？）その一言にノルコは、何となくピーンときてしまつたのだった。

(315)

ノルコ（お母さん、きつとおトイレで困つたことがあつたんだ）トイレにツイッターを設置してはいけないという法律がある。そのせいか「トイレで起こつた犯罪は世間に知られることがない」という都市伝説が広まつてゐるのだ。おかげで公共のトイレは何となく使いにくい状況だ。

(316)

ノルコはちくわふをモジュモジュしながら思つ。学校のトイレも使いにくいなど。世の中にはトイレに行くとからかわれるという理由で我慢し続けて、腸閉塞になつてしまつた子もいる。さらに問題なのが、仮にトイレを覗かれたりしても、そのことを訴える手段がないといつことだ。

(317)

ノル口（でも、いつ誰がどれだけ使ったか、なんてことが全部記録されちゃうのもいやだな）「これは根の深い問題だとノル口は思つた。アフレル「どうしたノル口？ 難しい顔して」 言われてハツと気づいて、おもむろに首を振るノル口。お食事中に何でこと考えてたんだろ？」 ノル口（はしたないわ）

(318)

ノル口は食器をキッチンに返す時に、母が皿に拾つてきたという赤いバラのトレーを調べた。ノル口（あつ……） 購入者は互助協会のおばさん。この間会つたあの人だ。ノル口（ということは） 高確率でホウさんが絡んでるはずだ。そうノル口は推理した。何だか気分がゲンナリしてきた。

(319)

ノル口は自室に戻りつつ考える。お母さんのトイレの話ととホウさんの間に因果関係があるのだとしたら、それは一体どういう状況だろう？ ノル口（あの赤バラ……もしかしたらホウさんがお母さんに上げたのかも？） ほぼ正解といえる推理。しかし、それとトイレとの因果関係は？

(320)

ノル口（お母さんがトイレから出た直後に、ホウさんがお母さんに赤バラを渡した？） そこまでノル口は考えて、やつぱりワケがわからないなと思った。ホウさんの動機がわからない。なぜお母さんに赤いバラを？ 赤いバラってどんな時にプレゼントする？ ノル口（あああ！）

(321)

ノル口（お母さん、ナンパされたのかも！） そして母はそのバ

ラを受け取つて帰つてきたのだ。これは由々しき事態。そう思つた
ノル口は、何が何でもホウさんとコンタクトを取らなければと思つ
た。しかし。ノル口（ホウさんにはリプレイを飛ばせない……）
直接会つて話すしかない。いや。

（322）

青年ホウには不思議な能力がある。あのGPT-3とかを見たせいで、人の心が読めるようになつたようだ。心が読まれてしまうのは、正直言氣分の良いものではないが、ならばそれを逆手に取ることも出来るはずだ。ノル口（私達の平和な食卓を……乱さないで…）
ノル口は田を閉じ、強く念じた。

（323）

『ビヴァーチュ』 どこからともなくそう聞こえてきた気がした。
ノル口（私のお母さん美人だから気持ちはわかるけど、お願ひだから変な氣を起こさないで！） ノル口は10回くらいそう念じてから田を開けた。ノル口（伝わったかな？） それを確かめるためにも、明日ホウさんに会いに行かないと。

（324）

ノル口（お母さんの様子をもう一度確かめておこう） ノル口は一階に下り、キッチンへと向かう。ノル口（……じつそり） 入り口の影から母ヨコの姿を覗うノル口。ヨコは食器を洗つていて。いつもと様子は変わらない。ノル口（あつ） キッチンから赤バラが消えているのを、ノル口は見逃さなかつた。

（325）

ノル口（まだ生き生きしてたのに……なんで？） ノル口はそこでハツと氣付く。隠蔽したのだ と。ヨコ「ん？」 ヨコに気付かれた。ヨコ「なあにノル口。」 飯足りなかつた？ ノル口は首

を横に振つて、その場を後にする。アフレル「おっ、ノルコ」その後ちよつと、父が風呂から出た。

(326) スウェット姿で頭から湯気を立ててるアフレルは、ビリやらノルコが微妙な表情をしていることに気付いたようだ。ノルコはマズいと思い、顔を伏せる。どう切り抜ける？ ノルコ（……そうだ！）ノルコはお腹を押さえてモジモジした後、ダッシュでトイレに駆け込んだ。ノルコ（セーフ！）

(327) もちろんお腹なんか痛くない。というかけなげ美少女はウコなんてしまい。ノルコは便座に腰掛けたまま、しばし考え込んだ。ノルコ（こうじうときはどうしたらいいんだろう？ お母さんが浮氣するかもしれない……誰に相談することもできない）といつかつぶやけない。ノルコ（……孤独だわ）

(328) ノルコはリビングのT字にアクセスする。ヨコとアフレルが会話している。というか、普通に声が聞こえてくるのだけ。アフレル「また明日も面接だから、早くに出かけるよ」ヨコ「そう？ 朝ごはん6時くらいでいい？」アフレル「ううん、5時にはここを出るから。移動しながら食べてくよ」

(329) ヨコ「そんなに早く？」アフレル「そうなんだ。南房総の先まで行くからね」ヨコ「結構遠いわね。受かったとして通えるの？」アフレル「出社はたまいでいいんだ。あとは殆ど自宅ができる。また研究職なんだけど」ヨコ「そう、受かるといいわね！」アフレル「え？ う、うん。がんばるよ」

(330)

ノルコは手を洗つてトイレを出た。自室に戻りつつ思ひ。お母さんの様子がやっぱり変だ。何となく、お父さんと話したくないみたい。会話を出来るだけ早く切り上げようとしている感じがする。ノルコ（お母さん……まさかとは思うけど） そうしてノルコの不安な一夜は更けてゆく。

(331)

そして翌朝。現在8時半。今日は日曜日なのでワクは朝寝坊している。4時に起きてアフレルのお弁当を作っていたヨコも、ソファーでうつらうつらしている間に眠ってしまった。一人でイチゴトーストを食べたノルコは。ノルコ（好機！） そつ心の中で気合を入れて、家を飛び出して行つた。

(332)

ツイッター互助協会に行つて、ホウに会つて確認して帰つてくる。ただそれだけだ。スマーズに行けば10分で行つて帰つて来られる。しかし。ノルコ（どっちだっけ……） 住宅地の隘路は思いのほか複雑だつたりする。体内ツイッターの地図機能を使つていたにも関わらず、ノルコは迷つてしまつた。

(333)

ノルコ（勝手に出かけたつて、お父さんに怒られる…） ノルコは血の気がサーッと引く思いで、まるで迷路のような戸建住宅の細道をさまよつていた。すると。「おはよう！」 ノルコは喉から心臓が飛び出すかと思った。後ろを振り返ると。ホウ「来るんじゃないかと思っていたよ、ビヴァーチュ！」

(334)

ノル口は内心ホッとしたが、それを顔に出すわけにはいかない。
ノル口（確かにめなきや！） そしてジッと相手の顔をにらむ。昨夜の祈りが届いたなら、ホウは何らかのリアクションをしてくるはず。ホウ「そんなに僕の顔が気になるかい？」 と言つて髪をかき上げ、無い耳を見せてくる。ノル口（あれれ？）

（335）

私の心を読めるのなら答えてくれるはず。ノル口は念じた。ノル口（お母さんに何かしたの？！） するとホウは少しうな垂れた様子で、一つため息をついた。ホウ「昨日ね、コウタ君が家に帰っちゃったんだ。寂しくなるよ」 コウタ君とは、以前に協会で会った少年のことだが。ノル口（とぼけてる？！）

（336）

ホウ「君は僕に聞きたい」とがあつてこられた」 ノル口は首を縦に振る。ホウ「だが僕はそれに答えることが出来ない」 ノル口は首を傾げる。ホウ「なぜならそれは、僕の極めてプライベートな部分だからだ」 ノル口はその場で地団駄を踏む。ホウ「そして君は今、不公平を感じている」

（337）

そつちはプライベートとか言つておきながら、そつちが考えていることはお見通しではないか。そんなの不公平だ。確かにノル口はそう思つて地団駄を踏んだのだ。はしたないとは思いつつも。ホウ「でも君は、その気になれば心を隠すことが出来るはずだ。僕は全てを支配しているわけじゃない」

（338）

ホウ「君は恋をしたことがあるかい？」 ノル口はドキリとした。そう改まつて聞かれてみれば、ノル口は未だ誰にも恋をしたことがない

なかつた。ホウ「恋とは不思議なものさ。お互いの気持ちと気持ちが合わせ鏡みたいに向き合つて、どこまでも互いの姿を連ねていく。果てしが無い。ビヴァーチュ」

(339)

ホウ「僕が君の心を読めたとしても、僕が僕の心を読めない限り、僕は何も掴めやしない。つまりはそういうことだよ」ノルコはホウの言葉をただ黙つて聞いていた。お母さんとのことがどうとか言う以前に、その言葉には強い説得力があるように思えたのだ。そして自分にとつて大事な言葉であることも。

(340)

ホウ「さあ、そろそろ帰らないと、きっと大変なことが起ころるぞ」ノルコはギクリとしてその場でたじろいだ。ノルコはホウに何か一言いいたかつた。でも呴けないのだ。ノルコは奥歯を強くかみ締めてウンウンと唸つてみたが、鼻で空気がヒューヒュー言つだけだった。ホウ「ふふ。また今度だ！」

(341)

ノルコは家に帰つてソーツと中に入る。ワク「ホウエア？」寝ぼけたワクが突つ立つていたので、ノルコは反射的に「シー」と唇に指をあてて黙らせた。リビングのソファーでは、ヨコがまだすやすと眠つている。ノルコはホツと内心ため息をついて、自室へと戻つていった。

(342)

ノルコは学習机の引き出しからゲンお爺さんのPCを取り出した。そして起動させている間に考える。先ほどのホウの話をまとめると、やはりホウはお母さんに恋をしてしまったようだ。そして合わせ鏡の例え話から察するに、その顛末はホウにもわからないのだろう。

ノルコ（ますます厄介だわ）

(343)

『GPTLは世界の全てを僕に教える』 ホウが言っていたあの言葉はウソなのだろうか。ノルコはふとそう思う。GPTL、グロス・オブ・パーソナル・タイムライン、神のTL。そんな良くなからぬものに取りこまれてしまった人が、今私のお母さんに恋してる。ノルコは気が気じゃなかつた。

(344)

まずはGPTLについて知らなければならない。ノルコはゲンお爺さんのPCでそれを調べることにした。キーワード検索機能を使って「GPTL」の単語を含むツイートを片っ端から調べていく……つもりだったが。ノルコ（無い……全然） GPTLという言葉は、どこをどう探しても見つからなかつた。

(345)

まるで何か大きな存在によつて、言葉そのものが隠されてしまつているようだつた。ノルコは薄ら寒い気分になつてきた。ノルコ（そうだ！）あの管理人のおばさんなら知つてるかもしれない。ノルコは思いつくや否や、ツイッター互助協会の管理人、トキワ・チカコさんのプロフィールを検索した。

(346)

ゲン「こんにちはチカコさん。私はこの間お世話になりましたノルコです。ゲンといつのは私のひいお爺さんの名前です。今私は、ゲンお爺さんのPCを使ってツイートしています。チカコさんに聞きたいことがあります」ノルコは頑張ってこの長文をこしらえて、そしてチカコさんにリプレイした。

(347)

チカコ「あらノルコちゃん、お久しぶり。何となく事情はわかつたわ。聞きたいことつてなあに？」ゲン「少し時間がかかります。うつのに」チカコ「構わないわ、今はお腹(ほん)のホットケーキを作っているところなのよ」ノルコはお腹ががグウと鳴るのを抑えつつ、キーボードを手にかけた。

(348)

ゲン「ホウさんのGPT-Lのことを知りたいんです」T-Lの向こう側でチカコさんがピタッと手を止めたような感覚があった。ゲン「どうしても気になつて。調べてもわからなくて」チカコ「あれはね……何で説明したらいいのかしら」どうやらチカコさんに良くわからないようだ。

(349)

ゲン「ホウさんはGPT-Lで、世界の全てを知つたと言つてしまつた」ノルコはそこまでツイートして手を止めた。今朝ホウと会つた時のことば、チカコさんに伝えない方がいい。なぜなら「ホウにどんな用事があつたの?」と聞かれたとき、どう返事をして良いか

わからないからだ。

(350)

ゲン「もしホウさんが世界の全てを知っているのなら、ノルコ達の将来とかも知つていることになります。それが私には不安です」
チカコ「うーん。確かにそれはわかるわ。ホウがその知識を使って何をしてかすかわからないものね」
ゲン「はい」
チカコ「でもね、その心配はきつとないわ」

(351)

ゲン「どういふこと?」
チカコ「今のところ、ホウがGPT-Lの力を悪用したことはないわ。それに、世界の全てを知つているなんてこと自体、私はちょっと疑わしいと思つていて。もしかすると、ただのあの子の妄想なんじゃないかしらって」
ゲン「妄想」
チカコ「そう、ただの妄想かもよ?」

(352)

チカコ「あら、ホットケーキが焦げてきたわ、ちょっと待つてね」
ゲン「すみません」
チカコ「いいのよ」
ノルコは、チカコがホットケーキをひっくり返している間に考えた。
ただの妄想、確かにそれはあるかもしれない。でもホウさんはしばしば人の心を読むじゃないか。

(353)

ノルコはそのことをチカコさんに聞いてみた。
チカコ「ホウは昔から勘の鋭い子だったわ。ツイッター能力を早くに失った影響からね。どこか人を見透かしたような所があつたわ」
ゲン「そうなんですか」
GPT-Lという単語そのものがホウの創作物なのだろうか?
ノルコはそう思つよくなってきた。

(354)

ゲン「GPT」といつもホウさんの妄想?」チカ口「妄想かもしれないし、実際にあるものなのかもしないし、まあ、私にもちよつとわからないわね」ノル口は正直ガツカリしたが、チカ口さんの話を聞くうちに、ホウさんはノル口達の悪いようにほしないのではという安心感もわいてきた。

(355)

チカ口「ホットケーキが一枚出来たわ。ゲン……じゃないノル口ちゃん。食べに来ない?」ノル口は必死で首を横に振つて、すぐにそれが意味の無いことだと気付き、とつさにキーボードを叩いた。ゲン「もうおひるなかたばまち」そんなことしたらお父さんに怒られちゃう…

(356)

チカ口「もうお昼食べたの? それは残念」ゲン「おかまいなくです」チカ口「ほらほら、匂いにつられてホウがやつてきたわよ。GPTのこと聞いて見る?」ゲン「おねがいします」焦つて打つと相変わらず変な言葉になつてしまつのが歯がゆい。チカ口「あのねホウ、かくかくしかじか」

(357)

そしてノル口は大変なことに気が付いて、座つたまま飛び跳ねてしまった。ノル口（ホウさんがさつき私と会つたつてこと言つちゃつたらどうしようつー）ノル口はなすすべなく、ただホウがそのことを言わないようにと念じるのみだった。ノル口（ないしないしないしないしょー!）

(358)

しばりへして。チカ口「ノル口ちゃん。ホウがね、今とってもわ

かりやすい例え話をしてくれたわ」 どうやら祈りは通じたようだ、ノルコはホッと胸をなでおろした。ゲン「聞きたいです！」 チカコ「ええ、もちろん。ホウはGPTのことを、『すくべ良い映画のやうなもの』って例えたの」

(359)
すくべ良い映画と聞いて、ノルコが真っ先に思い浮かべるのは、オードリー・ヘップバーン主演のローマの休日だ。「世界で一番素敵なかげディ」というキーワードで色々調べていたら、この古い映画に行き当たった。その日のうちに一回見て、それからもちょくちょく見ている。素敵な映画は何度見ても素敵だ。

(360)
チカコ「良い映画って、何回見ても面白いものでしょう？」 結末とかみんなわかってるのに」 ゲン「わかります」 チカコ「何もかもがわかついても、ぜんぜん飽きない。何度見ても新しい発見があつて、胸がドキドキする。ホウはGPTのことを、そう例えているのよ」

(361)
何度見ても新しい発見がある。その言葉にノルコはゾーンときた。先ほどホウは言っていた。恋とは合わせ鏡のやうなものだと。今ある自分の状態によって、相手の見え方が変わってくる。それと同じように、GPTから見えるものも変わってくる。言わばそれは、自分と世界との間の合わせ鏡なのだ。

(362)
ゲン「すくべよくわかりました。ありがとうございました」 チカコ「いえいえどういたしまして。また何か気になることがあつたら、遠慮しないで聞いてきてね！」 ノルコはひとまずチカコさん

とせよならした。今日のところはこの辺にしておこう。なんだか頭の中がいっぱいだ。

(363)

グゥウー。またお腹が鳴つた。ノルコは部屋で一人、顔を赤らめた。ノルコ（頭を使うとお腹が減るの） そろそろお昼（はんの時間）。ノルコ（腹が減つてはなんとやらー） ノルコは椅子から飛び降りて、一つグーンと背伸びをすると、パタパタと足音を立てて一階に降りていった。

(364)

窓辺からあふれ出す陽射しがダイニングテーブルを照らしている。テーブルの上にはバターと蜂蜜の瓶。キッチンから漂ってくるは香ばしき匂い。ヨコ「もう少しで焼けるからね、ホットケーキ」ノルコ（！？）チカラさんもホットケーキを作つてた。これは何か関係があるとノルコは思った。

(365)

ノルコはテーブルについて、コップにミルクを注いで一口飲む。ノルコ（ふつー）牛乳を飲むと気分が落ち着くのは何故なんだろうと、ノルコはしばし思いを馳せる。そしてダイニングがとても静かなことに気付く。ワクは？ ヨコ「ワクはお友達の家でご馳走になるんだって、いいわねー」

(366)

ワクが日曜日に友達の家に居座る。ノルコ（毎週恒例のアレか）アレとは何か。それはまた後の話。それより家の中が静か過ぎて落ち着かないノルコは、ひとまずテレビをつけてみた。JPN48000の特集でもやってないかな？ テレビ「お昼のニュースです」どうやら期待は外れたようだ。

(367)

「テレビ」今国会において法案が提出されていました、公衆洗面所におけるツイッター常設に関する法律、通称『トイレ法』の集中審議が週明けから始まります「どうやら政治関連のニュースらしい。ノルコ（トイレ法？）また訳のわからない法律を作りうとしてい

るなー、とノル口は思った。

(368)

『「できたわー、ちょっと作りあがひやつた」』　ヨコがお皿の上に三段重ねになつたホットケーキを持つてやってきた。ノル口の隣の席に座つてナイフで八等分にする。『トライレ法ねえ、これつてなにげに切実な問題よね』　ヨコはテレビを眺めつつ、ため息を一つついた。

(369)

ノル口は聞きたくても聞けないことがたくさんあつたが、どのみちつぶやけない身なので黙つてホットケーキをパクパクと食べた。『『ねえノル口、ここだけの話なんだけどね』　ヨコは形形式的にあたりを見回してから、そつと口元を送つてきた。『……実はね、お母さんナンパされちゃつたのー』』

(370)

ノル口はもう少しで舌を噛んでしまつといふだつた。ひとまず畠間にシワを寄せて困惑の意を伝えておく。『シックなスーツに身を包んだ、若い紳士だつたわ。ねえノル口、お母さんびつしたらいいと思う?』　シックなスーツに身を包んだビバーチュ、もといホウ。ノル口はプツと噴出してしまつた。

(371)

『『ちよつとノル口ー、お母さんは本氣でノル口に相談してるのよ』』　ノル口はペロリと頭を下げて謝つた。『まあ、お母さんの気持ちもつ決まつてるんだけど、ノル口にも話しておきたいと思つたの。ノル口ももうすぐ大人になつて、お母さんみたく殿方に声をかけられるよつになるから』

(372)

お母さんの自身満々な所は是非とも見習いたい。そうノルコはいつも思う。ヨコ『1、一度だけテートする。2、すげなくことわる。3、お友達になる』ヨコはそう言いながらホットケーキの切れ端を選択肢代わりに置いていく。ノルコはうーんと考えるふりをした。本当はもう決まってるんだけど。

(373)

ノルコは3番のホットケーキをフォークで刺し、そして口の中に放り込んだ。モグモグ、おいしい。ヨコ『うん！ ノルコなら3番を選んでくれると思った！』 そう言いつつ、ヨコは1番と2番のホットケーキを食べてしまった。ヨコ『やっぱりね、こういう縁は大切にしないといけないわ！』

(374)

お母さんはやっぱり魔性の女だ、ただそこにいるだけで男の人を苦しめてしまう。ノルコは率直にそう思った。そして自分もその血を受け継いでいるのだなとしみじみ実感し、未だ小さな胸の奥でフツフツと女の魔性をたぎらせたのだった。ヨコ『ノルコに相談したら、お母さん何だかすつきりしたわ！』

(375)

その頃。アフレルは、妻と娘がホットケーキを囲んで不適な笑みを浮かべていることなど露にも思うことなく、面接先の研究施設を見渡していた。アフレル「なんて大きい施設なんだろう」 クサヨシ「ふふふ。これが人類最後の砦、ガンバール研究基地の全貌だよ」 アフレル「人類最後の……砦……」

(376)

館山市から車で30分、南房総の先端に位置するは野島岬。そこ

から太平洋に突き出す形で全長2km、幅60メートルの滑走路が延びている。その付け根には巨大な巻貝を思わせるフォルムの施設が建っている。巨大ロボット研究所兼対悪性地球外生命体迎撃基地、通称「ガンバール研究基地」である。

(377)

アフレル「現実感がない……」アフレルは研究基地の近くの高台公園にきていた。先ほどクサヨシさんに基地を案内してもらったのだが、体育館ぐらいの建物に格納されている「巨大な鉄の手」やら、一機で100トン超の出力を生み出すロケットブースターやらですっかり目が眩んでしまった。

(378)

クサヨシ「もし、悪意を持つた地球外生命体が侵略してきたら、あの滑走路から我らがガンバールロボが出撃し、持てる力を奮つて戦うことになるのだ」アフレル「うわあ……」そのガンバールロボは現在開発中でバラバラになつていて、完成すれば全長80メートルを超える巨大ロボとなる予定。

(379)

アフレル「でもまだ未完成なんですね？」クサヨシ「我々がその気になれば4時間以内に組み上げ出撃させられる。設計上の3%ほどの戦力しか発揮できないが」アフレル「倒せるんですか？」そうアフレルが問うと彼は。クサヨシ「ふふふ……無理に決まっているだろ？」「と、自身満々に答えた。

(380)

クサヨシ「だつてアフレル君、宇宙空間を何万光年も渡つてこれるほどの生命体だぞ？今の人類がどう『さかしま』になつたって、勝てるわけがないじゃないか」と言っておきながら自信満々であ

る アフレル「じゃ、なんで作ってるんです？ 面接受けに来た僕が聞くのもなんすけど……」

(381)

クサヨシ「アフレル君、君はそんなことも調べないで我らが研究基地の門を叩いたのか」 アフレル「はい、そうなんです」 クサヨシ「ふふ、君が来たタイミングから察するに、我々が求人を出した瞬間に飛びついたのだろう、時間にして今から2時間前だ」 アフレル「まさしく！」

(382)

アフレルは本当は別の研究所の面接を受ける予定だった。しかし行きの電車の中で求人検索をしている際、「巨大ロボット開発の研究員募集」の文字をついつかり発見してしまい、即効で食いついて、受けるハズだった面接を蹴つてまで、ここガンバール研究基地を訪れたのだった。

(383)

第5次火星開発選抜の3次審査を通ったアフレルの実績が評価され、こうして飛び込みの就職面接と相成ったのだが、十分な予備知識を蓄える余裕などあるわけがなかつた。クサヨシ「まあいい、立ち話もなんだ、そこに座りたまえ」 アフレルは促されるまま、近くにあつたアヒルの遊具にまたがつた。

(384)

クサヨシは白衣をサッと翻すと、音も無くアヒルの隣のカエルにまたがつた。スプリングの足を使って前後にギッタンギッタンするアレだ。クサヨシ「倒せるアテのない宇宙人への対応として、巨大ロボットを建造するのは何故か。君の質問はそういうことだね？」 アフレル「はい、そうです」

(385)

クサヨシ「ではその質問をそのまま君に返すとしよう。何故だと考えるかね?」アフレルはハツと息を飲んだ。つまりこれは口頭諮詢なのだ。アフレルは試されている。アフレル「はい、私が考えるにその理由は……」アフレルは一息おいて宙を見やる。遊具が僅かに傾いだ。アフレル「心意氣です」

(386)

クサヨシは常時険しいその表情を僅かに緩めて言つた。クサヨシ「心意氣とね? その意は?」アフレル「はい、つまり勝てないからといって戦う気持ちまで捨ててしまう訳にはいかないからです。そんなことでは全ての宇宙生物に見下されてしまします。さらに僕たち人類の尊厳を自ら放棄することにもなります」

(387)

クサヨシは黙つて耳を傾けている。アフレル「悪意ある侵略者から地球人類の尊厳を守る。その目的のために持てる力を結集するとの意義は、実際とても大きいのではないでしょうか」アフレルは自分の考えを言葉にするたびに、目の前の非現実的な研究基地の光景が、ごく当然のもののように思えてきた。

(388)

アフレル「さらに、最先端の技術を集結し、科学の可能性を追求するための絶好の場となり、ここで開発された技術は、僕たちの生活の中に確実に生かされていくはずです。そして何より……」クサヨシはもうかなり満足げな表情だ。アフレル「子供達が喜びます!」クサヨシ「ハツハツハ!」

(389)

クサヨシ「うむ、ほぼ合格と言つていいいだろ。子供が喜ぶか。言われて見ればそういう意義もあつたな」 アフレル「では……」

クサヨシ「さつそく本部に通達しよう。また一人、我が秘密基地に熱い野郎が加わったとな！」 アフレルはグーッと胸の前で拳をにぎりしめ、そして天に突き上げた。

(390)

クサヨシはカエルの遊具をギッタンギッタンしながら続ける。クサヨシ「君はこれまでの経験から、有機化学の応用に精通しているようだ。現在、油圧駆動系の開発部隊に不足がある。さつそく明日から現場に加わって欲しい。開発資料はオープンソースだ。膨大な量だが君なら処理できると信じている」

(391)

アフレル「明日からですか？」 クサヨシ「善は急げというではないか。何か問題が？」 アフレル「僕は眩音市に住んでいるので、引越す必要があるんです」 クサヨシ「基地のB2に寮がある。すぐぐにでも手配できる。完全個室で共同の温泉もあるのだ」 アフレルは正直困った。家族にどう説明しよう。

(392)

クサヨシ「時間が必要かね？」 確かに時間が必要だった。しかし巨大ロボットの開発なんてなかなか出来ることじやない。一瞬の躊躇も許されないとアフレルは直感していた。アフレル「いいえ、大丈夫です。明日から出向いたします」 クサヨシ「よろしい。では本日はこれにて終了、また明日だ！」

(393)

クサヨシはカエルの遊具からエレガントに飛び降りると、そのままスタートと歩いて基地へと戻つていった。アフレルはその背が見

えなくなるまで目礼を続け、再びアヒルに跨る。どつと疲労が押し寄せてきた。アフレル（単身赴任……）遠い水平線眺めつつ、アフレルはしばしボーッと佇んだ。

(394)
ワク「デルアアアアアックス！ バール！ クラッシャアアアア
アアアアー！！」 天をつんざくワクの叫びとともに、ガンバール
の右腕に装着された巨大なバールが、目玉のお化けみたいなエイリ
アンに振り下ろされた。エイリアン「ギヤアアアアアアアアア
ース！」 撃破ポイント201。

(395)
ワク「ハアハア……アイ・ウイル・ワイン！」 タケシ「やつた
ぜワク！ 自己ベスト更新だ！」 ワクは今、友達のタケシ君の家
でWEBアプリの「救星機神ガンバール」をプレイしている。タケ
シ君の家の壁は防音性が高く、思う存分雄たけびをあげることが出
来て臨場感バツグンなのだ。

(396)
タケシ「次のエンカウントは30秒後だ、今度はオレがいく！
ワク、ナビは頼んだぜ！」 ワク「オーケイ！ リープ・イット！」
救星機神ガンバールはFPSゲームの一種で、プレイヤーは巨大
ロボットガンバールのパイロットになって、迫り来る宇宙人を撃破
していくという構成になっている。

(397)
主兵装は右手の巨大なバールと、左手のレールガン。あわせてガ
ンバールだ。もちろん「頑張る」という言葉とかけてあることは言
うまでも無い。ステージによってはロケットスラスター、誘導ミサ
イル、長距離レーザーなどの副兵装も使える。また、最大3人まで

ナビゲーターをつけることが出来る。

(398)

ワク「エネミー・イズ・カミング。3・5・7」 タケシ「おつと複数敵か、胸が熱くなるぜ！」 現在、全世界に三千万人のプレイヤーがあり、それぞれ腕を競いあつてゐる。そして万が一、本当にエイリアンが侵略してきた時は、上位20名が本物のガンバールの操縦者に選ばれることになつてゐる。

(399)

ワクはこのアプリのことを最近知つたのだが、実は公表から15年以上が経過してゐる。いまだその人気は色あせない理由は、まさしくガンバールが実在してゐるためである。ワクもその仕組みを初めて知つたときは、おでこが真つ赤になるほど興奮した。パイロットに選ばれる可能性は、常にあるのだ。

(400)

このゲームのユニークなところは、年齢が低ければ低いほど撃破ポイントが高く与えられるところだ。そこには「巨大ロボットの操縦者は少年に限る」という開発者の思想がこめられている。世の中には30歳すぎのプレイヤーもいるが、加齢でポイントを稼げなくなるので、いすれは引退する。

(401)

というわけで、今を生きる少年ならば、誰でも一度はガンバールのパイロットを目指すご時世なのだ。タケシ「いっちょ撃破！」 ワク「キープ・コア・ガード！ レフト！ カミン！」 左9時方向から慣性の法則無視して突つ込んでくる円盤が、ガンバールの足を掠めた。タケシ「くつ！」

(402)

タケシはスロットルを上げ、敵の追撃を振り切る。ガンバールの脚部に装着されたブースターから灼熱色のジェットが噴出する。ブースターの燃料は最大稼動で3分しか持たない……が。ワク「ファイナルアタック・オールレディ」 タケシ「ロックオン！」 ワク&タケシ「ヒア・ウィ・ゴー！！」

(403)

メインブースターから太陽の如き閃光があふれ出た。機体の限界を超えてガンバールが飛翔する。反物質燃料の投入による、桁違いの出力が開放されたのだ。タケシ「耐えてくれ！ ガンバール！」 機体そのものを超高速の弾丸に変えて、ガンバールは残り2体の敵に突っ込んでいく！

(404)

体当たりで一体撃破し、進路変更。強烈なGに耐え切れず、バルを装着した方の腕が瓦解した。タケシ「がんばれー！」 ワク「ガンバール！」 レールガンを頂点として、流星のような弧を描いて敵に突っ込むガンバール。衝突と同時にトリガー・オン！ タケシ「シュウウウト！！」 ワク「エキサイティイイイン！」

(405)

ボロボロに傷ついたガンバールは、それでもなお、その巨体を雄々しく空に羽ばたかせていた。その背後で最後の円盤型エイリアンが爆散飛散激散する。タケシ「やつたぜ！」 ワク「ウイー・ウイ・ウイン！」 撃破ポイント198。タケシ「ちっくしょー、これでもまだワクに負けてるぜー！」

(406)

現在の最高撃破ポイントは302で、保有者はルーマニアに住む

10歳の少年だ。ガンバールのプレイヤーは世界中により、ワク達も彼らとタッグを組んで遊ぶ。ワク「グッゲーム！」タケシ「ぐつげーむ！」だからワクは頑張って英語を勉強したのだ。独学なので見事な日本英語になってしまったが。

(407)

タケシ「よし、次だ次！」一人が次のステージに進もうとしたその時、ワクにアフレルからDMが来た。ワク「アリトル・ウェイティン」タケシ「ほい？」ワクはいつたんアプリを切つてDMに集中した。こんな時間にお父さんからDM。なんだろう？ アフレル『ワクー、今ちょっとといいかー？』

(408)

ワク『ホワツツ？』アフレル『仕事が決まつたぞー』ワク『コングラツチュレイション！』アフレル『ありがとー。でも困つたことに単身赴任なんだ』ワク『タンシンフーン？』アフレル『ソロ・アサインメント』ワク『OH！』英語で言つた方が通じるつて……とアフレルは思つたり思わなかつたり。

(409)

アフレル『やつぱ、いやか？』ワク『うーん……ノープロブレム！』アフレル『そ、そうか』あつさり問題なしと言われてホツとしたような、でもちょっと寂しいような、そんな複雑な思いがアフレルの脳裏に巡つた。ワク『ホワツツ・ワーク？』アフレル『んとなー、ガンバールの開発なんだ』

(410)

ワクは興奮のあまり、その後30分くらいの記憶が吹つ飛んだ。タケシ君がいうには、部屋の壁が突き破られるかと思ったとか。防音性の高いお家にも関わらず、近所から「子供が雄たけびを上げて

「いたるさい」との苦情が入つたとか。とにかくすゞい興奮っぷりで、一時的にフォロワーが半減したくらいだ。

(411)

その日の夕方。ヨコはタケシ君のお母さんにお詫びのリプレイをしているところだった。ヨコ「うちのワクがご迷惑をおかけしました」タケシママ「いえいえ、男の子はあれくらい元気な方が良いんですね、オホホホ。我が家家の防音機能がまだまだということですよ、ウフフフ」

(412)

ヨコはリプレイを切ると、家族のみんなに向かってポツリつぶやいた。ヨコ「タケシ君とのママは、なんであんなにこだわるのかしら? 防音に」みんな一様に首を傾げたが、これはという回答を思いついた者はいなかつた。それよりもっと大事なことがある。ヨコ「あなた、就職おめでと!」

(413)

アフレル「あ、ありがとうございますお母さん」ヨコ「ううん、明日からお仕事頑張つてね。今夜はお祝いにお赤飯を炊いたのよ」アフレル「うつ」実はアフレル、赤飯があまり好きではない。特に甘い豆の入っているのが苦手で、彼の中で甘いご飯は、ご飯とすら認識されない程のシロモノなのだ。

(414)

アフレルは自分で背広のシワを伸ばしながら、正直肩身の狭い思ひだつた。明らかに妻の機嫌が悪くなつてゐる。それもそうだ、単身赴任なんて大事な事を、相談もなく決めてしまつたのだから。アフレルはDMを送つた。アフレル《ねえヨコ、やつぱり怒つてる?》『ヨコ《ううん全然。なんで?》』

(415)

アフレル『いや、僕一人で大事なこと決めちゃったからさ……。
気にしてないならいいんだ』　ヨコ『うん、別にそのことは気にし
てないわ。あなた甘い赤飯苦手だつたけど、塩豆入りなら大丈夫よ
ね』　アフレル『え？　うん、全然OKだよ！　何でも食べるよ！
だつて、明日からはもつ……』

(416)

ヨコ『秘密基地の』はんつてどんなかしらー、あなた何食べたか
ちゃんと教えてね。参考にしなきゃ』　アフレル『うん。『ご飯を食
べる時間はみんな合わせよう。食べるものは別になっちゃうけど、
やつぱりみんなで食卓囲むつて大事だと思うし』　ヨコ『ええ、そ
うね。ちゃんとしないとね』

(417)

夕食後。ノルコはワクの部屋で、ガンバールについて教えて
もらっていた。ワク「ウイ・ビート・ハイリアン・ウイズ・ガンバ
ール」ノルコ（ようわからんのう、巨大ロボットってなにかー？）
話をしたり聞いたりしながら姉弟は、晩御飯の時から両親が口を開いていないことを気にしていた。ワク「へい……」

(418)

イズミ家の「」は現在、ワクのツイートだけになっている。きつ
とパパとママはDMで話し合つてゐるんだと思う。しかし両親ともム
ツツリしている状況は、子供にとって居心地のよいことではない。
ワク『喧嘩？』　珍しく日本語DMのワク。しかしノルコに出来る
ことは、口をへの字にするくらいなものだつた。

(419)

ルイ「ノルコノルコノルコー！」 突然ルイからノルコにリップライが来た。ルイ「ちょっととちょっと！ お父さんがガンバールの研究員になつたつて本当？！ マジ本当？！」 突然まくし立てられて、ノルコはしばらくポカーンとしてしまつた。しかし考えて見れば、どのみちつぶやけない。

(420)

ルイ「ああー、もう！ ノルコと話したい話したい話したい！」 最近全然遊んでないじゃないか！」 そんなルイの熱烈ラブコールに、ノルコはほんのりと頬を赤らめる。ノルコ（そうだ！ こういう時こそお爺ちゃんのＰＣ！）ノルコはさつそくゲンお爺さんのＰＣを立ち上げた。

(421)

ゲン「私もみんなと話したいと、いつも思つてゐるよ」 ルイ「わつ、びっくりしたー。ノルコか。うん、そうだよね。ごめんねなんか無理言つちゃつてさ。でも凄いねお父さん。巨大ロボット開発なんて、地球上のちびっ子たちの憧れじゃないか」 ゲン「んー、でもノルにはそれが良くわからなくて」

(422)

ルイ「わかんない人にはわかんないのかなー、巨大ロボットのロマン！ 強くて大きくて黒光りしてゐんだぜ！」 ノルコはそういうのより、可憐で小さくて薄桃色なものの方にロマンを感じるタイプ。ゲン「そんなに凄いの？」 ルイ「うん、超すごい！ JPN 48000のメンバーになるくらい！」

(423)

それはちょっと微妙な凄さだとノルコは思つ。JPNのメンバーってそこそこオシャレで、あとは踊りと歌をちゃんと覚えれば、

案外簡単になれちゃうものだ。なんたって4万8千人もいるのだから。ルイ「なんかさ、最近ノルコの周りで色々起きるね。気付いてるか？ 今ひそかなノルコブームなんだぞ？」

(424)

ゲン「私がブーム？」 ルイ「うん、近頃フォロワー数どんどん増えてるだろ？」 確かに、ルイの言つとおり、近頃ノルコのフォロワー数はうなぎのぼりだ。ヤマオ君がつぶやいた時にドンと増えて、ゲンお爺さんのPCを使つようになつてからもジリジリと増え続けている。ゲン「ふーむ」

(425)

ゲン「そんなことよりツイート治したい」 ルイ「あはは、まあそうだよね。フォロワー数が増えたつて自分がつぶやけないんじゃ切ないよね」 ゲン「うん」 呟けないことは確かに切ない。しかしノルコは最近、呴けないことを逆に利用するようになつてきた。つまり、体よく無視できるのだ。

(426)

ゲンお爺さんのPCを使つようになつてから、知らない人にフォローされたり、リプライされたりすることが多くなつた。その多くはゲンお爺さんのフォロワーさんだ。お爺さんは本当に氣に入つた人以外はブロックしていたようだけど、亡くなつてからもそれを続けることは出来ない。不良フォロワーも増えてきている。

(427)

亡くなつてからもフォロワーが増えるなんて、ゲンお爺さんは凄い人だつたんだなどノルコは思う。でもそのフォロワーさんの中には、殆ど嫌がらせに近いリプライをノルコに飛ばしてくる人もいるのだ。そういう人たちをノルコは、呴けないことを理由にして無視

している。

(428)

ルイ「ノル?」ノルコは少し考えたのち、DM機能を使ってルイに返事を送った。ゲン『このじる、変なリプライが来るの。知らない人から』 ルイ『え、まじで? 痴漢か? !』 ゲン『ううん、何か政治みたいなこと』 ルイ『政治? 何て言われるんだ?』 ゲン『私がゲンお爺さんの正統な後継者だとか、そんなの』

(429)

ルイ『うわ、それってゲンお爺さんの熱烈な信者なのかな。迷惑な話だね。ブロックしちゃえば?』 ゲン『そのほうがいいかな?』 ルイ『うーん、その人が何て言ってくるのか詳しく知りたいな。明日、学校の後にノルんち寄つていい? 見てみたいよそれ』 ゲン『そうしてくれるとうれしいな』

(430)

ノルコは母に、明日お友達が遊びに行くことを伝えようとしたけど、呑けないので代わりにルイが伝えることに。それから母がノルコに「OKよ」とリプライを入れるという、ちょっと回りくどいことをする。ノルコはPCを閉じ、ガンバールのことですっと友達と喋っているワクをよそ目に、お風呂に向かった。

(431)

ノルコはお風呂の脱衣所に入つて扉にカギをかける。洗濯機の上に置んだパジャマを置き、そして服を脱ぎ始める。ノースリーブの夏物セーター。苺のプリントが入つたシャツ。ベージュ色のショートパンツ。水色の横じまが入つた靴下。全部綺麗に置んで、洗濯機の横のカゴに入れていいく。

(432)

全ての衣服を脱ぎ終えて、カゴを覆うようにしてバスタオルを置くと、ノルコは浴室へと入つていった。ノルコ（ふーんふーんふーん……）呑けないので頭の中で鼻歌をハミング。まずはシャワーを浴びる。こうして体を流してから湯船につかり、それから体を洗つたりするのがイズミ家の流儀だ。

(433)

ボディソープで体を洗いながら、ノルコは自分の体をチェックする。最近とにかく肉がつく。小さかつた頃のノルコはガリガリにやせていて、あばら骨とか尾てい骨とか、とにかく骨が突き出ていた。ノルコ（……お相撲さんになっちゃうー）成長期なので仕方ない

ことながら、やはりそこは女の子。

(434)

ノル口（……ハツ！）ノル口はお風呂場にT字が設置されることを思い起こして、一瞬息を飲んだ。でもすぐ、それがなんのこつけやと思い直す。お風呂場で自分の体をしげしげと観察している女の子なんて、はしたなすぎて家族にも知られたくない。でもT字にはそこまでは記録されない。

(435)

イズミ家のお風呂T字には色んなことが記録される。誰がどれだけお湯を使ったか、何のお湯に何分つかったか、お風呂のフタはちゃんとしたか。さらには、どんな歌をハミングしたかとか。どれも資源の有効利用と、家族の健康管理のために欠かせない情報だ。そのためノル口は、先ほど監視されているような気分になったのだ。

(436)

ノル口（お風呂にはT字があるけど、トイレにはT字がない。不思議）体を洗い終わったノル口は、再び湯船につかりつつそう思う。お風呂とトイレの間に何か違いがあるのか？ わかるような、わからないような。しかしどにかく法律で決まっている。トイレにT字を置くことは現在タブーなのだ。

(437)

ノル口（そもそもトイレにT字を置いてどうするかー？）お小水の量でも調べて記録するのだろうか？ 後はいつ誰が何分利用したかとか？ そんなことはまっぴら御免だと、ノル口は素直に思う。もつともらしい利用目的としては、緊急時の通報用だが、それだって別にT字でやる必要はない。

(438)

ノルコは顔を湯船に半分沈めてブクブクしつつ、改めてT-Lを設置することの意義を考えた。一番重要なT-Lの機能は、その場でなされた会話や独り言を記録するというものだ。記録しておけば、あとでゆっくり状況を省みることが出来る。必要があれば、かなり過去まで遡って検討することができる。

(439)

次に、その場に人や物がどれだけ存在したかを記録することだ。人々がお互いの行動を把握しやすくなり、亡くし物をした時もすぐにT-Lをたどって発見できる。誰もいない場所で一人ぼっちになつても、かつて人々がそこで活動していた時のT-Lを眺めたりして暇をつぶすことができる。

(440)

いまやT-Lは、生活に欠かせないものという次元を超えて、空気や光のように、いく当たり前に存在するものになつてゐる。それがトイレだけには適応されていないのだ。トイレにT-Lを設置しないことで、人々は一体何を守つてゐるのか？ 改めて問われてみれば、なんとも答えようもないことだ。

(441)

こんな難しい問題を、まだ小学5年生のノルコに解けるはずも無く、しかも何だかのぼせてきた。ノルコ（そろそろあがろう……）
そうノルコが思つたとき、唐突に一通のリプライが飛んできた。
ミギノウエ「この間リプライした件、考えてくれたかな？ ノルコ
ちゃん」 またきた。ノルコは風呂場の中で一人、臨戦態勢をとつた。

(442)

しかしノルコは、いつも通り無視することにした。ミギノウエー君はミスター・ゲンのひ孫さんだ。そしておそらくは彼と似たポリティクスを持っている。と僕は推測する。やはり君は、ゲンお爺さんの意思を継いで、政治の表舞台に立つべきだし、それが出来る人物だと僕は思う」

(443)

ミギノウエーという人物は、トウキヨウのアカサカに住んでいる男の人で、年齢は34歳。職業はプログラマーとなっている。彼はノルコに対し「政治の表舞台に立て」という一貫した主張を続けてい る。ノルコ（……一体何なんだろう?）さらに困ったことに彼は、ゲンお爺さんの相互フォロワーなのだ。

(444)

ゲンお爺さんがフォローしている（生前の話だが）ということでのノルコはこの人を信用したいとも思っている。しかしその主張が「政治に首をつつこめ」だというのは、いかにも胡散臭い。ノルコは逆に色々質問してみたい気分だったが、いかんせん咳けない身。それ相手も気にしていいらしい。

(445)

ミギノウエー「君が咳けない病気だつてことは良くわかつてゐるし、別にそれで全然かまわないんだ。ただ僕の話を聞いてくれさえすれば。その方が僕らにとつても都合が……いや、特に深い意味は無いんだよ、ゲフフンッ」このよつた含みのある言い回しをちょくちょく使ってくることも、ノルコをイラッさせた。

(446)

ミギノウエー「改めて言つておくよ。君にはゲンお爺さんの意思を継ぐ資格と、そしておそらくは義務がある。この国の国会議員は、

全国民による相互投票によって、法案ごとに選出される。そこに年齢制限は存在しない。つまり小学生の君でも国会での議決投票に加わることができるんだ」

(447)

ノルコ（それは知っています！） 体内ツイッターの普及によって、選挙システムも変化した。国民は、自分達の知る人の中から「この人が国會議員だつたらいいのに」と思う人に投票することができる。しかし選出されるのは投票数の多い人ではなく「投票関連度」の高い人だ。これは少しわかりにくい。

(448)

例えば、ノルコがルイに投票し、ルイがヤマオに投票した場合、ノルコは“ヤマオを支持するルイ”を支持したことになる。つまり、ルイとヤマオの両方に投票したことになり、票が累積されるのだ。この場合、ノルコ〇票、ルイ1票、ヤマオ2票という形で、票が振り分けられることになる。

(449)

もし、その状態でヤマオがノルコを投票すれば、そこにノルコ・ルイ・ヤマオのループが出来上がる。こうなった場合、票は累積されず、それぞれ1票として処理される。この操作が現在の日本国民の間で行われるわけだ。つまり理論上の最大獲得票数は（全人口 - 投票棄権者数）となる。

(450)

ノルコ（だからって私が国會議員に選ばれるわけない、常識的に考えて） ノルコ達は、友達同士で投票しあつたりするが、結局ループがたくさんできてしまうので、大した票にはならない。ミギノウエー「果たしてそうかな？」 ノルコ（！？） ミギノウエー「おっ

と、なんでもない。ゲフフンツ「

(451)

ノルコ（今の、頭の中を覗かれた感じは……） ホウさんみたいだとノルコは思った。そしてその仮定が意味するところは。ノルコ（GPTL！？） ホウ以外にもGPTLを利用してしている人がいてもおかしくない。ノルコは愕然とした。このミギノウエという人はきっと、私を利用して政治を動かそうとしているんだ、と。

(452)

ノルコはお風呂を出るにした。そしてパジャマに着替えている間中『何も考えないこと』に徹した。思考を読まれてしまうのなら、何も考えなればいい。ミギノウエも潮時と思ったのか、ピタリとリプライを止めた。今の世の中、夜遅くに偏執的なリプライをし続けても、何ひとついいことはない。

(453)

ノルコは脱衣所を出た後も何も考えなかつた。何も考えずお風呂上りのスピードリンクを飲み、自室の絨毯にコロコロをかけ、ランドセルにノートとマイ箸を入れ、机の上のピヨッターをジーッと見つめ、洗面所に行って歯を磨いた。ノルコ（思つたより簡単だ何も考えないの。あ！） 考えない考えない。

(454)

何も考えないようにしていたノルコは、家族に話しかけられたら何かしら考えなきやいけなくなるな、なんてことも考えず、まるで夢遊病に罹ったようにフラフラとダイニングに歩いていつて、食卓の椅子に座つた。向かいの席にアフレルが座つていた。テレビがついていて、『道講座をやつていた。教育チャンネルだ。

(455)

ノルコ（ ） ノルコはもつまつたく完全に無思考の境地に達していた。自分が何も考えていなことも気付いていなかつた。一方アフレルは、テレビの方を向いてはいるが、目の焦点はそこではなく、遙か彼方だつた。何か物凄い勢いで思考しているようにも見えたし、ノルコと同じく何も考えていなようにも見えた。

(456)

そのまましばし時が流れた。テレビだけが、ダイニングの沈黙を癒していた。テレビ「弓は強く握ってはなりません。人差し指と親指の股に軽く気持ちをこめ、小指の付け根を締めます。俗に卵握と呼ばれ、ちょうど生卵を手に持つくらいの力加減です。強く握ってしまうと弓が返らず、矢勢が弱まり、狙いも定まりません」

(457)

テレビ「執り掛け、打ち起こし、引き分け。一連の所作の中でも常にこの卵握を意識します。何度も繰り返し練習し、意識しなくとも出来るようになります。親指が的に向かつて伸び、角見が十分に利いていれば、離れの際に弓がクルリと手の甲側に返ります。以上が『手の内』の作り方です」

(458)

テレビ「手の内を隠すという言葉がありますが、それは弓道の手の内からきていると言われています。手の内の作られ方は射手の数だけあるといわれ、弓道において最も工夫がなされる個所です。日々の鍛錬の中、何年もかけて作る大切な手の内ですので、そうやすやすと人に教えるわけにはいかない訳ですね」

(459)

何も考えていないノルコは、もちろん弓道講座の内容など頭に入

つていなかつた。目の前でアフレルがボーッとしていることも頭になかつた。今、ノルコの頭にあるのは、真っ白な心地よい海だ。真っ白な海水が、真っ白なしぶきをあげ、真っ白な砂浜に押しては引いている。ザザーン、ザザーン。

(460)

アフレル(…………あつ) アフレルがノルコの存在に気付いた。アフレル(いつからそこに……?) 娘は弓道講座を熱心に見ていた。まるでテレビの中に溶け込んでしまつたのではないかと思うくらい、熱心に。アフレルはいつか娘が弓をやりたいと言つてきたら、喜んで了承してあげようと思つた。

(461)

ヨコ「あなた、お風呂は?」 寝室で布団を敷いているヨコがツイートした。家丁しが一段下がり、その上にヨコのツイートが書き加えられる。アフレル「あつ、うん、今入る!」 アフレルはノルコを横目にチラつと見ると、せかせかとお風呂に向かつていった。ヨコが寝室で、一人静かにため息をついた。

(462)

妻がムツツリとした様子で「別に怒つてないわ」という時は、間違ひなく怒つている。事実ヨコは怒つていた。夫が勝手に単身赴任を決めたことではなく、一番最初にワクに相談したためにだ。仮にも一家の大黒柱が、まだ10にもならない息子に、就職に關する相談をしたのだ。

(463)

その事実はヨコの美意識に反していた。アフレルの美点は、いつも純真で裏表がないことだが、しかしそれは時として「いくつになつても大人にならない大きな子供」という印象をヨコにもたらす。

先ほど「あつ、うん、今入る！」だつて、まるで言葉を覚えたばかりの子供のようだ。

(464)

単身赴任のことも、いつそ夫の独断で決めて欲しかつた。なんなら家族」と引越したつて良かつた。「オレは秘密基地の研究員になることにした、だからお前達もついてこい!」男ならそれくらいの強引さや『氣概』があつてもいいんじゃないかとヨコは思う。そういうなきや張り合いがない。

(465)

しかしそれを今の夫に求めることは、たぶん難しいだろ? ヨコ(……あらやだ!) 私は今いつたい何て考えた? 今の夫にはつて思つた? 夫は今も昔もこれからも、あの人だけのはずではないの? そう思いつつも、ヨコの脳裏には、先日ナンパをしてきたイタリア風の青年の面影が浮かんでいた。

(466)

あなたがガンモドキを忘れるだろ?」とを予感しておりましたので。 それって一体どんな予感なの? ヨコは今日までに何度もそう問い合わせたが知れない。確かに変わったナンパ術だ。しかし重要なのは形ではなく、思いの強さだ。ヨコ(いけない、疲れてるせいか、おかしなことを考える……)

(467)

ヨコは早めに寝てしまおうと思つ。寝る前に炊飯器のタイマーを確認しようとキッチンに向かつた。通りがけのダイニングにノルコがいた。ヨコ「あら? ノルコな見てるの?」ノルコは『道講座が終わったあとに「これから番組予定」を見ていた。恐ろしく熱心に。まるで田がテレビになつてしまつたかのように。

(468)

ヨコ「??」 ヨコは何がそんなに気になるのだろうと首を傾げた。何かとても重要な番組でも予定されているのだろうか? いや、そんなことはない。ヨコ「……えつ?」 ノルコが唐突に椅子から立ち上がった。そして耳たぶ操作でテレビを消す。まるでゼンマイ人形のようなカチカチとした動きだった。

(469)

ヨコは変だなと思った。しかし出来ることは一つしかなかつた。ヨコ「ノルコ」 ノルコは反応しない。ヨコ「ノルコ!」 強く言つて肩をさすつた。ノルコがその場でビクッと跳ねた。ヨコ「どうしたの?」 ノルコはしばらく口をポカーンと開けて、それから何かに気が付いたように首を横にプルプルさせ始めた。

(470)

ノルコはその後すぐに走って出て行つてしまつた。ヨコはキッチンでオロオロとした。どうしちゃつたの私の子。明日お医者さん? それとも今すぐ? しばらくしてヨコにリプライが来た。ゲン「おふろでのぼせた~」 そのツイートで、ヨコの胸中の不安がスッと溶けた。ヨコ「もうノルコつたらー」

(471)

ノルコもノルコでホッとした。変な子と思われてしまうところだつた。やはり人間、何も考えないで生きて行くのは難しい。ノルコ(もう寝るから-) ノルコは自分の心を覗いているかも知れない誰かに向かつてそう唱える。そして布団をかぶつて電気を消すと、すみやかに夢の世界へと潜り込んだ。ノルコ(おやすみ!)

(472)

きーんこーんかーんこーん。朝の予鈴がなつた。遅ればせに登校してきた子供たちが、足早に教室へと向かっていく。ジェネ「うーん……」保健室の一角では、机の上で保健医のジェネ先生がノルコのバイオデータをチェックしていた。ジェネ「なかなか治らないわねえ……ノルちゃんのツイート」

(473)

（473）
ジェネ先生はウェーブがかつたブロンドをさりげなくかき上げ、淹れたばかりの特濃コーヒーを口に運ぶ。近ごろ蒸し暑い夜が続いて寝不足ぎみなのだ。ジェネ「バイオロジーネットワークに異常はないし、もういつツイートが戻ってもおかしくない状態だけど」そう言つてジェネ先生はうーむと考え込む。

(474)

（474）
ジェネ「もしかして、つぶやき方を忘れている? 何かきっかけみたいなものが必要?」しかしジェネ先生には、そのきっかけの作り方が今ひとつ思いつかない。ジェネ「困ったわね。そのうち自然にあるのかしら?」とんとんとん。ドアがノックされた。ジェネ「はーい、どうぞー」

(475)

（475）
クオ「失礼するおつ」入ってきたのは「眠りのウイスパー・ボイス」の二つ名を持つクオ先生だった。ジェネ「あら、どうしたんですか?」クオ「いやあ、そのお。ちょっと今朝からお腹の調子がよくないんだお。何かいい薬ないかなと思つておつ」ジェネ「ふ

わああ～～。ちょっと待つて下さいね

(476)

生あくびを噛み下しつつ、ジェネ先生は棚から整腸剤を取り出した。ジェネ「はい、どうぞ」 クオ「どうもなんだおつ」 クオ先生は薬を上着のポケットにいれると、ぼんやり窓の外に目をやつた。クオ「今日はいい天氣ですね」 ジェネ「ええ、本当にー。うつらうつら」 ジェネ先生、今にも寝そう。

(477)

クオ「今週いっぱい天氣がいいらしいんですよ。それでその……今度の水曜の祝日、もしお暇だったらお……」 ジェネ「こつくり、こつくり」 クオ「一緒にパラグライダーなどやりにいきませんかおっ、おっおっおっ」 クオ先生は額に汗だったが、ジェネ先生は鼻から ZXZマークがもれていた。

(478)

きーんこーんかーんこーん。お昼休みの予鈴がなる。ジェネ先生が催眠術のような眠りから覚めたころ、ノルコ達のクラスでは給食の準備をしていていたところだった。ヤマオがトレイを渡し、ルイが白飯をよそい、ノルコがつみれ汁をつぎ、レイタがだし巻き卵をのせ、リンが金平と佃煮を添え、カズノリが牛乳を配る。

(479)

給食の準備ができたころ、突然レイタがノルコに言つてきた。レイタ「だし巻きやるよ。好きだろ?」 そういうつてだし巻き掴んだトングをググイと突きつけてきた。ノルコはオタマを持ったままボカーン。ノルコ（……いつたいどういう風のふきまわし?） しかし、だし巻きはしつかり頂いた。

(480)

レイタ「……悪かつたな、いろいろ」 そう気まずそうに言い捨てる。レイタは自分のトレイを持って行ってしまった。ルイ「なんのかな？」 いまさらノルコは首を傾げつつ、自分の分のみれ汁をついで席へ向かう。そして全員着席し「いただきます」をする段取りとなつた、その時……。

(481)

レイタ「ちょっとまつた！」 レイタがいきなり立ち上がり立上がつて叫んだ。教室にどよめきが走る。レイタ「今、この場でガンバールやつてるやつ、スタンダップ！」 申し合わせたかのように、クラスの半分以上が立ち上がつた。ルイもなんとなく、つられて立ち上がつてしまつた。

(482)

ルイ「レイタあ？」 レイタはルイの怪訝な視線も気に留めず言う。レイタ「俺は……俺は今ほど嬉しいと思ったことはない！」 といつて胸の前に握りこぶしを作る。レイタ「全員、ノルコに向かつて敬礼だ！」 ぱぱぱつ！ いくつもの敬礼が、突然ノルコに向かつてなされた。ノルコ（な、なにごと！？）

(483)

ノルコばんざーい！ ノルコのパパばんざーい！ 戦え我らのガンバール！ 地球の未来に光あれ！ 謎の唱和斎唱が、ノルコを中心としてなされていた。ルイ「……そういうことか」 レイタ「俺、ノルコのクラスメートでほんつとうに良かつたぜ！ 友達の父さんが秘密基地の研究員だなんて、まじ最高だぜ！」

(484)

レイタ「なあノルコ！ 俺たち友達だよな！ な！ 食いもんを

交換する仲だよな！ 大親友だもんな！」 そしてノルコの手をとり強制ハンドシェイク。レイタ「で、今度ノルコの親父さんの職場に行つてみたいんだが」 「と、そこまで言つたところで、ノルコのミドルキックが彼の尾てい骨に炸裂した。レイタ「あ”――！」

(485)

給食後、ノルコ達は会議を開くことにした。例の迷惑リプライについてだ。放課後ノルコの家について、ゲンお爺さんのP.C.D「ミギノウエ」について調べるのだ。レイ「犯人はミギノウエってやつなのか、変わった名前だな」 カズノリ「しょ、小学生に政治の話をけしかけるなんて。ふ、フトドキな人だよ！」

(486)

ノルコの席を囲むようにして、ルイ、リン、カズノリが座つている。少し離れた窓際では、ヤマオがボーッと外を眺めている。レイタは体育館だ。テコンドーの修行をするらしい。リン「ミギノウエ……さん？ なんだかどこかで聞いたような？」 ルイ「えっ、どこで？」 リン「どこでつていうか……なんだかいつ？」

(487)

カズノリ「あ！」 秀才肌のカズノリ君が何かに気づいたようだ。そしてヤマオの方を振り向いた。カズノリ「や、ヤマオ君の。よ、四番目のツイート」 ノルコ（…） ルイ＆リン「あ！ そうだつた！」 そして4人の視線がヤマオに集まる。ヤマオ「……」 ヤマオの切れ長な目と福耳が、ゆづくづくこちらを向く！

(488)

一同 ヤマオはしばし首だけをこぢらを向けた状態で佇み、そして再び窓の外に視線を戻した。ルイ「なあヤマオ。まさかとは思うけど、何か関係あつたりするか？」 ミギノウエって人と？」 ヤマ

オは両腕を組むと、やや上方を見やつて考え込んだ。そしておもむろに首を振る。知らないということだ。

(489)

ルイ「そうだよな、ただの偶然だよな。『めんなヤマオ』 ヤマオは手の平をこちらにかざし（問題ない）と伝えてくる。カズノリ「な、何はともあれ、げ、ゲンお爺さんとの、か、関係を、し、調べないと、ねつ」 政治問題とかに強そうなカズノリも、今日はノルコの家に行くことになつていて。

(490)

やがて5時限目の始まりを告げるチャイムがなつた。ノルコ達は席に戻つて準備をする。タッチパネルになっている机の天板を綺麗に拭いてノートを起動し、耳たぶクリックで教科書を表示、タッチペンを机の隅に置いて準備完了。ノルコ（……ん？） ヤマオがノルコの方を見ている。なんだろう？

(491)

先生が教室に入つてきて、電子黒板の落書きに黒板消しをかけていく。その間中、ヤマオはジッとノルコを見つめていた。ふくよかな顔の輪郭に埋もれる切れ長な瞳。その瞳がさらに細く糸のようになる。極限にまで収斂されたその視線は、ノルコの網膜さえ貫いて、まるで頭の中に直接メッセージを伝えてくるかのようだった。

(492)

「起立！ 礼！ 着席！」 日直の号令とともにノルコはヤマオの視線から開放された。ノルコは席に着きつつ思つ。ヤマオ君は私に向けて何か重要なことを伝えてきたのでは？ 実はミギノウエーっていう人と関係がある？ ヤマオ君とミギノウエさんは、実はやつぱり知り合いなのか？

(493)

考えるほど謎は深まるばかりだ。ノルコ（問題が山盛りだわ！）
つぶやけない病気、ミキノウエの政治勧誘、秘密基地員になつた
お父さん、ナンパされたお母さん、ホウトGPT、ヤマオの意味
深な視線……。ノルコ（もう何が何やら！）　まったく思考がまと
まらない。ノルコはひたすらタッチペンを回し続けるのだった。

(494)

放課後になると、一同はまっすぐノルコの家に向かう。女子3人の中に一人のカズノリ、それとなくヤマオ君をさそつてみた。すると以外なことに、二つ返事で了承してくれたのだった。ルイ「ヤマオが放課後寄り道つて珍しいな！」 そう、ヤマオが誰かの家に遊びに行くなんて滅多にないことなのだ。

(495)

ノルコは家に着くと、心の中で（ただいまー）と言しながらドアを開けた。カズノリ「お、おじやましますつ」 ルイ「こんにちわー」 リン「おじやまですつ」 ヤマオ「…………」 母のヨコはダイニングから顔をのぞかせつつ、ヨコ「はいはー、いらっしゃー。ゆづくじしていってね！」

(496)

ヨコは子供たちが一階に上がっていくのを見送った後、お菓子のジュークの用意を始めた。ヨコ（ヤマオ君つてああいう子だったのね。なんて大人びてるのかしら、まだ小学生なのに） 玄関先でのお辞儀の仕方なども堂に入つていて、夫のアフレルにも見習つて欲しいくらいだった。

(497)

ヨコ（ヤマオ君のおうちにはお父さんがいないのよね……確か）
ヤマオは母と二人暮らしである。父親はヤマオが生まれてまもなく、まさに煙のように消えてしまつたらしい。しかも、生まれてきたヤマオはなかなか言葉を発しなかった。この当時のヤマオの母の気持

ちは、想像に余るなとヨコは思つ。

(498)

言葉を発しないヤマオは、当然ながら知能障害が疑われた。しかし3歳時の知能テストの結果、ヤマオの知能指数は平均を上回っているということがわかつた。事実、ヤマオは殆どと言ってよいほど母親の手を煩わせなかつた。それどころか、気落ちしがちな母を慰めるような行動さえ見せたのだった。

(499)

EQ・IQともに人並みはずれた天才児。しかし滅多につぶやかない。ヤマオはある種のサヴァンなのではないかと考えられ、発達心理学や児童心理学に関わる人達の目を引くこととなつた。ヨコ（よく考えれば物凄い子だけど、それでもノルコのお友達に変わりはないわ） そうしてヨコはノルコの部屋にお菓子を運んでいった。

(500)

子供達はお菓子を持ってくれたノルコの母親にお礼を言つと、さつそく例のPCを起動させた。ルイ「これがPCってやつか！ なかなか使えるようにならないな」 リン「このカリカリって音なんだろ？」 カズノリ「た、たぶん。き、記録装置が、う、動いてるんだよつ」 ヤマオ「……」

(501)

PCが起動すると、すぐにツイッター用のブラウザを立ち上げる。カズノリ「む、む、僕らのツイッターと、に、似てるね」 ルイ「だな。これでツイートをどんどん逆登つていけば、いずれミギノウエツて人のリプライに行き当たる」 リン「でもどれだけ逆登ればいいのかな？ 下手すると明日の朝までかかるかも」

(502)

一回どひしたものかと首をひねつたその時、ヤマオの瞳がキラーと光った。ヤマオはノルコの肩を軽くつつくまるで「ちょっとPCいじってみていい?」とでも聞くよひ。ノルコはウンウン首を縦に振る。ヤマオはさつそくマウスを片手にPCを操作はじめた。カズノリ「や、ヤマオくん……すごい」

(503)

ヤマオがやつたことは至極単純な操作だった。ゲンとミギノウエの名前、両方を含むツイートの検索をかけたのだ。ルイ「そうか、この手があつたか!」 リン「こんなのは普段やらないから、わからなかつたねー」 誰かさんと誰かさんが何を話していたか、なんてことノルコ達の世代は気にしないのだ。

(504)

カズノリ「さ、流石だね、や、ヤマオ君。尊敬するよ……」 そういう喋っている間にも、ノルコはゲンとミギノウエの会話をどんどん読んでいった。最初の方は、ゲンお爺さんが亡くなつた時の御悔みのツイート、その下が闘病中の励ましツイート、その中に、どうも政治っぽい話題がチラホラ混ざつてこる。

(505)

ミギノウエ「@ゲン…ああ、人類はまたかけがえのない人を失なうんですね。ああ……」冥福を「ミギノウエ」@ゲン：しつかり！ 気をしつかり持つてくださいミスター！ 僕はもっと貴方と話たいことがあるんです！」 //ミギノウエ「@ゲン：落し物管理条例法案が否決、やりましたよ！」

(506)

ルイ「なんだか普通に親しかつた感じだね」 ゲンお爺さんが亡

くなつた時、ノル口はまづからいだつたからよく覚えてないのだが、でもその時にミギノウエ氏とこんなやりとりがあつたなんて、正直おどろきだつた。ノル口（私に政治の話ふつてくれるのも…わからぬもないかな？）

(507)
一同はさりに古いシティーを読んでいく。ゲン「@ミギノウエ：落し物管理条例案の『管理』は『監視』の婉曲表現だと私も思います。紛失物の情報を第三者機関により一元管理し、落とし主に確實に返却する。聞こえは一見よいが、要是特権団体による情報の独占であり、一方的社會監視の一助となるだらう」

(508)
カズノリ「な、なんとも本格的、的な議論だ、ね」 リン「落し物ひろつた時つて、たまに返す返さないでもめるんだよね」 ルイ「この『監視』って言葉が重要なんだな？」 ノル口はウンウンうなずく。監視とこう言葉が、世の中を底なしのドロ沼に引きずりおるすのだと、お爺さんばよべ言つていた。

(509)
ゲン「@ミギノウエ：もう一〇〇時間くらいぶつ続けてPCの前におるな？ 散歩でもして口に当たつてきなさい」 ミギノウエ「@ゲン・うわなぜバレタwww」 ゲン「@ミギノウエ：わしが何年ツイッターやってると思つちよるwww」 ミギノウエ「@ゲン：ちよつとコンビニ行つてきますwww」

(510)
ミギノウエ「@ゲン・ゲンさんは、宇宙人の存在つて信じてるですか？」 ゲン「@ミギノウエ：いてもおかしくないじやろ」 ミギノウエ「@ゲン・侵略とかしてきたらどうします？」 ゲン「

@ミギノウエ・全力でバトる」ミギノウエ「@ゲン・えつ…
ゲン「ミギノウエ・血の氣の多い奴等にはそれが一番」

(511)

ルイ「ずいぶん仲よしさんだね。Wの連発にはちょっと時代を感じるけど。ゲンお爺さんはどんなきつかけでこの人と相互フォローになつたんだろうね」 リン「ゲンおじさん、相互少なめ」 カズノリ「あ、相手を、え、選んでたんだ、ね。な、何かき、基準があつたの、かな?」 ノルコはしばし考えた後、キーボードに手をかけた。

(512)

ゲン「何となく良い感じのする人をフォローしてた」 カズノリ「な、なんとなく?」 ゲン「言葉の汚い人はフォローしなかつた」 ルイ「まあそれはあるね」 ゲン「神秘的な感じのする人が好き」 カズノリ「な、なんでそんなこと知ってるの?」 ゲン「むかし好きな女の人のタイプを聞いたの」

(513)

ルイ「うんまあ、ツイートみてる分にもそれとなくわかるかな。ノルコのお爺ちゃんつて、きっと風変わりな人に好かれるタイプなんだ」 言われてみれば、ミギノウエという人はどこか理解不能なところがある。自分だけベラベラ喋つて、相手の返事を待つことなく消えてしまうあたりなんか。本当に何を考えてるんだろう。

(514)

ルイ「頑張つてT-L逆登つてみよう」 それからノルコ達はひたすらマウスをカチカチやつてT-Lを過去へと逆登つて行つた。ノルコ（みんなお菓子食べるの忘れない?）ノルコに促されて気づいたみんなは、マウスを交代でカチカチやりながらボッキーやら揚

げ団子やらをつまんで食べた。

(515)

ヤマオ「…………」ヤマオはジュースのストローを咥えたままジーッとディスプレイを見つめている。マウスを必死に力ち力ちやつてるのはカズノリで、だんだん慣れてきたためか、Tレは結構な速度で流れしていく。しかしヤマオはその一文一文をしつかり読んでいるようだった。ノル口（読めるの？！）

(516)

ルイ「よし！ 行き着いたぞっ、みんな！」一同、PCの前につめよう。【投稿日時：2090年8月2日12時34分】ミギノウエ「貴方の考える愚民思想の問題点とは？ RT@ゲン・とかく大抵の発案者は愚民思想の持ち主で自分だけが賢いとおもつとるこれが一人のファーストコンタクトだった。

(517)

ルイ「……な、なんだ?」一同沈黙 カズノリ「に、人間のほとんどは愚かだから、だ、誰か頭のいい人が、し、し、指導してあげなきや、い、いけないって考えだけど……」ルイ「そうなのか? なんだかムカツとする考えだな。アホはアホなりに考えてやつてるしんだし」 リン「うーん、私は政治の話とかさっぱり」

(518)

カズノリ「つ、続きを読んでみよ」 カズノリの提案で一同PCに目を戻す。思いがけないキーワードに、みな少々恐縮している。ゲン「特権集団による情報の独占は、往々にして公共の利益に反する決断を生む。もつとも、これは一般論だが。RT@ミギノウエ：貴方の考える愚民思想の問題点は?」

(519)

ミギノウエ「@ゲン：個人の管理能力を超えた今日の情報氾濫が、市民生活を混乱させている事実があります。それを防ぐための一元管理は、検討されて然るべきでは?」 ゲン「@ミギノウエ：その混乱を乗り越えることでのみ人は進歩する。一方監視が作る仮初めの平穏は、いずれ利権の温床となり社会を蝕むだろ」

(520)

ノルコ（ゲンお爺さん、なんだかとつても難しいお話してる……）
ノルコはそう思つたが、その一方で。ノルコ（……でも何となくわかる気がする）とも思つた。カズノリ「ど、どうやらミギノウエさんは、げ、ゲンお爺さんのポリティクスに、興味を持つて、り、

リプライしてきたんだね

(521)

ルイ「いやまてよ、何となく対立してゐるよつに読めないか?」
リン「うんっ、私もそう思つ!」そして一同はさらに読み進める。
ミギノウエ「@ゲン：ではプライバシー問題はどうします? バイ
オツイッターは個人情報の秘匿性を奪いました。取り戻すにはセキ
ユリティー団体による管理が必要です」

(522)

ゲン「@ミギノウエ：プライバシーという概念は不变ではない。
時代によつて変化する。現在のような相互監視社会において、プラ
イバシーは一種の贅沢品であるし、過剰な保護はかえつて猜疑心を
深め、人々を孤立させる」ミギノウエ「@ゲン：隠しが人々を
孤立させると言つのなら、いずれ人は服すら着られなくなります」

(523)

ルイ「そりやただのあつけじゃないか! やつぱちょっと変だ
ぞこのミギノウエつて人」リン「服は着ないわけにいかないよ…
…」カズノリ「ん? ん?! つ、次のツイート!」ゲン「@
ミギノウエ：世の中には、一家そろつてスッポンポンという人々も
おる。いづれ人類がみなそうなる可能性は否定できまい」

(524)

ノルコ(……確かにいるけれど) いわゆる裸族と呼ばれる人々
であるが、まさかそんな切り替えしをするとは。みんな、自分なら
こんな質問された時点で無視を決めてしまうだらうと思つていた。
ルイ「凄いね、ノルコのひい爺さん」リン「で、でもすっぽんぽ
ん?! えー?」

(525)

ノル口（そういえば……）以前、こんな事件があつた。プライバシーの保護を訴える過激な人たちが、無作為に抽出した人々の入浴シーンをネット上にばら撒いた。そうすることで、人々のプライバシー意識に火をつけようとしたのだ。今の世の中、その気になればこんなことも出来てしまうのだ、と。

(526)

無論、隅々まで相互監視の行き届いたツイート社会において、彼らの行動は見逃されるものではなかつた。すみやかに晒し上げられ、社会的な制裁を受けた。件の入浴シーンは、発信元から末端までくまなく検索され、完全に消去された。全てバイオツイッターを使ってたどるので、労力はそれほどかからないのだ。

(527)

晒された側の人達は「別に恥ずかしいとかはない」と主張。晒そくとする側が逆に恥を晒して憲りるという、相互監視社会らしい決着がついた。ルイ「服を着ることが常識じゃなくなるつて、あるのかな？」　リン「あ、大昔はみんな裸だつたんだろうけど」　カズノリ「つ、続きを読む……」　少年は顔を赤らめていた。

(528)

ゲン「@ミギノウエ…」う考えればどうか。生まれたままの姿を保護すべき個人情報と捉え、裸になつたり裸を表現したりしてはいけない、という決まりを作つたとする。それで個人のプライバシーが守られるのだろうか？　私たちはただ『裸を表現する自由』を特定団体に奪われただけではないだろうか？

(529)

ゲン「@ミギノウエ…決め事というものは、だいたいが人から自

由を奪う。バイオツイッターによる情報拡散は自然現象として不可逆であるから、それを制限したら際限がない。世の中は際限なく窮屈になり、行動は自ずから決定され、人々は自由意志を失うだろつ。それは良くない事と私は考える」

(530)

「ミギノウエ「@ゲン：貴方は今、自由意志という言葉を使われましたが、この相互監視が隅々まで行き届いたツイッター社会にだって、はたして自由意志があるのかどうか。僕たちは今、裸を表現するどころか、夕食の献立を考えるにしたって、世の中の目を気にしなければなりませんよ？ 行動は自ずから決定されつつある」

(531)

ゲン「@ミギノウエ：自由とは何もかもが思い通りになることは違うと私は思う。問題は相互監視ではなく一方監視。一方監視の行き着く果ては独裁であり、果ては人類の単体化だ。そもそもバイオツイッターが無ければ監視はないのか？」

(532)

ミギノウエ「@ゲン：少なくとも昔は、夕食時の会話まで衆人監視の下におかれることはありませんでした。今はその気になれば地球の裏側のご家庭の内情まで瞬時に調べられる。果たしてこのままでいいのでしょうか？ 相互監視下における自由は気球みたいなものだ。全ては世の中の空氣次第です」

(533)

ゲン「@ミギノウエ：人は本質的に、衆人監視の下で生きるものだと私は思うが……。自由を気球と比喩することは、言ひえて妙と思う。バイオツイッターが無くとも、近くに一人でも他者がいれば、それは監視されていると同じこと。我々はみな、相互監視という名

の空氣に漂つ、一隻の氣球なかもしれん

(534)

ゲン「@///ギノウエ・少し、昔の話をじょ。私はかつて完全なプライバシーを保つた生活を体験したことがある。完全な個室で一人で暮らし、外に出るときもネットに出るときも、完璧な匿名性が保たれていた……と思っていた。実際は、監視カメラや通信ログなどで、常に誰かが監視していたわけだが

(535)

ゲン「@///ギノウエ・自由気ままと実感できる日々も、やがて終わりが来た。バイオツイッターの爆発的な普及によつてだ。推進派と反対派が激しくせめぎ合い、血生臭い事件もおきた。しかしその抗争は不思議な構造をもつていた。推進派も反対派も、『個人の自由を守る』ことを旗に掲げていたのだ」

(536)

ゲン「@///ギノウエ：推進派は相互監視を広めることで世の中を公平にしようとした。隠し事や不正が出来ない社会でこそ、人は真に自由になると考えた。反対派は、個人が内面的な秘密を持つ事こそが自由であるとし、それを守ろうとした。本音と建前を、外向きと内向きを、あくまでも仕切らうとしたのだ」

(537)

ゲン「@///ギノウエ：まさしくそれは、自由とは何かを定義するための闘争だった。正直、いまだ私には判断がつかない。みなバイオツイッターは便利だからと言つて導入しているが、私は確かな判断がつくまではと導入していない。この歳になつてもまだ、自由とは何なのかわからないのだ」

(538)

ゲン「@ミギノウエ：ただ一つ、確信を持つて言えることが一つだけある。それは、情報の拡散は不可逆であるということだ。どんな隠し事もいつかはばれる。完全なセキュリティーは存在しない。いずれ遠い時の彼方、私達は魂だけの姿になつて生きているやもじれん。ただ一つの、情報塊として」

(539)

ミギノウエ「@ゲン：そこが幸せな場所なのか、僕にはわかりませんね。出来ればそくなつて欲しくないとさえ思います。それは自由というより単体化。情報拡散の終局は人類の単体化ですよ、そんなの良いわけがない……いやでも、情報収束の終局もまた人類の单体化？」

(540)

ゲン「@ミギノウエ：まだ人間はそこまで極端な状況はないよ。何のためにトイレがあると思つてているのかね。一人で思索にふけるくらいの自由は、まだいくらでも残つている。なんなら部屋のT-Lを外すなり、いつそログオフするなり、好きにすればよい。人はいまだ試行錯誤の最中」

(541)

ミギノウエ「@ゲン：ログオフなんてとんでもない！ そんなことしたら慈善団体が心配して部屋に乗り込んできますよ！ 世の中おせつかいな人がいっぱいいて、ありがた迷惑なことです……まったく。私は部屋T-Lはつけてませんが、それだけでも色んな人から怪しまれるんですよ？」

(542)

ノルコ達はゲンとミギノウエのやりとりを眺めながら、首をひね

つていた。難しい話のようで、実はとても身近な話のようだ。リン
「確かにー、部屋の丁しつてつけるのが当たり前になってるね」
ルイ「つけないと逆に怪しまれるんだよな。あの部屋で何かコソコ
ソ変なことしてるとわづ、て」

(543)

カズノリ「く、空氣、つてやつ、だね」 リン「そつそう、空氣。
空氣」 世の中、空氣というものは法律以上に生活を拘束している。
ノルコ（だからトイレのツイッターは「禁止」つてことになっている
のかな？） トイレにまで丁しつける空氣が流行つたら世界は終わ
りだなど、ノルコは根拠なく思つ。

(544)

ゲン「@ミギノウエ：怪しまれると、それを選ぶのもその人の
自由だと私は考えるがな。先ほども言つたが、情報の拡散は自然現
象として不可逆であるし、相互監視化も後戻りできない所まで来て
いる。我々は状況に従つてこれからを考えていく他あるまい。本当
の自由とは何か、考えていく他あるまい」

(545)

ミギノウエ「@ゲン：自然現象として不可逆ですか。その果てに
ある理想の社会は、一つの巨大な村みたいなものなのでしょうか。
誰もがみんな村の全てを知つていながら、空氣を読んで見てみぬふり
をする。そして少なくとも僕達は悩む自由を持つている。ちょっと
考えて見ます。フォローしても？」

(546)

この後、ゲンの「勝手にするよろじ」の一言で、一人のリプライ
合戦は終わっている。ルイ「どういういきさつでフォローしてんだ
か」 カズノリ「や、さんざん言い合つて、ぎや、逆に仲良くなつ

たって感じ、かな?」ノルコ（そうれはビツかな……そういうえば、何のために集まつてたんだっけ?）

(547)

リン「ところでね、あの単体化っていうのはなんのことなのかな?あの辺のやりとりがよくわからくて」カズノリ「う、うーん。じ、人類単体化、つてのは、え、SF小説とかで、よ、よくある、し、シチュエーション」ルイ「みんな同じような人間になっちゃうつてアレだろ?」

(548)

カズノリ「う、うーん、そうだな、た、例えるなら……」その後、カズノリは『おばちゃん』と『引きこもり』を例に挙げて説明した。もし世の中が、空氣の読み合いに長けたおばちゃんだけになつても、逆に名無しの引きこもりだけになつても、みんな同じようになるという意味で単体化してしまつ、といふやつなことを。

(549)

ルイ「んで、結局どっちも嫌だねつて結論?」カズノリ「い、いやあ……」リン「ミギノウエさんはー、プライバシーを守るための管理を誰かやつたほうが良いって言つてー、ゲンさんはそれに反対してー、ミギノウエさんはわからなくなつてしまつてー、悩む自由があるんだー、つて結論じゃない?」

(550)

なぜか一同、ヤマオ君の方を向いた。ヤマオ君はしばしげーっとリンを見つめた後、一度だけウンと首を縦に振つた。ルイ「うー、よくわかんねー。んで、結局私らは何がしたかんだっけ?」カズノリ「ん?」リン「あつ!」ルイ&リン&カズノリ「あー!!」そして一同、今度はノルコの方を向いた。

(551)

ノルコ（……そうだった）＝ギノウエ氏をブロックすべきか否
かという話だつた。ノルコ（……どうしよう）　リン「リンは一、
別にブロックしなくていいと思うのー」　ルイ「ん、まあ、悪い人
じゃなさそうだぜ？」　カズノリ「ちょ、ちょっと困った人かも、
し、しれないけど」　というわけで結論は出たようだ。

(552)

その後ノルコ達は、WEBアプリで夕方までひとり遊び、それぞれの家へ帰ることに。ルイ「あ、カラスがないでるぜ」リン「カラスがなくから」カズノリ「か、帰らうか」ヤマオ「……」ノルコはみんなを玄関前でお見送り。ヨコ「ちょっとみんな、これ持つて帰つて食べてっ」

(553)

そういうてヨコは、リボンでラッピングされた袋をわたす。中身は手作りマドレーヌだ。一同「ありがとうございます！」ヨコ「また来てねー」みんなバイバイと手を振つて、それぞれの家路につく……が。リン「私、ちょっと買い物してかえるね！」そしてどうこうわけかヤマオとアイコンタクト。

(554)

ルイ「お、おおづ。氣をつけてな！」カズノリ「ま、また明日」そしてリンとヤマオは一人で別方向に歩いていつてしまつた。ルイとカズノリはそれを見送ると、照れくさそうにモジモジし始めた。カズノリ「お、送るよ」ルイ「べべ、別に一人で帰れるつてつ」カズノリ「で、でもそんなど、遠くないし……」

(555)

なんだかんだ言いつつ、二人は並んで歩き始めた。街は夕日に照らされていた。カズノリ「きょ、今日は、なんだか色々、べ、勉強になった、ね」ルイ「あ、ああ……そうだな」一人ともまったく逆の方を向きながらのぎこちない会話だ。ルイ「ノルコも大変だ

よ。つぶやけないってだけで、こんなに色々面倒になるんだな

(556)

それでふつつりと会話は途切れた。でもそれで構わなかつた。なにせ保育園からの仲だ。いまさら会話の間を気にするような間柄でもない。二人はただ黙つて家路を進む。茜色に染まつた街角は、夕食の買出しをする人や仕事を終えて帰宅する人で賑わつてゐる。野球道具を肩に担いだ、部活帰りの学生もいる。

(557)

二人は特に意味も無く、それぞれの耳たぶをクリックした。すぐさま視界に夥しい数のAR情報が空間投影される。道行く人の頭上に簡易プロファイルとT-Sが表示され、店先には広告用AR映像が流れ始め、監視装置の存在を表す光点がいたる所で光りだす。生まれた時から慣れ親しんだ、ごくありふれた光景だ。

(558)

カズノリ「と、特に危険は、な、ないみたい」ルイ「まあ……街の中だしな」市街地は相互監視網の密度が非常に高いので犯罪はめつたに起こらない。カズノリはコンソールを操作して「不審者チエッカー」を表示させた。これは人々の移動経路を調べ、拳動不審な人をピックアップするサービスだが、よほど用心深い人しか使わない。

(559)

同じ所をウロウロしたり、不自然にゆっくり歩いたりするとチエッカーに引っかかる。誰かにくつついて歩いても引っかかる。それが赤の他人でも友達でも関係ない。そのため、今のルイにとつて一番の不審者はカズノリという結論が出てしまつてゐる。カズノリ「わ、わけがわからないつ」ルイ「ほへ?」

(560)

とはいえ、カズノリはやはり男の子であり、好きな女の子のこと

を何としても守りたいと思うのは当然だった。ルイ「カズノリはホ

ント心配性だなー」カズノリ「そ、そんなことないよつ」二人

の馴れ初めは保育園時代までさかのぼる ルイは今にもまして男

らしく、そしてカズノリはさらに吃音がひどかつた、あの頃に。

(561)

いじめっ子1「ちゃんとつぶやけつづーの！」昔の話である。

保育園のすみで本を読んでいたカズノリが、少年達にいじめられて

いた。バイオツイッターの形成に不具合のあったカズノリは、深刻

な吃音障害を抱えていた。カズノリ「ほ、本……か、かか、かえ、

え、えし、かえして！」 いじめっ子2「ちゃんとつぶやけたら返

してやるよ」

(562)

ルイ「てめえらなにやつてんだー！」 口と同時に手足が出る。

腰の入った右ストレートと後ろ回し蹴り、一瞬のうちに一人を吹き

飛ばした。ルイ「人の弱みにつけこむなんてサイテーだな！ その

本返しやがれ！」 いじめっ子2「暴力だつてサイテーだろこの男

女！」 ルイ「なに!? もういつぺんいつてみろ！」

(563)

いじめっ子1「何度だつて言つてやるよ男女！ ゼつて一嫁の貢

い手ねーぞお前」 いじめっ子2「そーだよこんにやるー！」 お

返しとでも言わんばかりに、少年はルイの顔めがけて拳を振るつて

きた。ルイ「つ！ てめえら顔ねらいやがつたな！」 いじめっ子

1「いーだろ、おめー女じやねーもん！」

(564)

いきなり勃発した肉弾戦に、周囲の子供らがざわつき始めた。「またルイちゃんがやつてる……」「せ、先生呼ばなきや！」「喧嘩しちゃだめー！」いじめっ子1「女扱いしてほしかつたらもつと女らしくすればいいんだ」いじめっ子2「そーだそーだ。またルイが入殴つたつてリツイートしまくつてやるー」

(565)

ルイ「うぐつ……」普段から「もつと女の子らしくしなさい」と大人たちに言われているルイは、またカツとなつて思わず手を出してしまったことを後悔した。逆に弱みを握られるハメになつたのだ。ルイ「……てめえらホントに腐つてやがる！」いじめっ子達はそのルイのつぶやきをすかさずリツイートした。

(566)

いじめっ子1「口の汚い女子はいやですなー」いじめっ子2「いやですのおー」ルイ「ぐぬぬ……」いじめっ子1「てめえら、じゃなくて、あなた様方、つて言いなさい？」いじめっ子2「くくく、がははは」ルイ「間違つてる……お前ら絶対間違つてるー」

(567)

カズノリ「……る、るる、ルイち、ちゃん。も、ももも、もう、もうい、いい」ルイ「カズノリ？！」いじめっ子1「だーかーらちやんとつぶやけつてのー」つひやひや！笑い死ぬ！カズノリ「き、ききき、きみの、の、ひひひょうばん、わ、悪く、な、ななちやうよ」

(568)

ルイ「だけどさー」カズノリ「い、い、い、い、ん、だ」

そしてカズノリはルイと少年らの間に割つて入つた。いじめっ子1「なんだ？」 いじめっ子2「やんのかこのもやし野郎」 カズノリは彼らに奪われた本を指差す。カズノリ「あ、あああ、げ、あげ、る、よ、そ、そそ、それ」

(569)

いじめっ子1「はあ？」 カズノリ「べ、べべ、べん、きょ、きょきょうする、といい、いい、いいい、よ、そ、そそれ、それで」 いじめっ子2「笑えない冗談ですなあー」 カズノリ「き、ききき、きみ、きみ、たち、は、あ、あ、あ、あああ、あたあた、あま、あたま、がががわ、わ、わ、わるい！」

(570)

二人のいじめっ子は互いに顔を見合させ、そして額に血管を浮かび上がらせながらカズノリをにらみつけてきた。いじめっ子1「なめた口きいてんじゃねーぞゴラア！」 そして拳をボキボキ……鳴らないが、鳴らすふりだけした。いじめっ子2「歯あ食いしばれや！」 ルイ「か、カズ……！」 カズノリ「うぐう！」

(571)

カズノリは右頬を思いつきり殴られた。いじめっ子2「どーだ、痛いだろ？」「いじめっ子1「はやく謝らねーともう一発いくぞ？」 「あーん？」 カズノリ「うつ、うう……くつ！」 カズノリは歯を食いしばって痛みをこらえ、そして殴られた反対側の頬、すなわち左の頬を少年らに向かつて差し出した。

(572)

カズノリ「そ、そそ、そその、ほほほ、ほん、ほん、に、かかか、かいて、ああるよ」 カズノリが奪われた本、そのタイトルは「せかいのせいじんたち」だった。カズノリ「こ、ここ、こつち、こつ

ちの、ほほ、頬、ほおも、な、な、なぐ、なぐる、と、いいんだ…

…よ！」　その時、タイムラインが火を噴いた。

(573)

二人は本当にぶち切れて、カズノリに殴りかかつってきたのだが、直前で動きを止めた。いじめっ子1「な、なんだこの感じ」　いじめっ子2「あ、頭が、頭があ！　わあああー！」　そして二人は頭を抱えてその場にしゃがみこんでしまった。ルイ「な、なんだ…」カズノリ「こ、こここ、これ、は、は」

(574)

二人のTしに、『近所の、いや日本中の説教好きな人たちからの説教リプレイが押し寄せていた。バイオツイッターによるリプレイは、その人の脳内回路に直接送信される。いつきにリプレイが流れ込んだ影響で、脳がパニックを起こしたのだ。いじめっ子1&2「頭が痛い！　痛いよー！　わあああー！』

(575)

すぐに先生たちがやってきて、炎上したTしの火消しにあたる。少年らのツイッターは自動的にログオフされたが、一人はしばらくその場に伸びていた。いじめっ子達への説教リプレイは、彼らはおろか、彼らの両親、兄弟、親族にまで飛び火し、保育園の先生や、どういうわけかカズノリとルイのTしにまで送られて來た。

(576)

10分ほどでTしは鎮火した。後日、いじめっ子の二人は、知恵熱を出してしばらく休むことになつた。その間うわごとのように「ごめんなさい」とか「もうしましぇえん」とかつぶやいていたらしい。その一件以来だつた。ルイとカズノリの間に、友情とはちょっと違つた、仄かな感情が芽生え始めたのは。

(577)

話は現在に戻る。ルイの家がある集合住宅が見えてきた。二人は暮れ行く夕日を眺めながら、とてもゆっくりと歩いていた。ルイ「なあ」 カズノリ「んつ？」 ルイ「いまどんなこと考えてた？」 そうルイの方から話しを振ってきた。カズノリ「ああ……む、昔のこと、とか」 ルイ「昔の？ いつのだ？」

(578)

カズノリ「ほ、保育園のとき、の……こと」 ルイ「ほあ？、そりやまたずいぶん昔の話だな」 カズノリ「ほ、僕が、ま、まだ全然うまく、うまく呑けなかつた、あのこひ。よく、いじめられて、ルイに、助けられた」 ルイ「だなー、しおちゅう喧嘩してたつけ。ま、今でもやうだけどわ」

(579)

カズノリ「む、昔つから喧嘩つぱ、ぱやかつたよね。ルイは」 ルイ「まーなー。アレでも精一杯抑えてたつもりだったんだけど、全然女として扱われてなかつたなー。いや今でもだけどさつ」 そういうて自虐的に笑うルイだつたが。カズノリ「そ、そんなことないさ！」 ルイ「えつ……そ、そつか？」

(580)

カズノリ「る、ルイは……その、や、や、やや、優しい、い、じやないか、げつふげつふ！」 ルイ「お、おい、無理すんな……つて、私は優しくなんかないぞつ」 カズノリ「そんなことない、ルイは、優しいよ、お、女の子らしつて」 ルイ「お、おま……うわわ、か、痒いじょんか、そんな言われたら……どうしたんだよ」

(581)

カズノリ「だ、だだ、だつて。じ、じじ、自分のこと、女らしくない、とか、な、何度も言うんだもの。よ、よくないよ、自虐的に、な、なるのは」 ルイ「そ、そつかな？」 カズノリ「ルイは、お、女の子、らしいよ、大丈夫だよ」 ルイ「だ、大丈夫とか！ なんか病気みてーじゃないか！ 逆にはら立つってば！」

(582)

そういうしていろうちに、もうルイの家の前だ。5階建ての集合

住宅、そのゲートの前で、なんとなく名残惜しそうな二人。ルイ「ついちゃつたな……って！ 別に深い意味はねーんだからなつ」

カズノリ「う、うん、わかってる」 ルイ「わわわ、わかっちゃダメだろ！」 カズノリ「う、うめん……」

(583)

ルイ「じゃ、じゃあな。また明日なつ。ちゃんとメシ食えよ？ ジャねーと筋肉つかねーぞ？」 そう言ってルイはカズノリの肩を

たたく。カズノリ「うん、ちゃんと食べるよ」 ルイ「ちゃんと歯も磨けよ？ 黄ばむぞ？」 カズノリ「うん、ちゃんと磨くよ」

ルイ「お、おおう、じゃあな！」 カズノリ「うん、ま、また明日」

(584)

ルイを見送つて、少年はその場を後する。ルイとはずつとこんな調子だ。僕らはまだまだ子供なんだと少年は思う。でも僕達は友情とは違う何かでつながつていて、みんなも応援してくれている。カズノリ「うふふ」 少年はそつと含み笑いをこぼした。ルイ「な、なに笑つてるんだぜ？」 カズノリ「つうん、別になんでもないよ、ルイ」

(585)

そのころノルコは、自室でルイとカズノリのやり取りを眺めて二コ一コしていた。早くもつと仲良くなつて、ノルコ達を結婚式に招待して、そして私に向かつてブーケを投げてくれたらしいのに……。そんなことまで妄想してしまつノルコ。もし一人を邪魔する人がいたら、じゃじゃ馬の如き後ろ回し蹴りで容赦なくお星様になつてもらう勢いだ。

(586)

ノルコ（……やつ）かんし社会） 誰もが誰もを監視できる状況においては、空氣こそが何よりも重要だ。世の中には、クラス内の男女が親しくすることを許さない空氣というものもあるらしい。二人の名前が書かれた相合傘を電子黒板に描かれて、さんざん冷やかされる……とかなんとか。ノルコ（そんなの絶対ゆるさない！）

(587)

空氣はみんなで守らなければならぬもの、という感覚がノルコの中にはある。しかし一方で、その空氣のために思うようにならないこともある。例えばノルコは以前、従兄弟のお兄さんにほのかな想いを抱いたことがある。お兄さんは当時18歳で、ノルコは9歳だった。ノルコ（……かなわない恋も、あるわ！）

(588)

そのお兄さんは、よくノルコをまつてくれた。しかし、ある一定の線を踏み越えてくることはしてなかつたし、こっちから踏み込もうとしてもそつけなくあしらわれた。ノルコにもその理由はわ

かつていた。そういうことは一般常識的に認められない空気なのだ、といつことくらいは。ノル口（歳の差があと5歳少なければな……ちつ）

（589）

相互監視社会特有の問題といつのは、やはりあるのだ。ノル口は先ほどのゲンとミキノウのやりとりを思い起しす。……その気になれば、地球の裏側にいる人々の生活まで監視できてしまう。ノル口（やつてみよつ……）そして耳たぶをクリックし、海外T-Lに飛んだ。ノル口はちよつとデキドキしていた。

（590）

リオデジヤネイロはちょうど朝日が昇ったところだつた。それはついさつきノル口が見送つた夕日である。ノル口（……朝からラブラブな人達はさすがにいなか）と思いつやさすがはラテンの国。明け方の公園のベンチで中むつまじくする若いカップルをノル口は発見した。

（591）

他にも、朝のカフュで一人静かにコーヒーを飲みながら本を読んでいるカップルも見つけた。ノル口はなんとコーヒーの銘柄と本の題名まで知ることが出来てしまった。店内にはゆつたりとしたボサノバが流れおり、その曲をピックアップして自分の部屋のBGMにすることも出来てしまつた。

（592）

ノル口（ちよつと楽しいかも……ふひひ）下手すると時間を忘れて一日中検索してしまいそうだ。でもノル口には他にもつとやるべきことがある。今日の授業の復習をしないといけない。もうすぐ夕食の時間で、今日から単身赴任のお父さんとオントライム会食があ

るので遅れるわけにはいかない。

(593)

何でも自由に調べられるといつても、調べられる時間には限りがある。検索できる情報が増えれば増えるほど、知ることの出来る情報は相対的に減っていく。そんなちよつとした無力感を誰もがぼんやり感じている。だからこそ一番大切な情報だけはけして見逃してはならない。情報の海に溺れないのでにも。

(594)

ノルコはお父さんとお母さんの寝室の「」を調べた。今日からお母さんは一人で眠ることになる。寂しくないだろうか。ノルコ（…あつ）最新ツイートは昨日の朝だった。昨夜二人は一言も会話することなく就寝したのだ。こんなことはノルコの知る限り一度もない。ログオフしていたわけでもない。

(595)

ログオフ……夜に夫婦が寝室でこの状態になるというのは、つまるところがそういうこと。この場合のログオフを追及するような行為は、常識的に入りえないことで、ノルコだってそれくらい知っている。人は木の叉から生まれるわけではないし、ペリカンが運んでくるわけでもないのだから。

(596)

ログオフでもないのに、お父さんとお母さんが寝室で一言もツイートしないというのは、はつきり言つて異常事態で、地球の裏側の恋人達の事情より、よっぽど重要度の高い検討課題である。ノルコ（……やっぱり喧嘩してるのかな）お母さんはホウさんと友達になると言つてゐし、どうなることやら。

(597)

そのころ……。イイズカ「アフレルぐーん！ 2番バルブ閉めてー！」 アフレル「は、はい！」 ハツブル「ハリー・アップ！ 破裂するゾー！」 秘密基地の地下にある大規模試験場で、巨大な鉄の腕がガツコンガツコンと轟音をたてていた。アフレル「バルブ閉まりました！」 全身オイルまみれだった。

(598)

アフレル（す、すゞい……まさか初日からこんな仕事を任されるなんて） 油圧駆動系試験のアシストとして雇用されたアフレルは、いきなり実動試験の現場に放り込まれた。ガンバールの腕、特に拳の部分は機構が複雑であり、試験はいくらやつてもキリがないのだ。

(599)

ハツブル「ヘイ、アフレル。いきなりこきつかつちまつて悪いネ」 アフレル「いえいえ！ こんなすごいメカニズム……むしろ燃えてきましたよ！」 イイズカ「いいねえ新入り。燃えすぎて火いつけねーよーにな！」 昼からずつと試験にかかりつきりなアフレル。夕食の時間がすぎてしまっていることに……気づいていなかつた。

(600)

ロボットアームは、ビルほどの大きさがある鉄骨製の支持体に取り付けられていて、油圧、電気系統、測定機器等々の夥しい配管・配線類とつながれている。アームの先の手が開いたり閉じたりするたびにアフレルが立っている支持体の足場が激しく振動する。アフレル（……うふふ、揺れるし油くさいし大変……）

(601)

軽い吐き気をもよおしつつも、アフレルは試験場のメインT字に目を光らせ、測定装置のA R情報を常に確認してデータを拾い、さ

らに同時進行で装置の機構について学習していた。アフレル（いきなり実機に触れるなんてラッキーだ！） 視界を埋め尽くすほど の A.R 情報とタイムラインに、アフレルの頭脳はパンク寸前だった。

(602)

その時、計器の一つが異常な数値を示した。小指を制御する圧力配管3系統のうち一つが、異常な圧力上昇を示している。アフレル「いけない！ 小指3番下げてください！」 イイズカ「ダメだ、カットできない！ 故障か？！」 ハツブル「破裂スル！ テイク・カバー！」 次の瞬間、アームの小指付け根から黒いオイルが噴出した。

(603)

幸い、下にいた作業員は全員退避していたのだけが人はなかつた。作動油は高温になつていて危険だ。ここで作業は一旦中止となり、後片付けが始まった。作業員総出で油の処理をする。ドラム缶にして10個分程度のオイルがこぼれた。全ての作業が終わるころには日付が変わっていた。

(604)

アフレル「遅くなつてしましましたね……僕がもつと早く気づいていれば」 イイズカ「いや、あれでいいんだ。半分は壊すのが目的の試験だからな」 アフレルは温泉で汗を流した後、他の職員とともに食堂に来ていた。食堂は24時間やつていて、ビュッフェ形式になつてゐるようだ。

(605)

まずはライスと味噌スープをよそう。おかげは紅鮭とインゲン豆の煮物という純和風なチョイスにした。それに美味しそうなオムレツがあつたのでケチャップソースをかけてトレーに乗せた。アフレル（秘密基地というわりには、以外と普通だなあ……） するとイイズカがちょいちょいと肩をつついてきた。

(606)

イイズカ「ここに来たらやつぱりこれ食べないとな」 アフレル「……なんですかこれ？」 イイズカが指し示したのは緑色のグニヤグニヤした物体だつた。よく見るとその中に、黄色いツブツブしたものやら、半透明の細長いものやらが入つてゐる。見るからに怪しい食べ物だつた。

(607)

イイズカ「まあ食つてみるつて」 ハッブル「だまされーたー、思つてネー」 アフレルはしぶしぶながらも、それを一さじすくつてお皿のすみに乗せた。アフレル（……ぐによぐにょしてる） そして食堂の片隅に何故か置いてある解析装置「MONOSUGOI」

にトレーを乗せ、料理の種類と量を記録した。

(608)

解析装置は料理中に含まれている有害物質の量も調べてくれる。アルテヒド、ダイオキシン、カドミウム、セシウム……。もちろん全て検出限界以下だが、それでも「丁寧に記録される。アフレル「なにか意味があるんですか?」イイズカ「まあ……秘密基地だしな」ハツブル「何がまさるか?カラーライ」

(609)

席につくとアフレルは、例の緑色のグニグニを箸でつついてみた。アフレル「……ホントに食べられるのかな」イイズカ「さあ、食べた食べた」ハツブル「体にいいよ!」箸でつまんで鼻先までもつてくる。クンクン。なんだか病院の処置室みたいな匂いがする。なんともいえない薬臭だ。

(610)

アフレル「……もぐもぐ……ん?」見た目はドロドロだが食感は不思議とサクサクしていた。たまに粒々が潰れてプチツとなる。半透明のこれは……クラゲか何かだろうか? 味はすこし酸っぱくて磯の香があり、かつ玉ード臭もある。アフレル「なんだろう? 魚介の漬物みたいなものですか?」

(611)

イイズカ「ふむ、俺も最初はそう思つたさ。でも実はこれな……地球の食材じゃないらしんだ」アフレル「えつ!」イイズカ「……ここだけの話なんだが、この研究所の地下で、宇宙人を培養してゐるらしい……」ハツブル「そうそう、宇宙人ね。エイリアン」アフレルはみるみる青ざめた。

(612)

アフレル「そ、それとこれとどういう関係が……！」　イイズカ
「どうもこうも、宇宙人なんて公表できるわけがねえだろ？　でも
実験すれば残骸は出てしまうわけだ。それで手っ取り早い証拠隠滅
として……だな」　アフレル「じょ、『冗談ですよね？』　イイズカ
「どうかな、だつてここは秘密基地なんだぜ？」

(613)

アフレル「じゃ、じゃあこの料理はさしづめ、宇宙人漬け……」
ハップル「そ、そ、宇宙人のピクルスという話だよ、ウヒヤヒヤ」
イイズカ「くくく……食べちまつたねアフレル君。実はそのエイ
リアンの細胞はまだ生きていて、食べた者はみな宇宙人に体をのつ
とられててしまうんだ……」

(614)

アフレル「（ガタガタブルブル）……じゃ、じゃあイイズカさん
達はもう……う、ううう！」　アフレルは突然自分の首を押されて
苦しみだした。アフレル「ううあ……うガガツ……ゲボア！」　と、
その時、ちょうど目の前をクサヨシ研究主任が通りがかつた。なぜ
か割烹着姿だった。クサヨシ「……何してるんだい？　アフレル君」

(615)

アフレルは顔を真っ赤にしながら味噌スープをすすっていた。ク
サヨシ「はははっ、君も随分とノリの良いやつだなあ」　アフレル
「い、いやだつて、そういう流れでしたし！」　イイズカ「まあ、
こここの洗礼みたいなものだ、悪く思わんぐれよ」　ハップル「あ
そこまでノつてくる人もメズラシイけどネー」

(616)

謎の緑色の正体は「松前漬け」だった。ただしかなりアレンジさ

れでいる。クロレラ抽出物がたっぷり入っているため、毒々しいまでの緑色を呈しており。風味付けにアブサントを用いているため薬臭がする。クサヨシ「ガンバール基地特性の『エイリアン漬け』だ。バターチーストにのせてもうまいぞ」

(617)

割烹着姿のクサヨシ研究主任は、まかないのタコさんワインナー茶漬けをサラサラとやっている。アフレル「あ、あの、調理師だつたんですか?」クサヨシ「最近はね」イイズカ「ここは人事異動が激しいんだよ。主任、以前はレーダー室の担当でしたよね?」いや激しいどころじゃないだろう、とアフレルは思った。

(618)

クサヨシ「料理とはいわば一種の科学だ。キッチンに立つことで得られる閃きもある」アフレル「そうなんですか?」ハップル「チーフは二ユータイプなレーダーのプロダクションがジャムつてんだよアフレル」アフレル「じゃ、ジャム? ああ、煮詰まつてことですか」クサヨシ「うむ」

(619)

クサヨシ「煮詰まつた時はキッチンに立て。我が家家の家訓だ」本当かな? とアフレルはいぶかしんだ。アフレル「新型のレーダーですか。僕は専門外なんでお役に立てそうにないんですけど、どんなレーダーなんですか?」クサヨシ「ふむ……一言でいえば、体重〇キログラムの宇宙人を観測できるレーダーだ」

(620)

クサヨシ「もし君が地球侵略を日論むエイリアンだったとする。なんとかしてコッソリ地球に浸入したい。しかし、地球にはそれなりの文明があり、電波望遠鏡などで銀河系全域までをもレーダー観

測している状況だ。さて、どうする？」アフレル「なんとかして観測網を潜り抜けないといけないわけですね。うーん……」

(621)

アフレル「あつ、それで体重が〇というわけですか」クサヨシ「そう、質量が〇というのははつまり、光や電磁波などの光速エネルギー一体のことだ。もし、宇宙人が純粹なエネルギーだけの姿で地球に侵入してきた場合、今の我々に発見する手立てはない」アフレル「ま、まるでSF小説ですね……」

(622)

クサヨシ「ふふふ、我々は今、そのSF小説の真っ只中にいるのだぞ、アフレル君」アフレル「確かに……。いやでも、そんなことが可能なんですか？」クサヨシ「わからん。だからこゝうして毎日割烹着を着てキッチンに立っているわけだ」アフレル「はあ……」ハップル「案外もう侵略されてたりネー」

(623)

イイズカ「その可能性もあり、だな。今こゝして話していることも、実はみんな筒抜けだったとか……」一同、しばし辺りをキヨロキヨロとする。アフレル「……なんかゾツとしますね」クサヨシ「我々はすでに監視されている……か。ま、それはそれで面白い」ハップル「おトモダチになれたらいいのにネー」

(624)

クサヨシ「ふふ、トモダチか。それがベストな状況ではあるな」クサヨシは残りのお茶漬けをスルスルとかきこむと席を立つた。クサヨシ「では失礼するよ」そして鼻歌で「お化けなんてないさ」をハミングしつつ、軽いステップでどこかへ行ってしまった。イイズカ「宇宙人とトモダチ……か」

(625)

その後三人は食事を取りながら、純エネルギー生命体を直接観測する方法をあれこれ話し合つた。しかし、これといったアイデアは浮かばなかつた。イイズカ「そもそも物理的に可能かどうか……」ハップル「ライフディフィニションも考えないとね」アフレル「うーん、困難な課題ですねえ」

(626)

イイズカ「そういうやアフレル、遅くなつちまつたが家族には連絡したか?」アフレル「……はっ」アフレルの手から箸がこぼれ、カラソカラソと音を立てた。アフレル「あつー!」ハップル「ど、どしたノ?」アフレル「しまつた……今夜同じ時間に食事とろつって約束してんだ……」

(630)

イイズカ&ハップル「あちゃー」アフレル「ちょっとすいません……」そう言つてアフレルは、家族のT-Sを確認した。もちろん三人とももう寝ていた。次にダイニングのT-Sを確認する。夕食はいつもより遅めの時間にとつたようだ。ワクのツイートが残されていた。ワク「ダッド・イズ・ノット・ヒアー?」

(631)

ヨコ「うん。お父さんは忙しいみたいなの。一田田だからきっと色々あるのね」アフレルはハツとなつた。そしてすぐさまDMを確認した。ヨコからのメッセージが残されていた。ヨコ『私達のことはいいから、お仕事がんばってね。終わつたらでいいから連絡してね』アフレルは深くため息をついた。

(632)

「イイズカ……どうなんだ？」アフレル「いえ、大丈夫です…
…取り乱してすみません」ハップル「カーザクーはダイジーにし
ないとネー」アフレル「ええ、まったく。でも仕事も大事ですか
ら……」イイズカ「まあ、あんまり無理はするな。今日はもう休
んだ方がいいだろう。いつデカイ仕事が入るかわからんからな」

(633)

アフレルはそそくさと食事をすませると、割り当てられた自室へと向かつた。巻貝のような形の研究基地、その地下3～6階が単身者用の居住施設になつており、海から見た反対側に扇状に広がつてゐる。高速の動く歩道が完備されており、全員が10分以内で職場を行き来できる設計になつてゐる。

(634)

宇宙船の船内を思わせるインテリア。アフレルはエアハッチのような自室の扉に手をあてる。すぐに生体認証され、プシューというエアシリングダーの音ともに扉が開いた。初めてこの部屋に案内されたときは、その凝つた作りに思わず小躍りしてしまつたアフレルだが、今はガックリと肩を落としていた。

(635)

4畳ほどのスペースにデスク、ベッド、冷蔵庫、映像端末、シャワーといった、最低限の設備が配置されている。アフレル「少し寒いな」アフレルは耳たぶクリックでエアコンを作動させ、ベッドに腰掛けて考え込んだ。アフレル（……ヨコになんて謝ろつ）秘密基地への単身赴任。初日の夜はこうして更けていった。

(636)

ヨコ「ふんふ～ん、ふふ～ん」　ヨコは朝からとても機嫌が良かつた。軽やかなステップでキッチンを動き回り、3人分の朝食を作っている。ヨコ「あらいけない」　コーヒーメーカーの設定が、いつと同じ一人分になっていた。ヨコ「こんなに飲めないけど、まあいいわっ」　特に気にせず料理を続ける。

(637)

ヨコ「ノルロー、起きてたらワクを起こしてちょうどいい」　もちろん返事はないのだが、二階からドタドタと足音が聞こえてきて、それがリプライみたいなものだった。ワク「ムニヤムニヤ……アウチッ！　ウワーオ！」　ボディプレスとバックドロップを立て続けにぐらつたようなツイートを聞きつつ、ヨコはサンドウイッチを切る。

(638)

今日の朝食はサンドウイッチ、トマトオムレツ、シーザーサラダ。そしてヨコ特製の野菜ジュースだった。ノルロー（朝からやけに豪華だなあ）　ヨコ「お父さんがいなくて寂しい分、頑張っちゃったのよ？」　ワク「イテテ……hum?　Oh!」　眠気まなこにむちうち氣味のワクも一気に目が覚めたようだ。

(639)

ノルローはトマトオムレツを品定めするような目つきで眺めつつ、そろりとナイフを入れた。ノルロー（……か、完璧だ）　しつかりと煮詰められたトマトソースが、一分のムラもなく卵につつまれてい

た。こんな手間も技術もかかる料理を朝から……。ノルンは何となく嫌な予感がした。オムレツは美味しく頂いたけど。

(640)

ワク「グッド・モーニング・ダッド、ホワッシュ・ドゥーイング？」
ワクが何気なく送ったモーニングコール。ノルンは父の反応に注视した。アフレル「お、ワク、おはよ。今からシャワー浴びるとこだぞー」ワク「〇九一・ショウ・ミー・ブリーズ！」ワクは研究基地の部屋が気になるようだ。

(641)

ヨコ「ワク？ お父さんのシャワーなんか見てどうするの？」
ワク「W-r-o-n-g-」アフレル「ははは、ワクは基地の中が気になるんだろう？ でもシャワーは普通のだぞ？」それでも見たいというので、アフレルは一通り部屋の中を見せてあげた。部屋はまるで宇宙船の中みたいで、ワクはよだれをたらしてしまった。

(642)

ヨコ「ワク、きたいわよ。ところであなた、なんだかひどい顔よ？ ちゃんと眠ったの？」アフレル「いやあ、色々調べてたらね……少しは寝たよ」ヨコ「大変なのねえ……」アフレル「あ、き、昨日はばじめん。夕食すっぽかしちゃって」ヨコ「いいのよ。子供達の夢のためにも頑張つてね、あなた」

(643)

アフレル「う、うん、ありがと……」ヨコはとても機嫌がよそそうに見えたが、それが返つてアフレルを不安にさせた。まるで自分がいなくなつてしまいしているかのような印象を受けたのだ。
ヨコ「昨日は何食べたの？」アフレル「……ん、社食で普通に食べたよ。ちょっと変わったおかずもあつたけど」

(644)

そうツイートしつつ、アフレルはノルコ達の食卓トレーをチラツと確認した。アフレル（何を食べてるのかな……え！？）とても豪勢な朝食だった。こんな朝ごはんを見るのは新婚の時以来かもしれない。アフレル「……」、「こんど帰る時、お土産に持つていくよ。エイリアンの漬物なんだけど」ワク「エイリアン！？」

(645)

朝なのでそんなにゆっくり話していられなかつたが、アフレルの新しい職場での話は、ノルコ達にとって刺激的なものだつた。アフレルがシャワーに入つてしまつてからも、ワクはしばらく興奮状態にあつた。ヨコ「職場の人とも仲良くやつてゐみたいで良かつたわね、お父さん」ノルコとワクはうふと頷いた。

(646)

ノルコ（……でもお父さん、すぐ疲れた顔してた）それに、お母さんの表情を気にしている様子だつた。ノルコ（……色々気にしてるんだろうな）しかし、それよりさらに気になるのが、お母さんの異常なまでの機嫌の良さだ、まるで……これから好きな人に会いに行くみたいな……。ノルコ（どうなつちゃうんだろ？）

(647)

ノルコとワクが、ランドセルをゆらしながら歩いていく。それを見送つたヨコは、ルンルンとステップを踏みながら、寝室のクローゼットへと向かつていつた。ヨコ「……どれにしようかしら」まるで初恋を知つたばかりの女学生のように、ヨコは次々と衣服を身にあてがつては、鏡の前でクルクルと回る。

(648)

ヨコが青年ホウと「デートの約束をしたのはつい先日、ツイッター互助会のチカラさんに事情を聞いたときのことだ。ホウがツイート能力を失った経緯を聞いたヨコは、その胸にしめつけられるような切なさを感じた。ホウ（あの人のこと、可哀想なんて思っちゃいけない……でも放つておけない！）

（649）

いきなりガンモードキを持つて現れて、不可思議な言葉とともにナンパしてきてホウのことを、はじめは不審に思ったヨコだったが、フタをあけて見ればあら不思議。両親のネグレクトにより耳とツイート能力を失いつつもその傷を乗り越え、ツイッター互助会で世のために人のために尽力する好青年だったのだ。

（650）

ヨコ「是非とも一度お会いしたいですわ」 それが開口一番、ヨコの口から出たツイートだった。ツイート能力を失っているホウと話すには、直接会うしかない。言づてをチカラさんにお願いして、ホウと連絡を取つてもらつた。チカラさんの話によると、ホウは喜びのあまりその場で回転ジャンプをして気絶したといつ。

（651）

ヨコ（……こんな年増の主婦とのデートを、ジャンプして気絶するほど喜んでくれるなんて！） しかも回転よ回転、どんな状況だつたのかしら？ そんなことを考えつつも、お化粧に余念のないヨコだった。衣服は水玉のワンピースにグレーのジャケット。バッグは花柄のトートバッグを選んだ。

（652）

水玉模様はヨコの勝負カラーである。ヨコ（水の色は私の色……）半端な気持ちで会うわけではない、という自分自身へのメッセージー

ジである。しかし、あくまでも良い友達になることが目的なので、華美な色使いは極力避け、バッグの花柄のワンポイントに限った。

ヨコ（こんなものかしら？）

（653）

身支度を整えたヨコは、玄関の中でそわそわしながら時間が来るのを待つた。ホウが車を手配してくれることになつていて、ヨコ（そわそわ……そわそわ……）その時、外からクラクションが鳴つた。ヨコ（ドキーン！）玄関を出るとそこには、とりわけ目立ちはしないが、高級そうな白いセダン車が来ていた。

（654）

ヨコはサッと車に乗り込んだ。中は無人でドアが閉じられると自動で発進した。内装はとても豪華な作りになつていて、助手席の部分は給仕スペースの付いたテーブルになつていて、クーラーにはお茶と白ワインが用意してあるようだ。クリーム色の本皮シートにゆつたり腰掛けると、ヨコはそれだけでお姫様になつたような気分になつた。

（655）

隣の座席にバラの花束が置いてあり、手紙が挟まれていた。ヨコは花の香をそつと嗅ぎ、手紙を開いて読み始めた。【我が敬愛のミセス・イズミ様】あくまでも年上の、敬うべき相手としてヨコは会食に招待されたようだ。手紙には、ヨコとデートできることがいかに嬉しいかが綴られており、独特のコーモアの中にも进るような情熱が伺えた。

（656）

会食の場所は、成田空港の近くにあるホテルレストラン。飛行機の離着陸を間近に見ながら食事をしようというわけだ。距離的には

亥音市から車で30分といったところ。道中、車窓に流れる景色を眺めつつ、先ほど読んだ手紙とバラを胸に抱いて、ヨコはつづりとした面持ちだった。

(657)

ヨコ(こんなにも誰かに心を尽くされたのはいつ以来かしら……)
そう自身に問い合わせねばならぬような気持ちだった。もちろん今でもその気になれば、そういう相手を得ることは難しくない。けれども今の家庭を持つ身。いくつもの幸せを同時に求めることが許されない。そう思い、ヨコはふうと一つため息をついた。

(658)

やがてキーンという飛行機のエンジン音が響いてきた。現在では殆ど使われなくなつた液体燃料式のジャンボジェットだ。国際線の一部でのみ運用されている。そのジャンボジェットの数倍はあるとかという、巨大な太陽光飛空艇が、今ゆっくりと飛翔を始めているところだった。化石燃料が使えなくなつたことで、空の事情は大きく変化した。

(659)

ヨコはその飛空艇を見て新婚旅行のことを思い起こした。空飛ぶホテルと呼ばれるエンタープライズ号に乗つて、アフレルとヨコは一週間かけて地球を一周したのだ。しかしその間、アフレルはヨコに謝りっぱなしだった。アフレル「ごめんヨコ、せめて雨漏りだけはしないように頑張るから!」

(660)

いつたい何がおこつたのか? 世界トップクラスの豪華客船であるエンタープライズ号、その客室を予約することは非常に困難だ。以前ならお金さえ用意できればなんとかなつたのだが、今はお金の

介在しない世界。客室のチケットを得るには、飛空艇の所有者さんを説得しなければならないのだ。

(661)

エンタープライズ号の所有者さんは非常に大雑把な方で、客室から溢れた人でも通路やらホールやらに泊めてあげることあった。アフレルはそんな船長さんの計らいで、一人は飛空艇の最上部にある空中庭園に泊めていただけことになったのだが……。アフレル「まさか天井がないなんて思わなかつたんだよ！」

(662)

台風の近くを飛行すると聞いて、アフレルは必死になつてテントを持つている人を探し、何とか借りて空中庭園に張つた。そして雨風がビュウビュウ吹く夜を、ヨコとともに過ごしたのだ。飛ばされそうになつたり、雨がしみてきたり、高山病みたいになつたり、それは大変なことだった。ヨコ（……一生忘れないわね）

(663)

もつとも今となつては笑い話。（所有者さんが一番笑っていたようだ）それに良い思い出がなかつたわけでもない。アンデス山脈のウユニ塩原で見た星空は、それは素晴らしいものだつた。もう一度あの星を見られるのなら、もう一度高山病にかかりたつて良いと思えるくらいには

(664)

そんな追憶に浸つてゐるうちに、待ち合わせのホテルに到着した。ヨコはジャケットの襟を正して気合を入れた。ヨコ（しつかりもてなされないと！）車のドアが聞く。ドアマンが指示示す道には赤いカーペット。そしてその向こうに、フォーマルな装いを淀みなく整えた青年の、少し赤らんだ笑顔が待つていた。

(665)

そのころアフレルは、仕事を午前中で切り上げて、滋音市へと向かう電車の中にいた。アフレル（……やっぱり一度帰らないとダメだ）ヨコの態度がどう考へてもおかしい、そのことがずっと頭からはなれなかつたのだ。アフレル（僕は一度、ヨコに怒られる必要があるんだ……きっと）

(666)

アフレルはこう考へていた ヨコは僕の単身赴任のことを良く思つていなくて、本当は言いたいことが沢山あるのだけど、ノルコやワクのいる前での口喧嘩はしたくない、だからずつと一口二口笑つて我慢しているんだ と。アフレル（……腹をわって話し合わなきやいけない。それも、ちゃんと直接会つて）

(667)

アフレルの手にはエイリアン漬けが入つた紙袋が握られている。子供達が学校から帰つてくる前に話しきを済ませて、そして何も気兼ねすることなく、みんなで夕食を楽しもう。お土産話もいっぱいしよう。アフレル（就職して一日目で休暇とっちゃつたけど……でも家族の方が大切だ）複雑な思いを乗せて、電車はカタコトと進んでいく。

(668)

夫が家に戻つて來ることなど思いもしないヨコは、優雅な昼食の真つ最中だった。程よく火の通つた石鯛のムニエルに舌鼓を打つていた。ヨコ「すこく美味しいわ。こんな素敵なお店、どうやつたら

予約できるのかしら?」ホウ「直に会つて交渉したんですよ。僕の場合、ツイッターが使えませんからね」

(669)

ホウ「不便ではないかと良く言われますが、しきりう時は別ですよ。やっぱり、本当に熱意を伝えたいと思えば、直接会つて話すのが一番ですからね」ヨコ「まったくその通りだと思うわ。私達はこの体の中のツイッターに頼りすぎているかも知れない」ホウ「生まれつき備わったものですからね」

(670)

ホウの年齢は19歳と聞いている。ヨコは実際に会つてみて、想像した以上に大人びた青年だと思った。老成していると言つて良いくらいだ。ヨコ（いつたい、どんな人生を送ってきたのかしら……）話題もツイッターのことになっている。ヨコは、今こそ彼の過去について尋ねる時だと感じた。

(671)

ヨコ「ホウさんも、元々はツイッターを使えたんでしょう? なんとか元に戻すことは出来ないのかしら?」ホウ「難しいですね。アンインストを使われましたから。僕の中にはまだ、アンインストの分子が生きていて、リインストしようとする拒絶反応が起ころんですよ」ヨコ「まあ……」

(672)

ホウ「でもいいんです。僕はツイッターは失つたけど、その代わり、こうして貴女に出会うことができました」突然の告白に顔を赤らめつつもヨコは。ヨコ「前向きなんですね?」と言葉を返した。ホウ「はい、このとおり髪がボサボサで、後ろが良くな見えないものですから」ヨコはそのユーモアにくすぐると笑みをこぼ

す。

(673)

ヨコ「私、ホウさんのコーモア好きですよ。なんというか、ツイツターで育つた人にはないセンスがあるように思うわ」 ホウ「本当ですか?! そう言つてもらえると凄く嬉しい」 ヨコ「でもきっと、色んな苦労があつたんでしょうね」 ホウ「ええ、それはもう! でも今の一言で吹き飛びましたよ」

(674)

ヨコ「でもきっと、そのセンスの影には色々な苦労があつたのでしうね……。もしよければ話していただけません? 少しでも貴方の心の荷を背負つてあげられればと思うから」 そつと口に言つてヨコは、真摯なまなざしでホウを見つめた。ホウはその視線に、座つたまま昇天しそうになつた。ホウ「ああ……今日は僕の人生最良の日だ……」

(675)

ホウは、幼少時に耳を切り落とされた時のこと話をした。ヨコはショックのあまり、食事の手が止まってしまった。ホウ「しかし正直なところ、僕の中には悲しみも怒りもなかつたんですね。なんというか、まるでそれが当たり前の出来事だと思えた。きっとこの運命は、僕自身が選んだものなんだって」

(676)

ホウ「その後、互助会に拾われた僕は何年間も外に出ませんでした。でもそれは塞ぎこんでいたからじゃない。僕には心を静かにして考える時間が必要だつたんです。それも、とても長い時間が」 ヨコ「まあ……私には想像すら難しい状況だわ。私だったら三日と待たずに気がおかしくなつてしまいそう

(677)

ホウ「もしそんな状況に貴方が陥ることがあれば、僕はいつでもお出汁とガンモドキを持って飛んでいきますよ」 そのジョークにヨコは思わず吹き出してしまった。なんだか一瞬で張り詰めていた気持ちがほぐれたようだった。ヨコ「本当に、どうしてガンモドキが必要だってわかったんです？」あの時

(678)

ホウ「僕には未来が見えるんです、と言つたら信じてくれますか？」 ヨコ「ええ、もちろん。なんだか貴方の言うことなら何でも信じちゃいそうな気分よ」 ヨコはホウの不思議な能力についても、チカコさんから話を聞いていた。ヨコ「だって、こんなに上手にエスコートされたことなんて、今までなかつたくらいなんですもの」

(679)

ホウ「氣に入つて頂けて嬉しいです。でも、そんなんですか？」 ヨコ「ええ、まるで私のことも世の中のことも、何もかも知り尽くしているような感じですもの。貴方くらいの若さで、これだけのことが出来る人なんて、そうはないわ」 ホウ「ああ……そんなに貴方に褒められたら、僕は……僕は……」

(680)

ホウ「ビヴァーチュ…… クルミナーレ…… エウフォリカメンテ！」 ホウは爆発したように立ち上がり、フロアをクルクル回りながら窓に向かつて歩いていった。ヨコ「えつ、えつ？！」 なんだんだとざわめくフロアで、ヨコはただオロオロする。ホウ「今日は本当に良い天氣だー！ イヤアアアホオオウー！」

(681)

ヨコはなんとかホウに付いて行つて、席に連れ戻した。そして水を飲ませたりおしほりを首にあてたりして、血の上りきつた頭をなんとか冷やした。フロアが落ち着きを取り戻したころ、ホウは我に返つた。ホウ「ああミセス、僕はとんだ失態を……」ヨコ「ううん、いいのよつ。私が褒めすぎたのがいけなかつたの！」

(682)

料理はデザートに変わつていた。ジエラードの三種盛りだ。冷たくて甘酸っぱい一口が、二人のテンションを良い感じに冷ましてくれた。ヨコ「なんの話をしていたんだつけ……ああ、そうだわ、ガンモドキの話だつたわね」ホウ「はい……あれは、その、なんといつか、なんとなくわかるんですよ」

(683)

ヨコ「何となく私がガンモドキを買い忘れることがわかつたんです？」ホウ「そうなんです、そうしたら居ても立つてもいられなくなつてしまつて……」ヨコ「不思議だわ！ 世の中にはまだ科学で説明できないことが沢山あるのね」ホウ「ええ今はまだ。でも、この僕の能力はまもなく解明されるでしょう」

(684)

ヨコ「まあ、それも何となくわかるんですね！ 一体どこまでわかつておられるのかしら」古来より、高名な占術家は非常にもてることが知られている。未来を見る眼を持つものに、人は本能的に魅かれてしまうようだ。今のヨコも、ちょうどそんな状態だつた。ヨコ「私、ホウさんのこともうと知りたいわ……」

(685)

その言葉にホウの顔は再び赤くなつた。ヨコはしまつたと思った。ヨコ「わ、私ったらなんてことを……き、気にしないでくださいね

？」 ホウ「は、はい……ゲフフン……。どこまでわかっているのかというと、僕自身にもよくわかりませんね……、宇宙の終わりまでわかつてる氣もするし、一瞬先のこともわからない氣もする」

(686)

ホウ「思つに、未来が見えるのはきっと僕だけじゃないんですよ。誰もが誰も、未来を見つめる目をもつていてる。誰かが誰かの未来を発見して、その未来を変えようとしてしまつたら、きっと僕が見ていたはずの未来も変わってしまう。そうして少しづつ未来も変化していくんです」 ヨウ「……深いお話ですね」

(687)

その時ちょうど、飛行機が一機飛び立つた。ホウ「例えばあの飛行機、行き先は誰でも調べられます。つまり未来がある程度はわかつてているといえる。でも誰かがあの飛行機の行き先を変えてしまうかもしれない。その時に、見えていたはずの未来は少し違つたものに変わってしまうのでしょうか」

(688)

ホウ「僕はたぶん、人より少しだけ未来がよく見えるだけに過ぎないんです。おそらく、ツイッターを失つてることが、その原因の一つでしょう。僕にはツイッターを持つていてる人たちの行動が、自分とは関連性を持たない一塊のようして見える。そのことが、僕に未来を予見させるんです。きっと」

(689)

ヨウ「なんだか、ホウさんが前向きな理由がわかつた気がするわ。貴方は自分がどんなものを持って生まれてきたかを、ちゃんと理解しているのね。大人でもなかなか出来ないことなのに」 ホウ「ええ。きっと人は何かを失つた分、何かをちゃんともらつていてる。で

もそれに気づくには、人それぞれ時間がかかるんですよ……」

(690)

その後も二人は楽しく食事を続け、食後の紅茶まで飲み終えた。
ヨコ「ごちそうさま、とても美味しかったわ！」　ホウ「喜んでも
らえて何よりです。ところで、このあとちょっと行ってみたい場所
があるんですが……」　ヨコ「あら、どちらでしちゃう？　あまり遅
くならなければ……」　ホウ「大丈夫ですよ、帰り道の途中ですか
ら」

(691)

そのころ……。アフレルは眩音駅に着いたところだった。アフレル（ヨコ、今なにしてるかな……）アフレルは自分のT-Sを開いて確認する。アフレル（ん……成田？ 友達とでも出かけてるのかな？）まだしばらく帰つてこないようなので、アフレルは駅前で暇をつぶすこととした。

(692)

アフレルは書店に寄つた。書店とはいっても、本そのものはもうどこにも置いていない。本のタイトルが書かれたA Rコードが、ジヤンルや出版社ごとに整理され、陳列されている。いまや書店は本を得るために場所ではなく、今の自分にはどんな書物が必要かということについて、じっくり考える場所になっていた。

(693)

アフレルはセルフサービスのエスプレッソをいただき、甘口のマキアートにアレンジして休憩所へ持つて行つた。書店の中央に設置された休憩所は、腰を据えて本探し出来るよう、一人掛けのソファーが並べられている。アフレル「……ふーむ」アフレルは店内に流れるジャズを聴きながら、女心に関する書物を検索した。

(694)

ヨコ（この車を予約するのだつて大変だつたはず……）帰りの車はワゴンタイプの迎賓車だつた。後部座席が向かい合つて座れるようにセッティングされている。目的地に向かつ間、ヨコは家族のことについて話した。ヨコ「それでね、ノルコがのぼせてたのを勘

違ひして、病気が悪化したのかと思ひちやつたの」 ホウ「ほほほ
う」

(695)

話題の中心は、やはり失咳症になってしまったノルコのことになつた。ホウはそのことを知つていたが、いま初めて聞いたように振舞つた。ノルコとの間に面識があることは、彼女のために伏せておく必要があつたのだ。ホウ「それで、その後どうしたんです?」「...」
ヨコ「娘はいまマシをもつてましてね」 ホウ「ふむふむ」

(696)

ヨコ「それで何とか会話ができるんですよ。でなかつたら私、無理やり娘を病院に連れて行くといひでしたわ」 ホウ「ふうむ...
咳けないというのも、なかなか大変なものですね」 ヨコ「本当にね。そうだ、ホウさんなら何かわかりません? 娘の病気がいつ治るかとか、そういうこと」

(697)

ホウ「現時点での予測でしたら申し上げられますがないしかし、あくまでも現時点です、先ほど申しましたように、未来はちょくちょく変化する」 ヨコ「それでもかわないわ。ちょっとでもわかることがありますれば教えてもらいたいの。もう、この頃は娘のことばかりが気がかりで」 ホウ「では僭越ながら...」

(698)

ホウはすこし考え込んでから言つた。ホウ「ふむ... 娘さんは3日以内にはツイートを取り戻すようです」 ヨコ「え? そんなにすぐ?」 ホウ「はい」 何事もなければ とは、ホウは付け足さなかつた。実を言えばノルコのツイッター、もう治つているのである。ただそのことにノルコが気づいていないだけなのだ。

(699)

ヨウ「3日以内って」とは、今日にでも治る可能性があるってことね?」 ホウ「ええ、いつ咳いてもおかしくない状態のようですね?」 ヨウ「まあ……ホウさんにそう言つてもらえて何だか安心したわ」 ホウは一ヶコリ笑つてそれに答えた。しかし、心の奥では厳しい表情をしていた。

(700)

今、ホウに見えているノルンの未来は、とても危うげなものだった。まるで見えない数多の蔓草に、ノルンの身が捕われてしまつているようなのだ。そしてその蔓草の動きは、ホウの予見眼をもつても予想不能だった。ホウ（あのがノルン君の咳きを封じようとしているのか、それとも……。一体何をしようとしているのか……）

(701)

ヨウ「ホウさん」 ホウ「うむ……」 ヨウ「ホウさん?」 ホウ「え、あ、はい」 ヨウ「着いたみたいですよ?」 ここ、遊園地ですよね」 ホウ「ああ、すみません。なんだかボーッとしていました」 ヨウ「あら、具合でも良くないの?」 ホウ「いえいえ、きっと貴方が田の前に居るからですよ」 ヨウ「まあ、ホウさんつたら」

(702)

そこは滋賀市の近郊にあるちょっとした遊園地だった。噴水広場にメリーゴーラウンド、野外ステージと、何軒かの露店。10分もあれば見て回れるような、こじんまりとした場所だ。ホウの目的はメリーゴーラウンドだった。ホウ「昔からの夢だつたんですね。……好きな人と一緒に、メリーゴーラウンドに乗ることが

(703)

ヨコはハツと息を飲み、手で胸元を押された。ヨコ（きつとお馬の上で抱きしめられるんだわ！） ホウ「一緒に、乗つていただけませんでしょうか。ヨコさん」 ヨコは真摯な眼差しでホウを見つめつつも、揺れ動く気持ちに翻弄されていた。ヨコ（……ダメよヨコ、私にはあの人があるが、夫が、家族が……）

(704)

そしてヨコは意を決し、恐る恐るホウと向き合つた。ヨコ「私が馬車で、貴方がお馬さん。それでも……良いですか？」 それは否定の言葉だった。貴方とは恋仲になれない。でも、親しい間柄でいたい。そんな我儘を、ヨコはあえて押し通した。ホウはその答えがわかつていたかのように答えた。ホウ「もちろん、よろこんで…」

(705)

そして二人はメリーゴーラウンドに乗つた。騎士のように白馬にまたがるホウ。お姫様のように馬車に揺られるヨコ。一人の間の距離は2メートルばかり。さうやかなメロディーにかき消されるから、二人の声は通らない。（ツイッターが使えば、問題なく話せるはずなのに……） 二人ともそう思わずにはいられない。

(706)

二人の時はゆっくり流れた。一人が恋に関するあれこれにを思い尽くすに十分な時間をかけて、メリーゴーラウンドはめぐり巡った。精一杯胸を張つて白馬を駆る青年を、馬車の中で物憂げな表情を浮かべる美しき淑女を、何人かの幼い子供が指をくわえて見送つた。そしてメロディーの終わりとともに、一人の夢は覚めるのだった。

(707)

ホウは白馬から降りて馬車へと向かい、ヨコの手をとり広場に下

りた。ヨコ「すごく楽しかった。これに乗るのは本当に久しぶりなの」しかしその言葉には“でも昔はよく乗ったの”というニコアソスがこもってしまった。ホウ「ええ……僕は初めてでした」ヨコはただうつむいて、車へと歩いていった。

(708)

帰りの車の中はとても静かだった。プロポーズをするために招待し、されるために招待された二人。その目的が達成され、その結果が決まってしまった今となつては、どんな言葉も白々しく響くだけ。「一人ともそれを承知していた。ヨコ（まだ私の倍は若いこの人が、どうして私のことなんか……）ヨコはため息を抑えるので精一杯だった。

(709)

まもなく車はイズミ家に到着した。二人とも車を降りて、玄関の前で向き合つた。あとは笑顔で再会の約束をするだけだ。ホウ「今日は忙しい中、本当にありがとうございました」ヨコ「こちらこそ。とても素敵な一時を過ごさせてもらいました」ホウ「こんなものでよければ、またいつでも招待……いたします」

(710)

ヨコ「うん。あ、そうだ。今度はうちに遊びに来ません？ チカコさんも」一緒に。旦那が単身赴任なものだから、昼間はちょっと寂しいの」ホウ「……はい、是非、伺わせてもらい……」そこでホウはこらえ切れなくなつてしまつた。空を見上げて涙を流してしまつた。ホウ「ああ……神さま……」

(711)

ヨコ「ホウさん……」ホウはこう思つていた。自分はこの先、人として異性と結ばれることはないだろう。なぜならば僕の精神は、

GPT-Lを覗いてしまったことで、神のT-Lに触れてしまったことで、社会的生物としての階梯を飛び越えてしまったのだから。ホウ「僕はもう、誰からも愛されないんだ……」

(7-1-2)

ヨコ「そんなことないわ！」 そう言つてヨコはホウの腕を掴んだ。ヨコ「しつかりなさつて！ 貴方はすぐ素敵なお人よ！ もうはつきり言つちゃうけど、わたし、これまで付き合つてきた男は数え切れないくらいだけれど、その中でも貴方は、ダントツよ！ だからさきつと間違いないわ、自信を持つて！」 ホウ「よ、ヨコさん……」

(7-1-3)

そういう次元の問題ではないんだけど…… そう思いつつもホウは、あまりになりふり構わないヨコの姿に、どことなく心温まるものを感じた。ヨコ「他にもっと若くて素敵な女の子が、貴方に声を掛けでもらえる日を待つてます。だから私なんかのために絶望しちゃダメ」 ホウ「……はい」

(7-1-4)

ヨコ「うーん、まだ納得していない様子なのね……。じゃあ、こうしてあげる」 ホウ「えっ！」 そしてヨコはそつとホウの体を抱きしめた。包み込むように優しく。ヨコ「一回限りの大サービスよ。私は貴方の二倍も年上で、夫も子供もいて……わかるでしょ？」
「これ以上は……」 ホウ「……ヨコさん」

(7-1-5)

ホウはただ素直に、ヨコの善意に身をあずけていた。しかし彼女が自分の“一倍年上”とは感じていなかった。ホウには全てが自明のことのように思えていた。彼女が自分を振ることも、こつして慰

めてくれることも知っていた。自分はもう、普通の人間が何度生まれ変わつても達することのないような境地に、すでに在るのだ……。

(716)

ホウ（……僕はもう、誰からも愛されないかもしねりない。でも、僕が誰かを愛することは出来るんだ）ヨコが抱擁を解くころには、ホウの涙は乾いていた。一人はもう一度、互いの姿を見つめなおす。ヨコ「こんなところ、もし家族にみられてたら大変ね」ホウ「ええまつたく、すみませんでした……ははは」

(717)

ホウが笑つたことで安心したヨコは、バイバイと少女のように手を振つてから、家に入つて行つた。ホウはその姿を爽やかな顔で見送る。そして達観したように空を見上げてから、車に乗り込んでその場を後にして。しかし 自分は全てを知つていると思い込んでいた彼の眼に 道端で呆然と立ちすくむアフレルの姿は映らなかつた。

(718)

ノルコ（……大事件だわ！） 帰りのHRの時だった。ノルコはその場に棒立ちになり、カタカタと震えていた。一体何がおきたのか？ レイタ「すっげー！ ノルコすっげー！」 先生「やつたわね！ ノルコちゃん！」 リン「こんなことが弦音小で起るなんて！」 カズノリ「よ、世の中、わ、わからないね！」

(719)

突然だが、ノルコは『国 会 議 員』に選出された。公衆洗面所におけるツイッター常設に関する法律、通称『トイレ法』の法案審議に参加することになったのだ。ノルコ（どうしてこうなったあ！？） どうしてもこうしても、ツイッターの選挙管理システムに選出されてしまったのだから仕方ない。

(720)

パチパチと拍手が降り注ぐ中、ノルコはひとまず立ち上がりてペコペコと頭を下げた。そして座った。先生「というわけで、このクラスから国会議員が誕生しました！ なんと弦音小学校が始まってから3人目の国会議員さんですよ！ みんなでノルコちゃんを応援してあげましょうね！」 パチパチパチパチ。

(721)

2100年現在の日本では、全ての国民に被選挙権が認められている。国会議員は法案ごとに選出され、その法案が議決されれば解散となる。それぞれの法案にとつて一番ふさわしい人達を集めて審議するところ訳だ。つまり総選挙は切り無しに行われるわけで、

投票活動は「」へ日常的なものになってしまった。

(722)

選挙の仕組みは単純で、みんながみんな誰でも好きな人に投票して、その投票数を累積していくというものだ。普段、ノルコのクラスで一番累積投票数が多いのは、色んな分野で何かと注目されるヤマオ君その人である。しかし当のヤマオ君は、どうこうわけか今まで誰にも投票してこなかつた。

(723)

「なにがビックリしたかって、ヤマオがノルコに投票したってことだよなー」 ルイの言う通り、ヤマオの投票によつてノルコの累積投票数が一気に増加した。システム上、ヤマオがノルコに投票したことはノルコにしかわからない。ノルコはヤマオの同意を得た上で、それをみんなに伝えたのだ。

(724)

「あとやつぱ、呑けなくなつたせいで、変に注目されたつてのもあるんだろうなー」 リン「うんうん」 ノルコ（それは喜ぶべきことなのか、さてはて） 確かに、投票してくれた人を調べてみると、知らない人がずいぶんいる。あのミギノウエという人もノルコに投票している。ノルコ（でもぶつりやけメンドクサイなあ）

(725)

ノルコは家の前でバイバイと手を振りみんなと別れ、そそくさと家の中に入った。リビングには母のヨコがいた。テーブルに座つて両肘をついて、どことなく陰鬱な雰囲気だ。ノルコ（あれ？……朝はあんなに機嫌よかつたのに） ノルコは何となくそつとしておいた方が良いと思って、そのまま素通りした。

(726)

洗面所で手を洗つてうがいをする。アフレルのコップと歯ブラシ
が田の前にある。ノルコ（お父さん、今頃なにしてるかな?）ノ
ルコはぬるま湯にうがい薬をいれて丹念にうがいをする。ガラガラ
ガラガラ……べつ。タオルで手と顔を拭ぐ。特に用はないのだけど
トイレについて、便器が清潔かどうか注意深く確認する。

(727)

ノルコ（トイレ法……か）それはトイレにツイッターを設置で
きるようにするための法案らしい。ノルコはそのメリットについて
考えてみる。ノルコ（ツイッターと便器のセンサーをつないだら、
いつでもトイレが綺麗かどうか確認できるかな?）それはそれで
便利かもしれないとノルコは思つ。

(728)

ノルコの将来の夢は「良いお嫁さん」になることだ。『くありふ
れた女の子の夢。でも女として生まれて、それ以上に叶える価値の
ある夢があるだらうか? そうノルコは思つてゐる。良いお嫁さん
とは、自分達の暮らす家を最高の状態に保つことのできる人であり、
トイレの管理はその最重要項目の一つなのだ。

(729)

ノルコ（あつ、そうだ）国会議員になつたこと、お父さんとお
母さんに知らせなきや。そのことを思い出したノルコはトイレを後
にし、二階の浴室へと上がつていつた。そしてPCを立ち上げ、ツ
イッターを起動させた。ゲン「ノルコはこっかいぎいんにえらばれ
ましたー」ノルコ（あれ、フォロワーさんがまた増えてるな）

(730)

ノルコはこっかいぎいんにえらばれましたー……ノルコはこっか

いきいんにえらばれました……。ノルコはこつかいぎいんにえらばれました……。そのツイートは静かに、しかし確実に拡散していった。野を越えて山を越えて、電子の海の遙かまで。口の穴をくぐり抜け、遠い天の彼方まで。

(731)

ヨコ「ええっ？！」ヨコがそのツイートを読んだのは、呴かれてから2分30秒後だつた。ヨコ「え？　ええー？！　なんでノルコが？！」お、お父さんにも知らせなきや……あれれ？」ヨコがアフレルの状況を確認すると「オフライン」になつていた。ヨコ「あらうら、仕事の関係かしらね？」

(732)

チカコ「あらあらまあまあ」ツイッター互助会のチカコさんがそのツイートを読んだのは呴かれてから4分01秒後だつた。チカコ「ホウー、大変よ、ノルコちゃんがね！　国會議員に選ばれたつて！」しかしホウは部屋の中でGPTを見て氣絶していた。チカコ「もひー　まったくこの子つたら」

(733)

クメゾウ「ブフーッ！」盛大に麦茶吹いたクメゾウ。ウメナ「きつたないな！　何をそんなに驚いて……なんだつてー！」二人がそのツイートを読んだのは、呴かれてから10分49秒後だつた。クメゾウ「ゲツフ！　ゲツフ！　とんだビックリ水だがな！」ウメナ「大変なことになつたね……法案のこと調べねば」

(734)

ユウタ「うわっ、すごい！　ノルコお姉ちゃんおめでとう！」みんなとサッカーの練習をしていたユウタが、そのツイートを読んだのは呴かれてから15分55秒後だつた。カントク「こらユウタ

「、よそ見するなー！」　ユウタ「すみません！　友達が国會議員になつたんですよ！」　カントク「なにー！　おいみんなー！　練習中止だ！」

(735)

カイザワ「小学生議員キター！」　ヨシシゲ「キタアアアア！」
ギンジ「イエーツ！」　養老会の集まりでゴルフをしていた3人がそのツイートを読んだのは、咳かれてから18分後だった。その場にいたお爺ちゃんお婆ちゃん全員がゴルフを中断し、法案についての井戸端会議を始めた。カイザワ「トイレは生活の基本じゃ！」

(736)

クサヨシ「イズミ・ノル」……おお、アフレル君の娘さんか、なんと「割烹着姿でだし汁の味を見ていたクサヨシがそのツイートを読んだのは、咳かれてから28分30秒後だった。クサヨシ「そして彼女は……我が敬愛のイズミ・ゲン御大、そのひ孫さんでもあつたか。うーむ、世間とは狭いものだ」

(737)

イイズカ「アフレルのやつ、まだログオフしてやがるぜ」　ハッブル「ナンカ変ジャナーヴ？」　二人がそのツイートを読んだのは、咳かれてから1時間32分後、クサヨシから連絡を受けてのことだつた。イイズカ「いくらあいつが絶倫だからって、このログオフ時間は異常だ」　ハップル「ナニやつてんだろうネ？」

(738)

そのころノルコは、ゲンの名前でつぶやいたツイートが、ビックリするほど沢山の人々に読まれていてことなど露も知らず、母と弟の三人で夕食後の家族会議を開いていた。ヨコ「さて、まずは当選おめでとう、ノルコ」ワク「コングラツュレーション!」ノルコは（いやはや……）といった感じで頭をかいた。

(739)

ヨコ「お父さんと連絡がつかないんだけど、きっとお仕事の関係だと思うの。だからひとまず3人で考えましょ?」ノルコとワクはうんうんと頷く。3人は「トイレ法」を可決すべきかどうかの検討を始めた。ヨコ「まず!」この法案の発起人はミタ・セイさん。32歳の男性よ。発起人としては、かなり若いほうね

(740)

ヨコ「出身校はケイオウで、法学部を出ているわ。とても頭のいい人なのねえ。しかも会社の社長さんよ? この若さで本当にすごい人だわ」本当に、思わず唸ってしまうほどすごい経歴だと、ノルコとワクは思った。ワク「ホワッソ・カンパニー?」ヨコ「B・ソーシャルの会社よ」

(741)

B・ソーシャルは社会生活を便利にしたり快適にしたりするためのプログラム製品の総称である。ワクがはまっている「救星機神ガンバール」もB・ソーシャルの一種だ。バイオツイッターのネットワーク環境に上乗せする形で使用される。バイオツイッターをOS

として駆動するアプリケーションソフトのよつなものだ。

(742)

バイオツイッターそのものは誰でも自由に好きなように使っていい。しかし、B・ソーシャルの開発や使用には様々な法的制限が加わる。そのためソーシャル・アプリの開発者には、高度な情報工学の知識のみならず、法学、社会環境学、心理学など、広範にして深い知識が必要とされるのだ。

(743)

ノルコ（ふむむ……ただものではないわ） やっぱり法案の発起人になるような人はすごい人だとノルコは改めて思った。そんなすごい人の考えたことを、平凡な小学生である自分にいつたい何が言えるというのか？ ハロ「『さわやか日常』っていう会社ね。通称サワニチ。あの『不審者チェックカー』もここの中品ね」

(744)

ハロ「ところでノルコ、実はつぶやき治つてたりしない？」 ノルコ（え？） いきなりだなあ、なんだらう？ そう思いつつもノルコは、頑張つて呟くとしてみた。ノルコ「…………？」 ハロ「無理そう？」 ノルコはうなづく。ハロ「そつ、残念ねえ。でもきっともうぐるから大丈夫よ！」

(745)

母がやけに確信めいてそう言つので、ノルコ少し首をかしげる。ノルコ（あつ！） その時、重要なことに気づいた。ノルコ（つぶやけなくても国会に出られるの？！） ハロ「国会までに治ればいいんだけど、もし治らなくても大丈夫よ。みんなの議論をちゃんと聞いて、きちんと自分で判断して決議の投票すればそれでいいんだから」

(746)

ノルコ（そうだったのかー） ノルコは国會議員というと、あれこれと難しい話し合いをしなければならないイメージを持っていた。しかし言われてみれば確かに、国會議員の最終的な仕事は議決をすることなのだ。ノルコはトイレ法に関して最終判断を下すことを、多くの人達から任されたのだ。

(747)

ヨコ「国会決議の仕組みについておさらいしておきましょうか。まず、誰かが発起人になつて法案を常設議会に出さなきゃいけないのね。発案自体は誰でもなれるけど、だいたい企業の役員さんとか、大学の教授さんとか、市民団体の人とかがやることが多いわね。とにかく法案を作つて常設議会に提出するのよ」

(748)

ワク「ジョーセツギカイ?」 ヨコ「常設議会っていうのは、提出された法案を審査して、優先順位をつける議会のことね。月に一回、何もなくても選挙をすることになつてるでしょ?」 ワク「オーライエス!」 ヨコ「常設議会には他にも、政府や裁判所を生暖かく見守るお仕事とかがあつたりするのね」

(749)

ヨコ「そして常設議会で決められた優先順位の高い法案から順に、議決国会で決議していくのよ。ノルコが選ばれたのが『トイレ法案衆院議決国会』で、これとは別に『參院議決国会』というのがあるわ。これは、衆院議決国会での議決が、本当に間違のないものかどうか、改めて審議するための国会なのね」

(750)

ノル口（なんだかコムズカシイ話だな）　ヨ口「これは二院制といつて、議会制民主主義が確立したころから連綿と続く、古式ゆかしき伝統なのよ。何事もよく何度も考えてから決めなさいっていう、先人達のありがたい教えなのね。だから一人ともちゃんと覚えておいたほうがいいわよ」　ワク「イエア！」

(751)

ノル口（シユーラインとサンラインは何か違うのか？）　ヨ口「ノル口、頭の上にクエスチョンマークがってるわよ？」　いい質問ね。衆院は庶民が選ばれる傾向があつて、参院はインテリさんが選ばれる傾向があるわ。これも昔の一院制の名残ね。でも権限は衆院の方が強いのよ」　ノル口（ふむふむー）

(752)

ヨ口「じゃあ、いよいよ本題に入るわよ。トイレ法案の中身！」
そう言つてヨ口は、法案の条文をテーブルの上に表示させた。ヨ口「本法案は、公共領域における犯罪抑止を目的とし、そのために必要となるバイオツイッター関連機器を、公衆トイレ、及び公共施設のトイレの内部に設置することを許可するものである」

(753)

ノル口（やけに長つたらしい文章だなあ）　それがノル口の最初の感想だった。そしてその次に思つたことが。ノル口（ん？　公衆トイレ限定なの？）　ヨ口「公共施設つてことは、学校とか市役所とかね。あと野球場なんかも。とにかく不特定多数の人が使うトイレにツイッターを設置できるようにしましょつつてことね」

(754)

ワク「コンビニも？」　ヨ口「そうね、入るかもね。スーパーとか映画館とかもきっとそつなるわね」　何となく外出しにくくなり

そうだな、とノルコは思つ、がしかし。ヨコ「お外で急にトイレに行きたくなつても、ツイッターが付いてればきっと安心ね」ノルコ（…？）母とは意見が食い違つていいよつだ。

（755）

ノルコは知らず知らず表情が複雑になつてしまつ。ヨコ「ん？ノルコは何か思うところがあるのね？」ノルコはハツとなつて顔を上げた。近づくる、何も言わなくても色々と伝わるようになつてしまつた。ノルコは腕を組んでしばし考え込んだ後、大きく一つ「うむー！」といつた感じで頷いた。

（756）

ヨコ「まあ、そんなに簡単な問題ではないかもしれないわね。トイレにツイッターがあると最低でも『いつ、誰が、どれだけそこにいたか』ってことがわかってしまうものね」だからこそ犯罪抑止の効果があるのだが、そのぶん人は公共領域におけるプライバシーを失つてしまふことになる。

（757）

ヨコ「ただ、この法案で重要なのは、ツイッター設置を『許可する』って所よね。許可なによ許可。義務じゃないわ。だからきっと気の利いたお店とかなら、ツイッターのあるトイレとないトイレの両方を作ってくれるはずよ」ワク「イッジ・ソー・ワンドフル！」ノルコ（トイレが四つに分かれるつてこと？ エー？）

（758）

これまでの母の話でノルコが感じたことは三つ。母がどちらかといえばこの法案に賛成だということ。世の中にはトイレへのツイッター設置を待ち望んでいる人も少なからずいるのだろうということ。そして、トイレが四つに分かれるかどうかは、法案を成立させてみ

なことわからないんじゃないじゃないか、とこうじとだつた。

(759)

三口「ワクはどう思つ? 賛成? 反対?」 ワク「ええ……」
三口「まだわからない?」 ワク「ガッデム!」 三口「うふふ
つ、じんなど普段考えないものね。でも大事なことだからこれを
機によくよく考えてみるといいわよ?」 そんなこんなで夜も更け
てきたので、今夜はこの辺でやめることにした。

(760)

その後ノルコはお風呂に入り、歯を磨き、明日の学校の準備をし、自室の床をコロコロで丹念に掃除した。そして寝る前に部屋T-しを確認しようと、耳たぶをクリックした。ノルコ（あれ？）部屋T-しが開かない。どうやら壊れているようだ。ノルコは部屋のドアのすぐ横に取り付けてある部屋用T-しを手にとった。

(761)

据え置き用のT-しは、だいたいマッチ箱くらいの大きさだ。コンビニとかスーパーとかで簡単に入手できる。内部に組み込まれた各種センサーが部屋の大きさを認識し、部屋の範囲内でやりとりされる情報をT-し上に記録していく、いわゆるゴビキタスコンピューターの一種だ。これを部屋に取り付けることが、現在の常識になっている。

(762)

ノルコ（明日新しいの買つてこなきや） 部屋用T-しは電池が切れたり、踏んずけて壊したりしても大丈夫な仕様になつている。すぐ近くに別のT-し機器があれば、そこに全てバックアップされる。ノルコが明日やるべきことは、部屋用T-しを買ってきてスイッチを入れて部屋に置く、たつたそれだけなのだ。

(763)

ノルコの部屋のT-しは、子供の部屋にふさわしい設定がすでにされているタイプだ。デザインも花柄だつたりウサギの絵が描かれていると、いかにも子供用っぽい。ノルコはその部屋T-しをひつ

くり返して、その裏側を見てみた。「サワーチェレクトロニクス」と書かれたステッカーが貼つてあった。

(764)

ノルコは机の上のひよこ型BOT「ピコッター」にアクセスし、今はもう電池が切れてしまった部屋「」の、情報バックアップを引き出した。ノルコ（ほおほ） サワーチェレクトロニクスは、あのトイレ法の発起人ミタ・セイさんが経営する「さわやか日常」の関連企業だった。ノルコ（世の中せまいなあ）

(765)

ノルコはその情報をたどりて「さわやか日常」社のビジターハウスにアクセスし、そこから社長室「」に飛んだ。ミタ・セイさんは今日の昼すぎに一時間ほど社長室について、秘書の人といくつかの会話をしたようだ。ノルコはそのハシをまじまじと眺める。ノルコはさながら、さわやか日常の社長室にいるようだった。

(766)

セイ「きみの教えてくれたレストラン、すごく美味しかったよ。先方もずいぶんと気に入ってくれたみたいだ。何より知名度が低くて予約しやすいからね。またあんな隠れ家的な場所を見つけたら、是非とも教えてほしいよ」 レオン「お役に立てて何よりです。足で検索すると結構見つかるんですよ」

(767)

セイ「そりなんだらうね、あれはネット検索じゃまず見つからないお店だよ。藪とか茂みとかで入口を隠してるレストランなんて初めて見たね。とことん目立たないようになって店主の配慮がいたるところに伺えた。あるんだねえ、あんな店が」 レオン「とつておきですから。あと、あまり恥かれない方が」

(768)

セイ「おつとそつだつた。うつかりしてたよ、せつかくの隠れ家に行列でも出来たら大変だ、はははっ」 レオン「はい。ところで、取引の方はうまくいきそつなんですね？」 セイ「ああ、先方はこちらの提案にとても好意的だつた。予定通り進めてかまわないよ」 レオン「かしこまりました」

(769)

ノルコ（お仕事の話？ レストランの話？） 社長室Ｔ－Ｌをちまちまと読んではみたが、それがどうこうやり取りなのかは今ひとつわからなかつた。B・ソーシャルの会社の社長さんが、誰とどんな取引をしているのかなど、ノルコには想像もつかなかつた。ただ、人柄だけはなんとなくわかつた。ミタ・セイさんは明るくて誠実そな人だ。

(770)

田口「よるほーよるほー」 ノルコ（あつ） ノルコは時計を見た。夜の十時を回るところだつた。ノルコ（寝なきや、あつ？） キンッ……ノルコの頭に頭痛が走る。ノルコ（なんか頭痛が痛いよ？） ノルコはキンキン痛む頭を、両手で「ぎゅう」と圧迫する。ノルコ（治つた！） そして何も気にせず眠りについてしまつた。

(771)

深夜11時。まもなく終電もなくなるという時間に、ギンザの街をうろつく男が一人……。アフレル「うい……ヒックッ」 ずいぶんと泥酔しているようだ。顔は赤いのを通り越して白みはじめており、髪の毛もボサボサだ。ようよると千鳥足でまつすぐ歩くこともままならない。アフレル「ああ月がキレイだな、アハハ」

(772)

昼間、ヨコの浮氣現場を田撃した（と勘違いした）アフレルは、そのまま亥音駅に引き返し、あてもなく彷徨つた。電車を何本か乗り継いで、どうこつわけか海芝公園に行き着いた。神奈川県の鶴見工業地帯にある海芝浦駅は、昼間は利用者が殆どいない。出来るだけ人のいない電車をと、乗り継いでいった結果だった。

(773)

その名の通り、海の上に浮かんだ芝地のよつな作りの海芝公園。アフレルはひとまずベンチに腰掛けで海を眺めた。ときおり飛び魚がぴちゃんぴちゃんと跳ねる海原。その向こうに見える赤茶けた古い工場。アフレル（まるで世の果てだ……）そう思うアフレルの背後には、実は世界トップクラスの電気メーカーだったりするのだが。

(774)

アフレルはそのままたっぷり1時間、そのまま海を眺めていた。子供のころから続く、ヨコとの思い出が脳裏に駆け巡っていた。アフレル（思えば僕の人生は、失恋そのものだった……）物心ついたころから思いを寄せていたその少女は、アフレルの目の前で次々と知らない男たちのものになつていったのだ。

(775)

幼稚園児の時、知らない少年と手をつないで歩いているヨコを見て、アフレルはショックで体重が半減してしまった。小学3年の時ヨコが知らない友達とキスをしたことを知つて1週間学校に行けなくなつた。中学1年の時、ヨコに恋の相談をもちかけられて、毎晩逆立ちして過ごすほど苦悶した。

(776)

しかしアフレルは、めげずにその試練を一つ一つ克服していった。そして高校生になるころにはそのカタルシスをバネにして勉学に励めるまでになっていた。アフレル（だから今もきっと……）ヨロが浮気したという現実をバネにして、より仕事に精を出すことが出来るはずだ。アフレルは何度もそう自身に言い聞かせた。

(777)

が。アフレル「…………」何かが事切れていた。アフレルは何も言わずにバイオツイッターをログオフした。両耳をクリックしたまま5秒間。たったそれだけでアフレルは、この世界の誰ともつながらない状態になった。アフレル「…………ふつ」ほくそえんでも一人、その声はさざ波の音に書き消されていく。

(778)

やがて閉園時間が近づいてきたので、アフレルは海芝浦を後にした。途中、鶴見駅のキオスクでワンカップ酒を大量購入した。キオスクのおばあちゃんはアフレルがログオフしていることに気がつかなかつた。気づいてたら止められただろう。そしてアフレルは電車に乗りながらお酒を飲んだ。それから先の記憶は定かではない。

(779)

深夜11時20分。うらぶれた夜のギンザを歩く男が一人。もう電車はなくなつた。ログオンすれば車を呼べるけど、そんなことはしたくなかった。街角にはもう誰も歩いていない。店も開いてない。時折わら草の塊が風に吹かれて、砂っぽいアスファルトの上を転がつていった。まるでやすい西部劇のような光景だつた。

(780)

歩きつかれたアフレルは、何に使われているかもわからない、薄汚れたビルの隙間にうずくまつた。かつてバブルと呼ばれた時代が

あつた。ジギンザは世界の中心だつた。地球上でもつとも高貴で、華やかで、富に溢れた場所だつた。人々はこの場所にありつたけの金と見栄とを持ち寄つて、競うよつに消費したのだ。

(781)

だがそれも昔の話。ありつたけの金と見栄は、ありつたけの借金と無氣力に変わり、貨幣制度に基づいた大量消費社会の終焉とともに、この街は歴史の遺物となつたのだ。東京の至る場所が農地化され、人々は地方に分散して暮らすようになり、そして最後にはお金そのものが地上から消えうせた。

(782)

ヒヒーン　どこからともなく、馬のいななきが聞こえてきた。
アフレル（……誰か馬を飼つてゐるのかな？）　心なしか空氣中に、
獣じみた匂いが感じられる。昔々誰かが言つていた『ギンザでベコ
飼う時代』というものが、もうそこまで迫つてきているかのようだ。
アフレル（ああ……僕らはいつたい、どこへ行くのだらう）

(783)

アフレルは馬のいななきがどこから聞こえてくるのか気になつた。
その馬の姿を見てみたいと思つた。ひとまず立ち上がり、いななき
が聞こえる方角へヨロヨロと進んでいく。ヒヒーン、ブルルル
そう遠くはないようだ。そしてなんとなく馬小屋くさい。アフレ
ル「ここを曲がつたところか……？」

(784)

目の前にほのかな明かりが差し込んだ。ランタンの明かりだ。ボ
ロボロのビルの間に、木造の馬小屋がある。ちょっと冗談みたいな
光景だなとアフレルは思った。丸太を大雜把に組んだだけの簡単な
馬小屋に馬が2頭つながれているのだ。アフレルは夜の街灯にむら

がる夏虫の「」と、その光景に引き寄せられていった。

(785)

田の前には間違いなく馬がいた。栗毛の馬が一頭、つぶらな瞳でアフレルを見つめている。気にするわけでもなく、嫌がるわけでもなく、ただアフレルがそこにいることを認めている。アフレル「いい馬だなあ」 そして馬がいるところは、飼い主もどこにいるということだ。いつたこと? 、

(786)

すぐ隣のおんぼりビルに田をやると、看板に一つだけ明かりがついていた。地下一階『 B A R オールドウェスト』 バー? いつた誰が来るんだろう? そう思いつつも気になつて仕方なくなつたアフレルは、馬に別れを告げてビルの階段を降りていく。その先にはいかにも西部劇に出てきそうなあの扉、スイングドアが待ち構えていた。

(787)

スイングドア。押しても引いても開く、扉というよりはただの中仕切りに近いような代物だ。アフレル（なんでギンザにこんな西部劇なお店が？）しかし、やけに威圧感のある入り口だった。中には荒くれどもがたむろしていて、よそ者は容赦なく暴力沙汰にまきこまれてしまつような。そんな威圧感だ。

(788)

アフレル（……ふつ、まあそれも面白いかもね）もういつ東京湾の魚のエサになつてもいいような心境だつたアフレル。その扉のかもし出す威圧感など、今の彼にはどうでもいいものだつた。手で開けて入るのも芸がないなと思ったアフレルは、そのドアを背中で押し開けた。しかし千鳥足がからまつて、転げるように入してしまつた。

(789)

そしてそのまま、ゴロんと倒れこむ。古びた木の床がギシギシとなつた。バーへの進入の仕方としては、おそらく最低な部類に入るだろう。アフレルは恐る恐る顔をあげた。マスター「おやまあ」カウボーイハットを被つた老年のマスターがグラスを磨いていた。マスター「とんだよそ者のおでましですな、ほほほ」

(790)

マスターはそのまま無言でグラスを磨き続けた。アフレルはその姿をボーッと見つめた。店内はとても狭く、テーブル席が二つだけ

あつてあとはカウンター。椅子の代わりに丸太の横木が取り付けられている。アフレル（あの横木、座りにくそうだな……）アフレルはしばらく田をぱちくつとさせていた。

(791)

マスター「お座りになつたらどうです?」アフレル「……はい」言われてアフレルは立ち上がる。そしてカウンターの前の横木をまたいで座ろうとした。マスター「ああ、まだがなくてもいいです。こちらに背中を向けて結構」アフレルは何もいわずにそれにならつた。カウンターの反対側を向いて座り、上体だけマスターの方を向く姿勢だ。

(792)

アフレル「なんだか変な感じだ」マスター「慣れるところが中タイケてるんですよ? 今のあなたはさながら、さすらいガンマンです」はあ、しかし残念ながら僕のピストルは折れていますが……とアフレルは心の中で呟いた。マスター「失礼ですが、お金はお持ちですか?」アフレル「……え!?

(793)

予想外の言葉だった。この国の貨幣制度は、アフレルが生まれるずっと前になくなつたのだ。マスター「その様子だとお持ちではないのですね。ログインもせず、お金も持たず。冷やかしもいいところですね」アフレル「すみません……でもお金なんて、今時どうやって手に入れるんです?」

(794)

マスター「おや、ここにいませんが?」そういうつてマスターはレジから一万円札を取り出した。福沢諭吉の絵が描かれている。アフレル「!? 本物? 初めて見た……」マスター「まあ無理

もありません。私が子供の頃はまだ使えたのですがね。時代の流れとは恐ろしいものですね」「アフレル「はあ……」

(795)

アフレル「この店ではまだお金のやりとりを続けているんですね。お金なんて遺残国債の平衡処置をするためだけのものと思つてた……」「マスター「まあ、おままで」とみたいなものですよ。昔を偲ぶ者達同士のね。何か飲みますか? つけておきますよ?」アフレル「つ、つけ?」マスター「貸しにすることです」

(796)

アフレル「お、お任せします」マスター「かしこまりました」マスターはそう言つて大きめのグラスを取り出した。スコッチを注ぎ、水で割る。最後に氷を一個浮かべる。マスター「どうぞ」なんの変哲もない、ただの雑な水割りだった。冷えてもいいない。のどが渴いていたアフレルは、一気に半分ほど流し込む。味も薄かつた。

(797)

アフレル「貸しつつ、お金で返せばいいんですか?」マスター「ええ、どんなことをしてでもお金を手に入れてください。もしぐは今すぐログインしてください」アフレルは「……ぐぐ」とひとつ唸つてから。アフレル「……必ずお返しします」と答えた。マスター「ほほ。よほどログインしたくないんですね

(798)

アフレルはそれ以上なにも言わず、店内をちまちまと眺めながら水割りを飲んだ。店内の内装はおおよそ木製だ。しかも、朽ちた廃屋から拾つてきたような、小汚い木材ばかりだった。店内をほのかに照らすランタンからは、油の匂いがもれています。アフレル「ケロシ

ンの火が……」マスター「よくおわかりで」

(799)

アフレル「油はしそつちゅうさわつてゐるから」マスター「なるほど」アフレル「ここ木材はどこから集めてきたの?」「マスター」「そこかしこから」アフレル「ところでこの水割りおいしいね」マスター「それは何より」アフレル「マスター、トイレ借りていい?」マスター「そちらです」

(800)

アフレルはトイレに入り、ゆっくりと放尿した。すいぶんと溜まつていたようで、いつまでたっても途切れなかつた。生まれてこの方、こんなに長く放尿したことなどないというくらい、ゆっくり時間をかけて用をすませた。トイレを出るとマスターがお絞りをくれた。マスター「トイレに手洗いがないもので」

(801)

アフレル「マスター、外の馬つてマスターの？」 マスター「ええ、趣味で飼っています」 アフレル「とても綺麗な目をしていました」 マスター「馬ですから」 アフレル「乗つたりするの？」 マスター「ときおり」 アフレル「ところでマスター寡黙だね」 マスター「それほどでもございません」

(802)

アフレルは水割りを飲みきつた。マスター「おたばこは」アフレル「吸いません」マスターはグラスを下げてカウンターを拭き、代わりに小さなコップを置いて水を注いた。アフレルは軽く会釈をした。アフレル「マスター」マスター「なんでしょう」アフレル「僕つて困つたお客様かな?」

(803)

アフレルはマスターに言われた通り、カウンターに背を向けて座っていた。だからマスターの表情はわからないはずだつた。しかしアフレルにははつきりわかつた。マスターが背後で、自信満々の表情を浮かべていることが。マスター「あなた様なぞ、困った客のうちには入りませんなあ」

(804)

アフレル「む、まだまだ上がいるつてこと?」マスター「ええ。世の中には実に凄絶な困ったお客様方がいる。他の客にからむ。延々クダを巻く。ずっと寝てる。大声で自慢話ばかりする。嘔吐する。ひたすらいちゃつく。ウーロンハイありませんかって聞いてくる。實に様々です」アフレル「ウーロンハイ?」

(805)

マスター「ええ。そして私が無いといふと、『ちつ、ウーロンハイも置いてないのかよ!』と吐き捨てて帰つてしまわれる。本当に困つたお客様ですよ」アフレル「……バーで飲むお酒じゃないね」マスター「まったくです。お子様用のミルクは出せても、ウーロンハイはちょっとお出しできません」

(806)

マスター「いやしかし。せめて不満を心のうちに留めておいてもらえれば良いのです」アフレル「え?」マスター「本当に不満に思つているのなら、言わなくともわかるんです。それが、バーが寡黙な場所である意味だと私は考えてあります」アフレル「……マスター」マスター「何かお作りしましょうか?」

(807)

アフレル「お任せします」マスター「かしこまりました」そ

う言つとマスターは、アフレルの背後でそそくさと作業をはじめた。
「どうやらカクテルを作るようだ。アフレル（何作ってくれるんだろ
？）アフレルは、もし自分がマスターだったら、何をこの客に作
つてやるだろうかと考えてみた。

(808)

「一日酔いに気をつけなさい」という意味で「ラッディー・メアリー
？」もうすぐ12時ですよという意味で「シンデレラ？」今の自分の
姿はまさしくこれだという意味で「ソルティ・ドック？」もうこれで
最後だよという意味で「エイズ？」まだふてくされるには早いという
意味で「ギムレット？」あたつて碎けるという意味で「カミカゼ」？

(809)

マスター「どうぞ」言われてアフレルはカウンターの方を向く。
置かれていたカクテルグラスには、うっすらと青みのある液体が注
がれていた。アフレル「……なんだろ？」マスター「一息にグイ
っとやるタイプです」飲み方まで指定されてる？どんなカクテ
ルだろ？アフレルは言われるまま、一気にそのカクテルを飲み干
した。

(810)

アフレル「?!@_#\$%^&_!」瞬間、すさまじい刺激が
アフレルの鼻腔を襲う。とにかく滅茶苦茶な味がした。アフレル「
げほっ！ げほおっ！ な、な、なんですかこれ！」頭に酒気が
駆け上がり、視界がぼやけ、平衡感覚がマヒしていく。相當に強い
カクテルだ。マスター「アース・クエーカでございました」

(811)

アフレルはひつたくるようにしてゴップを取り、「ゴクゴクと水を

流し込む。しかし、アルコールで熱くなつた胃の底は全然おさまらない。アフレル「ま、まさかこんなすごいのが……ゲフッ、ゲフッ」

マスター「元気でました?」アフレル「むしろ死にそうですよ！」

マスター「またまたご冗談を」

(812)

マスターが面白そうにヒックヒと笑つたので、アフレルは流石に危機感を覚えた。もう本格的にお帰りになつたほうが良いようだと立ち上がる。マスター「まだまだ後から効いてきますんで、お早めにタクシーを呼んだほうが良いですよ」アフレル「そ、そそ、そうします……」うつ「アフレルはしぶしぶ両耳をつまんだ。

(813)

アフレル「一、一馳走様でした……」マスター「はいお気をつけて。つけは2600円ですからね。ちゃんと手に入れてくださいよ、お金」アフレル「は、はい……ヒック！」何とかビルの外まで這い出たアフレルは、ツイッターにログインして車を呼んだ。車を待つ間、またあの二頭の馬が目に入った。

(814)

馬は立つたまま眠つていた。鼻息がふうふう聞こえてくる。ふうふう、ふうふう アフレル（……ああ生きているんだな）その馬たちは、今あそこで確かに生きていた。酔いにぼやけた意識のなかでアフレルは、何故かそう実感せずにいられなかつた。やがて車が来る。何とか体を押し込んで行き先を設定する。

(815)

ガンバール基地までは1時間以上かかるだろう。アフレルは後部座席にぐつたり横たわり、そのまま目を閉じた。アフレル（……ああ、ひどい目にあつた）視界がグワングワンする。天と地が入れ

替わる。アフレル「……お金遣いじよつ」しかしそう歎くアフレルの頭の中からぬもぬ、三ヶ月の執着はすっかり消え去っていたのだった。

(816)

翌朝。ノル口（あつひ……）ノル口はベッドの上で頭を抱えていた。ズキン、ズキン。ノル口（頭いたいっ！）ひとまず顔を洗つたり水を飲んだりしてみよう。そう思いつつノル口は自室を出る。今日は水曜日だが、祝日が入っているためお休み。こんな日に頭痛とはもつたない限り。

(817)

ノル口はいろいろ試してみたが、どうにも頭痛がおさまらない。ノル口（家に頭痛のお薬置いてあるかな？）そう思い、T-Lを開いて確認してみると。ノル口（なんじやこれーー！）ノル口のT-Lは訳のわからない政治的リプライでゴッチャゴチャになっていた。ノル口（頭痛の原因これがーー）国会議員も大変だ。

(818)

大量のリプライが一度に押し寄せると、脳内回路に負荷がかかつて頭痛のような症状をきたすことがある。特に子供に多いのだ。ノル口（こうこう時はログオフ！）ノル口は両方の耳たぶを同時にまんでログオフする。ふと思つ。ログオフしたら喋れるようになつたりして。ノル口「あーあー」！？

(819)

ノル口はあわてて口を塞いだ。ノル口（声でた……どうしよう）別にどうしようもこいつしようもないのだが、反射的にノル口は口を塞いでしまった。神は言つている、今はまだつぶやく時ではない。何故だかそう思えてならない。ノル口はあわてて自室に駆

け戻ると、ゲンお爺さんのPCを立ち上げた。

(820)

頭痛がひどいのでしばらくログオフします そうゲンお爺さんの名前でツイートしようと思ったのだが、途中でノル口の手は止まつてしまつた。ミギノウエ「やあ、やっぱりログオフしたんだね。いま君に直接リプレイしても、T-Sの流れが速くて届かないと思つたから、このタイミングを待たせてもらつたよ」

(821)

ノル口は反射的に全思考を停止させた。それが最大の防衛行動だと本能的に察知したのだ。ミギノウエ「まずは議員選出おめでとう。僕の言ったこと当たつただろ？ 君には並ならぬものを感じていたんだ。なにかこう、魂の導きみたいなものをね」 ノル口は彼の言うことをさっぱり頭に入れなかつた。

(822)

ミギノウエ「でもきっと君は困つてているんだろうね。読みきれないほどたくさん意見リプレイが来てるはずだから。それでだね、お節介とは思いつつも、それらの意見を勝手にまとめさせてもらつたよ。なあに、なんてことはなかつたさ。ただ君と近しい人たちのリストを作つただけだからね、5分もかからなかつたよ」

(823)

ミギノウエ「このリストを使うかどうかは君しだいだ。僕はどうにも信用されていないようだしね。でもこれだけは覚えておいてほしいんだ。僕は人々のよりよい未来を常に願つてているし、人の生き方について君のひいお爺さんから教えてもらつたことを、なにより心から感謝しているんだ」

(824)

ミサノウエ「それじゃあ、そつこいつ」と。またいすれ時がくればアプローチするよ。あと、僕は別に君の心を覗き見たりはしないから、そんなに心を開かせなくとも大丈夫だよ！ あと、それから、たぶんもうログインしても大丈夫なんじゃないかな。ＴＬもだいぶ落ち着いたろうしね。じゃあまた」

(825)

ノルコはミギノウエのリプレイを一通り流すと、両耳を再びつまんでログインした。そして一つ大きく深呼吸した。すうううううううう、はああああああ。ノルコ（頭痛くなくなつた……まじまじ）そして、今日一日なにして過ごしそうかと、途方にくれてしまった。ヨコ「ノルコー、朝ごはんよー？」ノルコ（ひとまずご飯なう…）

(826)

そのころ。クオ「じゃ、ジェネ先生。それじゃあ行くんだお！」ジェネ「はあーい、わくわく」弦音市近郊にある丘の上。クオとジェネは、今まさにパラグライダーで飛び立とうとしているところだった。クオ（ジェネ先生と空のタンデム……夢のようなんだおつおつおー）一人を乗せたグライダーが、一気に風をはらんだ。

(827)

ジヒネ「す」「ーい、本当に飛んだー！」クオ「まるで人がゴマ粒のようなんだおつ」そのままぐんぐん上昇し、空の彼方へ。クオ「怖くないですかお？」ジヒネ「そんなことないですよー。むしろ風が気持ちよくて眠く……」クオ「おつ、お？ ジヒネ先生、寝ちゃダメなんだおー！」

(828)

ジヒネ「……すやすや」 クオ「おつーー！」 実はジヒネ先生、ここまで来る間、眠くてしかたがなかつた。なんといつてもテートの相手は眠りのウイスパー・ボイスの持ち主、クオ先生であるのだから。飛んだら眠氣も吹き飛ぶかと思つたが、どうやらダメだつたらしい。クオ「あつ、バランスが！ おつ、おー！」

(829)

一人を乗せたグライダーは、そのまま山の中に突つ込んでいつてしまつた。クオ「ひいいい！」 ジヒネ「……むにゃむにゃ、もう食べられない」 木に引っかかつて失速し、そのままずるずると地面まで落ちていつた。クオは必死に身をよじつてジヒネをかばう。そしてお尻からドスンと着陸した。クオ「あ、つー！」

(830)

ジヒネ「むにゃむにゃ……はつ！」 流石にジヒネは田を覚ました。お尻の下でクオが伸びていた。ジヒネ「あら、どうしちやつたの……こには？」 あちこちと見回すと、一方に崖があつた。クオ「こいつ……もう少しそれたら崖に突つ込んだところだおお」 二人とも殆ど怪我がなかつたのが、まさに不幸中の幸い。

(831)

ジヒネ「……あら？」 ジヒネが何かに気づいた。ジヒネ「ここ圈外！」 クオ「ええ？」 クオは耳たぶをクリックして「」を確認する。クオ「本當だ、圈外になつてるんだお」 山奥とかでは圈外になつたりするが、まだそこまで深くは入つていないはずだつた。クオ「どうこいつことだお……？」

(832)

ジヒネ「電波障害がでてるのかもー？」 クオ「うーん。何はともあれ、森を出るんだおつ」 ジヒネ「あつ、ちょっと待つてクオ

先生。あそこ、何か変じゃない？」 クオ「なんだお？」 ジエネ
が指差した先は、ちょうど崖の付け根だつた。ジエネ「岩の形がち
ょっと変な気がする。まるで何かを隠しているみたい」

(833)

ジエネがやけにウキウキしているのを見て、クオはちょっと戸惑
つた。クオ（この人、僕よりアウトドア志向なんだお……） ジエ
ネ「ちょっと探検してみましょうよ！」 クオ「だ、だおお」 言
われてクオはジエネについていく。ジエネは岩の前まで来ると、ポ
ケットから電灯を取り出して岩の隙間を照らした。

(834)

ジエネ「やつぱり奥に空間がある！」 クオ「鍾乳洞みたいなも
のお？」 ジエネ「それにしては形が不自然だわ。ねえ先生、ちょ
うとこの岩びかしましようよ？」 クオ「ええ！ 何が出てくるか
わからないんだおつ」 ジエネ「だつて気になるじゃない！ ほら
ほら！」 クオはしづしづ岩の隙間に手を入れる。

(835)

クオ「ジエネ先生のためならエーンヤコーラつとー おつおつお
！」 クオ先生が渾身の力を込めて引っ張ると、岩は「ゴゴォン」と音
を立てて倒れた。ジエネ「わあお、先生意外と力持ち！」 クオ「
はあはあ、コツソリ鍛えてるんだお……って、おおお！」 クオ先
生は言葉を失つた。洞窟の中にはなんと……大きな箱があつたのだ！

(836)

ジエネ「宝箱！」 クオ「え、ええー？」 そんなバカなど思い
つつも、二人は箱に近づいていく。クオ「結構大きな箱なんだお。
五月人形が入りそなくらいなんだお」 ジエネ「大きい箱つて、
確かお化けとかが入つてた方よね？」 クオ「お、おー！ 開けな

いでおくかお！？」 ジュネ「まさか！」

(837)

ここまで来たら開けないわけにはいかなかつた。一人は顔を見合
わせ、お互に「うん」とうなずき合つ。そして一人で箱のふたに
手をかけた。クオ「じゃあ、いくんだおつ」 ジュネ「せーの！」
パカッ。ふたは開けられた。一人は中をのぞきこむ。ジュネ「…
……」 クオ「……」 そして何も言わず閉じた。

(838)

ジュネ「クオ先生」 クオ「だお」 ジュネ「入つてましたね、
中身」 クオ「だおお」 ジュネ「何かこう……人の形をしたもの
が」 クオ「……だお」 ジュネ&クオ「ひええええええええ
！！！」 二人は一目散にその場から逃げた。ジュネ「け、警察に
……」 クオ「知らせるんだお！！」 はたしてどうなることや
ら。

(839)

クサヨシ「おおっ、それはいいアイデアだアフレル君！」アフレル「え、ですか？」アフレルはガンバールの腕の試運転をしながら、昨夜の車の中で思いついたアイデアを伝えていた。クサヨシはやっぱり厨房にいて、ネギを刻んでいた。クサヨシ「なかなか大胆不敵なアイデアを思いつくじゃないか」

(840)

アイデアというのは、純エネルギー生命体のエイリアンを発見する方法のことだ。光と一体化した彼らを発見することは、通常の方法では不可能なのだ。アフレルは昨夜のバーで見た2頭の馬から、アイデアの着想を得た。クサヨシ「言われてみればなるほど、生命体を認識できるのは生命体以外のなものでもないわけだ」

(841)

アフレルのアイデアは単純に言つと「バイオツイッターの相互ネットワークそのものをパッシブレーダとして使用する」というものだ。アフレル「はい、生命って、どこか生命自身にしか感じることのできない『波動』みたいなものを持つていてると思ったんですよ」その着想を、昨夜馬を見たときに得たのだ。

(842)

クサヨシ「ふむふむ。さながら、われわれ自身の魂を受信機とするわけだな。いやはや、君も恐ろしいことを思いつく」アフレル「そ、ですか？」クサヨシ「ああ。だってね君、その受信機は我々自身の心の実感であって、科学的に存在を証明できる代物で

すらない。ある意味、科学への反逆、カルトと思われても仕方ない発想だ」

(843)

クサヨシの言葉に、アフレルはしたたか冷や汗を流した。クサヨシ「しかしあ、やつてみる価値はある。科学は常にそれ自身を超克していくものだからね。それに、そのアイデアならすぐに実行できる」アフレル「ええ？」クサヨシ「我々の技術力をなめてもらつてはいけないな、2時間以内にプログラムを組み上げてみせよ」

(844)

クサヨシは「すたたんつ」と鮮やかにネギを刻み終えると、その場で割烹着を脱ぎ捨ててレーダーシステム開発室へと向かつていった。アフレル「ほへえ……」アフレルは鉄の腕をがつこんがつこん動かしながら嘆息した。イイヅカ「おーいアフレルもういいぞ、昼飯にしようぜ！」ハツブル「腹へつたネー」

(845)

アフレル達は食堂へと向かうムーブウォーキに足をかける。イイヅカ「なあアフレル、言いにくければ言わんでいいんだが、昨日のやたら長いログオフは一体なんだつたんだ？」アフレル「え？ 気になる？」イイヅカ「そりやあな。殆ど半日ログオフしてたんだぜ？」ハツブル「ファミリーとナニがあつたん？」

(846)

アフレル「いや、家族とはうまくやつてるよ」イイヅカ「ならいいんだが」ハツブル「イインダガ」そしてアフレルは少しまでからこう言った。アフレル「なんたつて僕の奥さん超美人だし」しばしポカーンとする一人。イイヅカ「こ、このやろお！」

ハップル「やつぱりゼツリンだつたんだなー?」

(847)

アフレルが職場で先輩に頭をグリグリされてゐる所、妻のヨコはリビングでテレビを見ていた。テレビ「本日の午前、眩音市近郊の山林で意識不明の状態の男性が発見されました。男性は洞窟の中に放置されていた箱の中から見つかりましたが、命に別状はないもようです。眩音市警察にて現在、身元の確認が進められています」

(848)

ヨコ「あら、怖いわねえ。一体なにがあつたのかしら?」 テレビ「それでは第一発見者のインタビューをご覧ください。クオ』は、箱の中に入つていて本当にビックリしたんだおつ、誰かの手によつて隠されたような感じだつたんだおつ。あ、カメラマンさん眠つちやだめなんだおつ』」

(849)

テレビ「ジエネ『なんというかこひ、岩盤でフタをしてあつたんですね!』 クオ『そ、そつなんだおつ、結構重かつたんだおつ。ちなみに僕たちはテート中だつたんだおつおつお』』 ヨコはふうむと唸りつつ、お茶を一口すすつた。ヨコ「何はどうあれ、怪我が無くてよかつたわねー』 気がつけばテレビとお喋りしていたヨコだつた。

(850)

ヨコ「ふつ……なんだか退屈」 ワクは祝日のガンバールフェスティ行つているし、ノルコは自室にこもつて色々人の意見に目を通しているらしい。ヨコも何か手伝つてあげたかつたけど、何か聞かれたときに答えてあげる以上のこととは出来ないのだった。ヨコ（あくまでも、ノルコが決めなきゃいけない問題なのよね……）

(85-1)

三口（やうだ！ ホウ君は今なにをしているかしらー！？） すつ
かりホウの友達になつた気持ちでいる魔性の女三口は、チカコさん
にリプライしてみた。チカコ「あら、三口さんこんにちは。ホウな
らさつき出掛けていきましたよ？ なんだかとつても焦つて
いただつたんだけど、何かしらね？」

(85-2)

三口「え、そなんですか？ お茶にでも招待しようかと思つた
んですけど」 チカコ「うふふ、うちのホウを氣に入つてもらえて
何よりですわつ。ホウは午前にGPT-Lを見て氣絶して、田を覚ま
したかと思つたら飛び出行つたんですよ」 三口「まあ……それ
はちよつと氣になりますねえ」 チカコ「ほんとにねえ」

(85-3)

チカコ「やうやう。今ですね、アップルパイ焼いてるんですね？
もしあ暇でしたら食べにきませんこと？」 三口「えつ、良いん
でざますか？ 我が家にも今ちょうど、良いお茶がござりますのよ
？」 チカコ「まあまあそれは！ 是非と遊びにおこりしあそばせ。
ホウもそのうち戻つてくるでしょう、おーほほほ」

(85-4)

三口とチカコが優雅なティータイムを画策しているひる、ホウは
近くの公園に向かつて猛ダッシュしているところだった。ホウ「く
つ……これは大変なことになりそうだ！」 GPT-Lが僕を裏切るな
んて！ 一体どういうことなんだ！」 GPT-Lが裏切つた？ そ
れは一体どういう状況なのか？

(85-5)

ホウはGPTLを見ることにより、大まかな未来の出来事を知ることが出来る。しかし今回、予想外の事件がおきたのだ。そう、眩音市近郊の山林で見つかった意識不明の人物のことである。ホウ「誰だ、一体誰なんだ。GPTLをかき乱しているやつは！」ホウはGPTLのかく乱の根源が、近くの公園に現れることを予知していた。

(856)
ホウは全体力を注ぎ込んだ猛ダッシュにより、約3分で公園にたどり着いた。ホウ「はあはあ……」何の変哲もない、ただの公園。ブランコがあつて鉄棒があつて砂場があつてベンチがあつてトイレがある。ホウ（どうやら、まだ来ていないうつだ……ディッセスター）ホウはベンチに腰掛けて『その者』の訪れを待った。

(857)
そのまま3分の時が経過した。まだ誰も来ない。木の上で小鳥がピィピィさえずっている。ホウ（……一体相手は誰だ……そして何が目的だ）ホウにわかっていることは唯一つ、正体不明の誰かが、人知れず人類の営みに干渉してきているということだ。その目的も、手段さえもわからない。

(858)

ホウ（まさか……地球外文明の干渉？）どうにも人間の仕業ではなさそぐだとホウは思う。今の人類の文明レベルでは到底不可能なことが起こっているのだ、と。地球外生命体……もとい、エイリアン。ホウ（なんて荒唐無稽な……むつ！）その時、公園の入り口に人影のようなものがよぎった。

(859)

ホウ（……あれは）人影はそのまま公園の中に進入してきた。

背の低い、小太りなシルエット。しかしその存在感は尋常ではない。切れ長にして眼光するどい目。恐ろしい程ふくよかな福耳。ホウ（確か彼は、ノルコ君のクラスメートの……）カスガイ・ヤマオ何故こんなところに？ ホウの表情が、いつそう険しくなった。

(860)

そのころ、ノルコは自室で煮詰まっていた。ノルコ（あれがあれであれなつてぱつぱらぱーのひーーだ！） 色んな人の色々な意見を読み比べるうちに、ノルコは血分が今どこにいるのかさえわからなくなつてしまつた。ノルコ（頭痛い……痛くないけど痛い） そして頭をかかえてうんうん唸つた。

(861)

ゲンお爺さんの友達の、お爺ちゃん三人組からは「トイレは心のオアシスじゃからＴＬ設置はイカン！」との意見。ツイッター互助会のチカラさんは「トイレで起こつた犯罪が原因で互助会を尋ねてくる人もいる、賛成」との意見。ユウタ君からは「いつでもみんなと繋がつていられる方が安心だよね、賛成！」とのご意見。

(862)

アーフレルお父さんからは「うーん、一人でじっくり考え方できる場所つてやつぱり貴重だと思うから、ＴＬいれるのは嫌だなあ、反対」との意見。お父さんの上司のクサヨシさんは「全ての発明のトイレより生まれる。トイレへのＴＬ導入は、人類の発達過程に甚大な影響を及ぼすだろう。保留」と、どっちつかずの意見。

(863)

ウメナお姉さんからは「ゲンお爺さんならきつと反対したろうね。何事も慎重な人だったからね。だから反対」との意見。クメゾウお爺さんからは「俺は別にどっちでもいいなあ。要はみんなの心がけしだいだろうが、保留」との意見。てんでんばらばら自由自在、と

きおり支離滅裂。ノル口（……「ー！ みんな好き勝手言つて！）

（864）

ノル口はいい加減疲れてしまつていて。ノル口（気分転換しないと……あつ） 部屋のT-ーが壊れていることを思い出した。買いに行かなければ。ノル口は上着を着ると、壊れたT-ーをもつて玄関に向かつた。ノル口（お母さんに言つていかなきや） そう思つてリビングを覗くもいなかつた。キッチンにもいなじようだ。

（865）

ノル口（寝室かな？） お昼寝してたりだつじよつ？ そつ思いつつヨコとアフレルの寝室を覗く。ヨコ「ふんふんふん あらノル口、どうしたの？」 ヨコはお化粧をして出掛けの準備をしていた。服装からみて、どうやらお茶会にでも行くみたいだ。ヨコ「お母さん、これからちよつと出掛けてくるからね」

（866）

ノル口は壊れたT-ーをヨコに見せた。ヨコ「あら壊れてる。買つてこなきやね」 ノル口はそこで手を大きく上げて（自分で買ひに行く！）と宣言した。ヨコ「え？ 自分で行くの？ そうね、すぐそこのコンビニで買えるしね。買ついたらお母さんが戻つてくれるまでお留守番してくれる？」 ノル口は大きくうなずいた。

（867）

コンビニは歩いて2分もかかるない場所にある。ノル口は壊れたT-ーを回収ボックスに入れると、新しいT-ーを手にとつた。色んな絵柄のものがあるが、今回はイヌの絵が描かれたものにする。耳たぶクリックで部屋用T-ーの商品情報を確認すると『仕様変更あり』とのロゴが赤々と点滅した。

(868)

ノルコ（なんだろ？） わたそく調べてみる。どうやら壁にペタッと取り付けるテープの部分が変わっているらしい。ノルコ（子供がガムと間違つて食べても大丈夫な粘着テープになりました……？） ちなみにペパーミント味であるらしい。ノルコ（そんなもの誰が作ったのかな？） ノルコはさらに調べてみる。

(869)

ノルコ（…？） 食べられる粘着テープの開発者はイズミ・アフレルとなっていた。ノルコ（お父さん！？） ノルコはしば口をあんぐりと開けたままポカーンとしてしまった。ノルコ（これってすごいこと？） いや、きっと凄いことなんだろ？ 日本中の部屋丁しに使われるような品物を作ったのだから。

(870)

家に帰る途中、ノルコは何回かそのＴＬ装置を眺めた。そしてその度に言い知れぬ感慨に打たれた。ノルコが小公園の前を通り過ぎようとしたとき、なにやら騒ぎ声が聞こえた。ホウ「ヘイボーイ！ そんな耳たぶゆらしてどこに行くつもりだい？」 ノルコ（ホウさんの声だ！） そして公園を覗き込んだ。

(871)

ノルコ（あれは……ヤマオ君？…） ヤマオとホウが公園のトヨレの前ににらみ合っていた。ノルコにとつてそれは、まるでシユールリアリズム絵画の如き不可解な光景に見えた。ホウ「僕にわかるはずのことがわからなくなつた！ でもボーオイ？ 君がその原因だつてことはわかってるんだぜ、ビバーチェ！」

(872)

ノルコ（何を言つているんだろう？ ヤマオ君が何かしたの？）

ヤマオはホウの言葉を事も無げにやり過ごし、いつもの変わらぬ微笑を満面にたたえていた。かすかに後光が差しているかのようだつた。ホウ「なんとか言いたまえよボーイ？」 ヤマオは何も答えなかつた。その代わり ノルコに視線を向けた。

(873)

大出力レーザーの如く強靭にして確固たる視線に、ノルコはおでこの真ん中を打ち抜かれてしまつた。ノルコ（うひやう？！）そのままビーンと硬直する。ホウ「……ふふ、このタイミング。偶然とは言ひがたいなボーイ&ガール？」 するとヤマオは招き猫のような仕草で、ノルコにこづちへ来るよう手招きした。

(874)

ノルコは力チコチとした動作で一人のもとへ歩いていった。ノルコ（一体何をしているの？！） 聞いてみたかつたが呑けない。もちろんヤマオも呑かない。ホウ「そして僕は喋れても呑けない」奇しくも全員ツイート能力が欠如していた。ヤマオ「……」 ホウ「……」 ノルコ「……」 三人はそろつて空を見上げた。空は青かつた。

(875)

ノルコ（この状況……一体どうなるんだろう？） ノルコがそう思うやいなや、ヤマオが自らの両耳をつまんだ。ログオフしようとうのだ。そしてノルコをジーと見つめてきた。まるでノルコにもログオフを進めているかのように。ノルコ（……てやんでもえ！） ノルコは半ばヤケクソ気味にログオフした。

(876)

ノルコのログオフを確認すると、ヤマオは何も言わずトイレに向かつて歩いていった。二人ともそれに続いた。ノルコは引き返すな

ら今しかないと思つた。この先トイレに入つて、そこで『なに』とも起らない』わけがなかつた。ノルコ（……それでも） それでもそこはトイレだつた。今のノルコにとって、最も重要な場所だつたのである。

(877)

ヤマオは多用途トイレの扉を開けた。体が不自由な方などのために、広々としたつくりになつてゐる。もちろんT・L装置を含むすべての監視・記録装置が設置されて『いなし』。ホウとノルコが中に入ると、ヤマオはその扉を閉め、そして鍵をかけた。これで完全な密室。情報工学的に言つて、どこへも繋がつていない場所が成立した。

(878)

ヤマオ「やあ、わざわざ『めんね。ノルコちゃん。そしてホウさん』 ノルコ（！？！？） 驚天動地の出来事だつた。ホウ「…………ほほう！」 ヤマオ「ノルコちゃん、声を出して驚いてもいいんだよ？」 ノルコ「なにごとだわ！？」 そして自分が喋れることをヤマオが気づいていることに気づいて、さらに驚いた。ノルコ「ほんじやらゲー！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4987o/>

ツイートピア

2011年10月12日16時49分発行